

目次

巻頭言

観光亡国論を乗り越えるために・・・・・・・・・・・・・・・・・・	北海学園大学教授	手塚 薫	1
----------------------------------	----------	------	---

奥尻特集

学芸員課程実習生受入雑感その4・・・・・・・・・・・・・・・・	奥尻町教育委員会事務局学芸員	稲垣 森太	3
奥尻島での5日間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	人文学部日本文化学科3年	西須 汐音	7
奥尻島での学び・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	人文学部日本文化学科3年	高野 風音	11
奥尻島研修で得たこと・・・・・・・・・・・・・・・・・・	人文学部日本文化学科2年	栗原 一華	16
北海道における四箇散米行列の伝播・・・・・・・・・・	文学研究科 修士課程2年	蟬塚 咲衣	20

課程科目学生レポート

ミニミュージアムのねらいと講評・・・・・・・・・・	北海学園大学教授	手塚 薫	29
博物館経営論 ミニミュージアム制作を終えて・・・・・・・・	人文学部日本文化学科3年	上田 望永	31
博物館経営論課題 ミニミュージアム制作を終えて・・・・・・・・	人文学部日本文化学科3年	加藤 樹香	37
ミニミュージアム制作―「竹の世界」展を終えて―・・・・・・・・	人文学部日本文化学科3年	竹花美恵子	43
博物館経営論「ミニミュージアム」制作を終えて・・・・・・・・	人文学部日本文化学科3年	中村 美南	51
2021年度 博物館資料論 講評・・・・・・・・・・	北海学園大学講師	水崎 禎	58
博物館資料ドキュメント 『篆刻(てんこく)～「みこと」』 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	人文学部日本文化学科2年	宗廣みこと	60
博物館資料ドキュメント 『春日大社「鹿みくじ」の鹿の置物』 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	人文学部日本文化学科1年	吉嶋 大翔	65
博物館資料ドキュメント 『カメラ～ミノルタ HI-MATIC7』・・・・・・・・	経済学部1年	伊藤 赴	70
博物館資料ドキュメント 『スタンドグラスキーホルダー「ピアノ」』 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	人文学部日本文化学科2年	齋藤穂乃花	78
博物館資料ドキュメント 『p Trumpet』・・・・・・・・	経営学部経営学科1年	渡辺 彩花	83
博物館資料ドキュメント 『ペンライト』・・・・・・・・	人文学部日本文化学科1年	坂本 渚月	89
博物館資料ドキュメント 『鍵の形をしたキーホルダー』 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	人文学部日本文化学科1年	吉川 里咲	94
編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・			99

* 学生レポートの掲載にあたり、体裁を整える必要から表記の統一などの手直しを行っています。

巻頭言

観光亡国論を乗り越えるために

北海学園大学教授 手塚 薫

日本経済を太平洋戦争後長くけん引してきたのは、製造業である。しかしグローバル経済のなかで生産拠点の海外移転など産業の空洞化が進行し、製造業の力が低下しているのも事実である。そのような情勢下で、2020年5月「文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光の推進に関する法律（文化観光推進法）」が第201回国会（常会）において成立し、令和2年法律第18号として公布され、同年5月1日に施行された。この文化観光推進法は、文化の振興を、観光の振興と地域の活性化につなげ、これによる経済効果が文化の振興に再投資される好循環を創出することを目的としている。文化庁HPによれば、来訪者が学びを深められるよう、歴史的・文化的背景やストーリー性を考慮した文化資源の魅力の解説・紹介を行うとともに、来訪者を惹きつけるよう、積極的な情報発信や、交通アクセスの向上、多言語・Wi-Fi・キャッシュレスの整備を行うなど、文化施設そのものの機能強化や、さらに地域一体となった取組を進めていくことが必要とある。この法律は、博物館・美術館・遺跡などの文化資源活用施設と観光協会、観光地域づくり法人、旅行業界からなる文化観光推進事業者を連携させ、より親しみやすく楽しめる仕組みをつくることで地域の魅力を向上させ、文化・観光・経済の好循環を生み出すことを企図している。その機能の中核を担うものを文化観光拠点施設とよぶ。国内の博物館利用者数は、訪日外国人の来館もあって上昇傾向にある。東京五輪が開催予定だった2020年（実際には2021年夏開催）に外国人観光客4,000万人を実現しようとする安倍政権による数値目標が立てられた。現在はコロナ禍の影響があるが、その終息とともにインバウンド対応が求められることは疑いがない。観光需要の伸びは、文化資源の価値をわかりやすく伝える努力を向上させ、地域経済を活性化させ、文化資源を保存し、後世に継承するために必要な社会基盤の整備を促していく。まさに、文化観光推進法が目標とするのは、文化を起点とした観光と経済の振興、これによる経済効果が文化に再投資される好循環を創出することにより、地域における持続的な文化振興と経済発展を実現することにほかならない（中尾智行2021 共生する文化と観光―「文化観光推進法」の成立と取り巻く議論―『文化遺産の世界』38）。

世界の観光地では、オーバーツーリズム「観光過剰」という用語が盛んに使われるようになってきている。地域住民や観光客が、地域生活や観光体験の質が看過できないほど損なわれている状態を指す。たとえば、中国雲南省の「麗江の旧市街」は、地域住民の生活空間がそのまま世界遺産になっているかつて美しい街であったところである。地域住民が生活用水として使っていた水路は、世界遺産に認定される要素ともなっていたが、登録後に観光地化されたことによって、水が汚染され、騒音もひどくなるなど、環境悪化にともない、古くからの住民は郊外に脱出し、それと入れ替わるように入り込んだ観光業者は、伝統的

な家屋を改装し、飲食店や土産物屋に変えてしまった。外観は一見かつての古い街並みの装いをとどめているように見えるが、伝統工法によらない現代的な手法を駆使し、素材も本来の物とはかけはなれている。

伝統文化の保持には2つの方法がある。1つは、能楽のように昔の様式やしきたりを、形を変えずに守っていくことであり、もう1つは、核心を外さずに時代に合わせて姿・形を柔軟に変化させていく方法である。しかし、どちらの手法にもリスクが潜んでいる。前者の場合、時に文化を化石化させ、現代人にとって無意味なものにする危険があり、実際には生きていない文化の「ゾンビ化」を助長し、後者の場合、核心への理解と尊重がなければ、本質とは異質なモンスターを生み出し「フランケンシュタイン化」へと進む懸念があるという（アレックス・カー／清野由美 2019『観光亡国論』中央公論新社）。

昨年世界遺産に登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」は、北日本の縄文文化の特質が世界的に広く認知されたことで、新たな観光客の誘致につながる事が確実視されており、歓迎されるべきことではあろう。現代の私たちに直接的な影響を及ぼしていない先史時代の遺跡なので、伝統文化の保存ほど神経質にならなくてよいのかもしれない。しかし、登録後には三内丸山遺跡などでおなじみの大型掘立柱建物や長さが30mを超える大型竪穴住居が珍しくないとする特異な縄文文化観が独り歩きする恐れはないのだろうか。「世界遺産条約履行のための作業指針」第86項には、考古学的遺跡の再建は例外的な場合においてのみ正当化され、再建は完全かつ詳細な証拠に基づいて行われた場合のみ許容され、憶測の余地があってはならないとの記載がある。当時の柱穴しか存在していないような構築物の上屋構造に関しては、研究者の間でも見解の相違がある場合がほとんどである。多額な経費をかけて既に存在しなくなって久しい構築物を復元することは「フランケンシュタイン化」の危険をはらみ、時代考証という点でも、持続可能な社会の実現という点でも、必ずしも適切なものとはいえない。

函館市は「北海道・北東北の縄文遺跡群」構成資産の1つである垣ノ島遺跡で、2022年度に拡張現実（AR）、コンピューターグラフィックス（CG）、デジタルサイネージなどを活用した解説を導入するという。同遺跡では竪穴式住居を復元しておらず、デジタル技術で縄文人の暮らしを観光客や市民に伝えるという画期的な取り組みがなされるという。研究の進展とともに内容を更新することもでき、また環境にも配慮しているので、海外を含む観光客の受け入れ対応策の1つとして、こうした流れが今後主流になっていく可能性があるだろう。

学芸員課程実習生受入雑感その4

奥尻町教育委員会事務局 学芸員 稲垣 森太

1. はじめに

一昨年（2020年）の1月より国内に広がり出した新型コロナウイルス禍は、当年中に市中に広がり、国内はもとより、全世界規模に広がった。当初のパンデミックではないとの見方も希望的観測に過ぎず、その後ウイルスは次々と変異して生き延びようとし、人類は場当たりの対策に明け暮れるしかなく、その影響は生活のあらゆる面に及んでいる。

2020年の実習生受入れについては様々方策を考えていたが、不運にも9月の受入時期に大学在籍者に患者が発生したとの報が広まり、見送りするしかなかった。島内では未だコロナ患者の発生を見ていなかった時期（その後11月に確認され、大きく報道されたのは周知の通り）であり、当時の危機感では致し方ない状況であった。

コロナ2年目となった2021年は、5月連休明けから徐々に世間が騒がしくなり、7月には緊急事態宣言下での東京五輪が開催されるという、ある意味実験的な試みがなされ、人心は大きく揺れ動いた。8月には北海道にも蔓延防止措置がとられたが、方法を様々検討した結果、最終的には受入許可が出て、2年ぶりの実習生受入となった。

2. 経過

今回は8月11日～15日までの行程となった。11日、筆者は例のごとく、奥尻港でフェリーが着くのを待っていた。一行は、直前に抗原検査陰性確認の上で夜明け前に札幌を出発、途中乙部町の海沿いの国道が大規模土砂崩れで不通となっており、その迂回路把握が遅れ、江差港9時40分発のフェリー乗船に支障を来す直前であったと聞かされて大変驚かされた。奥尻研修中のアクシデントはいわば恒例行事であるが、今回もコロナ騒動含めてかなりリスクな展開となったのである。

一行は無事上陸し、手塚先生とも久しぶりの再会となったが、お互いにコロナ下での調整に苦労していたこともあって、すでに感慨深いものがあった。参加学生は4名で修士2年の蟬塚さんはお馴染みだが、他3名は初上陸で、リーダーは3年の西須汐音さんであった。港周辺で昼食しながら行程を確認し、教委を訪問後、早速青苗地区にある奥尻島津波館へ向かった。

ここでは、「奥尻津波語り部隊」の竹田彰さんに体験談を聞かせてもらった。氏は1993年の地震後に町に設置された災害復興対策室の係長として活躍し、その後は津波館建設を担当、町教委事務局長を経て総務課長を最後に退職した方である。いわば地方行政の専門家あって、退職後もその経験を踏まえて、地震災害からの復旧・復興の実際を各地で講演して回っているのである。また、青苗の言代主神社役員をも務めている。竹田さんのお話は3時間ほどにも及び、話し手も聞き手も真剣に向き合った数時間だった。生の声を後世に伝える、まさに語り部であった。

過去の話であっても、良いことや楽しいことは話やすく、聞き手も質問など含めて聞きやすいが、不幸な出来事や事件・事故となると聞き出しにくいことが多々ある。奥尻の震災に関わる事柄は語りにくい部分も多かろうと容易に想像できるが、二度と起きてほしくない経験だからこそ、語り継いでいくべき出来事だと思う。今回は行政サイドからの語りを聞いたが、次回は民間サイドからの語りの場を設けたいとも思っている。今後、語り継ぎをどのように継続して行っていくのか、後世に何をどのように残していくのか、経験者が減っていく現実の中で、引き続き模索していかねばならないと感じている。

そのような模索の中で、津波館の展示物に 2021 年 4 月から、いわゆる「被災資料」を追加した。追加したのは、海底に 20 年間眠っていた人形と鍵盤ハーモニカ、救援物資の段ボール箱とその残りなどである。同館にはこれまで、当時に被災を受けた現物資料（一次資料）がほとんど展示されていなかった。元来収集されてこなかったという経緯もあるが、同館の当初の展示基本計画においては、主にジオラマ模型と児童の作文にて観覧者に訴えかける手法を採り、10 分ほどの映像にて地震と津波のメカニズム及び、復興までの経過をダイジェスト的に見せていた。そもそもの設置目的が、資料の収集・保管・活用が基本である資料館としてではなく、地震から復興した島の、島内観光の立ち寄り所の一つとしての位置づけがあったことも館運営に影響している。実相が伝わりにくいという声があり、2 年後に震災当日からの写真パネルが追加されているが、それ以後の 18 年間はほぼ展示物の変更はなかった。一次資料を追加した理由として、開館後丸 20 年が経過し、当時の体験者は鬼籍に入る方が多くなり、悲しみの出来事も歴史の一部になりつつある。忘れていきたい悲しい思い出であるのは事実であるが、島民としては忘れまじとして後世に残していく責務もあると感じたからである。最大の被災地において、被災に関する歴史を傳承していく難しさを抱えながらの活動を継続していかねばならない。

今回の参加学生には語り部の話と、新しい展示物を見ることとなり、今までの参加学生よりも北海道南西沖地震がもたらしたものをより多く感じ取ってもらえたものと思う。それぞれの中で受け止めてもらい、人生の糧となれば幸いである。

12 日と 14 日は、島の北端の稲穂地区にある、稲穂ふれあい研修センター歴史民俗資料展示室での実習作業となった。作業はお馴染みの寄贈資料の一時整理と新聞の切り抜き作業である。前者は、研修直前の 8 月 4 日に島内東海岸の球浦地区のお宅から一括で寄贈された資料群で、漁家であったのでガラス製浮き球が多数あり、石見焼きのカメ（甕）も多かった。その他にはマサカリ（鉞）、薬箱、刃釜などもあった。寄贈者が実家の片付けの際に家財を処分することとなり、一括して廃棄することなく、学芸員に引き取りの打診があったものである。元々知人同士であったということもあるが、声を掛けてもらえてありがたいことであった。後者は、学芸用にスクラップしているもので、テーマは「奥尻」、「震災」、「文化財」、「戦争」、「雑学」など多岐にわたった。どのように行ったかについては、参加学生らのレポートを参照していただければと思う。

13 日は、青苗の言代主神社例大祭に参加した。同神社では元来、猿田彦と神輿の行列、恵比須山の山車引き回しが 2 日間に亘って行われるのであるが、今般のコロナ下でそれも 2020、2021 年と中止になり、2019 年も都合により本来規模の巡行ではなかったため、すでに 3 カ年縮小開催となっている。これら奥尻島の神社祭りの盛衰や存廃問題については、

蟬塚さんらの論考に詳しいので参照してもらいたい。とにかく、地元の人間としての立場としては、伝統的行事の火を絶やしたくはないという気持ちが先に立つものの、地域の持つエネルギーをどのように高め、また持続させていけるか、自分事として考えても簡単なことではないと実感している。他の町でも、そこの学芸員が地元の祭りに積極的に加わり、伝統芸能を維持している事例がよく見られる。職業柄、学術的興味関心や使命感のようなものもあろうが、純粹に楽しむ心を持って参加しているからこそ、継続するものと思う。私もそうありたいし、「令和4年は、コロナだろうが何だろうが、神輿を出したい」と語った青苗神輿保存会の明上会長の心意気に賛同したい。

続いて付近にある、北海道指定史跡の青苗砂丘遺跡について解説を行ったのだが、ここにはちょっとしたエピソードがある。というのも、筆者が在学中の2002年12月に、この遺跡から掘り出された古代人骨を鑑定する作業に携わったことがあったのだ。この頃、大学2年生の夏休みに初めての発掘現場作業をアルバイトとして体験し、年明けた3月中には、出土品の整理作業を道埋文センターでボランティア作業（授業として単位を受ける）として受け入れてもらう予定になっていた。このように、この年は筆者にとって遺跡調査との関わりをもつ元年というべき年で、その後考古学業界でお仕事として食い扶持を稼ぐことになったきっかけであった。砂の塊になった物から人骨部分を残して取り出す作業は難航し、砂を取ると全体が崩れてしまって容易ではなかった。人間の骨と長時間向き合ったのは初めてのことで、新たな分野に触れたような気分であった。当初、1400年前のオホーツク文化期の所産と思われたが、結果は40代の女性で、縄文時代以来島に居住していた人類（島には8000年前の縄文時代早期から人類の痕跡がある）の末裔であると判定された。この話のオチとしては、その後約10年後に奥尻島に赴任することとなったので、この女性との良縁であったのだろうと時々思うのである。何事も出会いは偶然、きっかけは唐突である。

3. おわりに

今回の研修は、内容の組み立てよりも、実施に至るまでの調整が一番の難題であって、とても苦勞した。コロナが流行して2年余りたったが、その時、その時で捉え方や危機感が違っていた。未知の物に対して、世相に左右されるのは致し方ない事とも思うが、離島故に、さらに難しい状況に陥ったのも事実である。同じく学内での調整にあたった手塚先生のご苦勞も多大であったと思うし、結果的に無事に終了できて大変安堵している。

最後に嬉しい事が一つ。2017年以来足かけ5年に亘って奥尻島の研修、調査に訪れていた蟬塚咲衣さんが無事に修士課程を卒業し、春より学芸員の職を得たとの報に接した。島内調査の折、「稲垣の後輩と思えないぐらい、良く出来ている」と言って島の人がよく笑っていたが、私も確かにその通りだと思う。調査の際やその後のメールのやりとりにおいても、鋭い指摘や細かい質問が多かった。それは物事に対する追及心の現れであって、学芸員に求められる本質的な素養であることは間違いない。吉報が届いたのも、第一は本人の努力の賜であるが、手塚先生のご指導と学友にも恵まれたことが長らく研究に没頭できた要因だろう。何より、ご家族の暖かい支援もあったろうから、さぞお喜びのことと思う。

個人的には、学部時代に切磋琢磨していた佐々木理子さんの存在も大きかったのではないだろうか。時に良き友人として、時に競うライバルとして、お互いを高め合っていた姿に、出来の良くない先輩の私は、頼もしく、また羨ましくも思った次第。今後一層のご活躍を祈念いたします。



竹田さんのお話を聞く



青苗言代主神社例大祭



寄贈品の一次整理



新聞切り抜き作業

奥尻島での5日間

人文学部日本文化学科3年 西須 汐音

1. はじめに

筆者は2021年8月11日から8月15日までの5日間、奥尻島で実施された学外研修に参加した。新型コロナが流行しているため教員を含め5人と少人数の研修となったが、2年ぶりに行われた奥尻での研修に参加できたことや、リーダーとしての経験を積む機会を与えていただき嬉しく思う。5日間の活動として1日目に津波館で語り部の竹田さんからお話を伺い、2日目から4日目は神事の参加や稲穂ふれあいセンターでの実習や島内の神社を訪れ、最終日である5日目は帰宅のための移動のみに時間を使った。行きも帰りも天候不良によるフェリーの欠航が心配されていたが、何事もなく無事家路につくことが出来た。今回の研修の中で学んだことについて下記で述べていく。

2. 津波による災害

1日目は奥尻島へ移動し昼食をとった後、津波館(写真1)で語り部の竹田彰さんから1993年7月12日に奥尻島が体験した北海道南西沖地震時の津波による災害と復興についてのお話を伺ったことで当時の状況や復興について、また被災後に変化した神社の在り方を知ることができた。2012年には被災を受けた人達で『奥尻島津波語りべ隊』を結成され、お話を聞きたいという要請があればその地域に語りに行くのだと



写真1 津波館

いう。災害について語っていく中で「語り部は嘘をつかないことが大事」というお言葉を聞き、話を盛ることなくありのままを伝えることの重要性についても改めて実感した。

他にも竹田さんからは「昨今は新型コロナウイルスの影響でお祭りを開催できていない神社が多く、維持費が足りない小規模な神社がなくなりかけている。お祭りを行なえないままだと子供の思い出作りの場所が消えてしまう上に神社もなくなれば街の活気は衰えていく。神社は宗教ではなく祈願の場である」というお話を伺い、神社が本当になくなってしまいう前に、人々が神社の必要性を見直すことが求められていると感じた。

3. 2日目の研修

2日目はまず谷地地区にある佐藤義則展示室に行き、奥尻島出身のプロ野球選手である佐藤さんのユニフォームや使用していた道具類の展示を見学した。その後、老朽化が進んでいる本殿を見るために宮津弁天宮(写真2)に赴いた。写真2の手前に写っている急勾配な階段を下がり、もう一度上がった先に見える赤色の屋根が宮津弁天宮である。近くで

見ると赤い塗料が剥がれている箇所も多く、木が折れているところもあった。周囲は海に囲まれており、高いところから見渡す景観がとても良かったため観光客も地元の参拝者も少ないこのままの現状を非常にもったいなく感じた。次に、稲穂ふれあい研修センター歴史民俗資料展示室(写真3)で学芸員の稲垣森太さんのご指導の下、新聞記事の切り貼りをする人と資料整理をする人に分かれて実習をした。筆者は資料整理の実習を行わせていただき、ノートに資料のイラストと計測した寸法を記録した。



写真2 宮津弁天宮



写真3 稲穂ふれあい研修センターでの資料整理実習の様子

4. 青苗言代主神社での本祭

3日目は青苗言代主神社で本祭に参加させていただいた。神事に参加したことは初めての経験であり、祝詞を奉読しているときの、実際に参加しなければ分からない荘厳な空気に触れることができるととても嬉しかった。また、保管されているお神輿も見せていただくと木彫りの龍と鯀の飾り(写真4)があった。鯀が地震を起こす魚だと考えられているために2頭でお神輿を押さえていると教えていただき、地震が起これないようにとの祈願の気持ちが込められていることを知った。その後の直会は、コロナ対策のため簡素に行なわれ、奥尻の神社の現状について昔と比べて今は子供が少なく、お神輿の担ぎ手不足にも悩んでいるというお話を伺った。お神輿の肩を入れて担ぐ部分の長さは当初3尺で作る予定だったがそれだと見栄えが小さくなってしまったために3尺5寸で制作してもらったことで総重量が重くなり、近年では20人前後で担いでいる。16~17人だと担ぐことが出来ず、タイヤのある台に乗せたなら5、6人でも動かすことができるという。



写真4 お神輿の鯀と龍の飾り

5. 奥津神社での本祭

4日目は島の北部にある稲穂ふれあい研修センターへ行く途中で木に囲まれた中に鳥居が立っているのに気づき、鷗崎神社(写真5)へ立ち寄った。階段を上っていくと曲がりくねった木が道へはみ出しており驚いたが、このように緑が生い茂っていると非日常感があった。このように奥尻島には景観が魅力的な小さい神社が多い。

稲穂ふれあい研修センターでは引き続き1日目と同じ資料整理と、海に浮かべるガラス玉の周囲に巻かれている紐の除去を行なった。紐は古くなっていて引っ張ると簡単に崩れるため、資料に傷をつけないように最新の注意を払いながら取り除き最後に布で拭いて綺麗にした。



写真5 鷗崎神社

奥津神社(写真6)の本祭では、スピーカーから四箇散米舞の音楽が流れる中、1人1人前に出てその場で榊を神主から受け取り奉納した。青苗言代主神社の本祭と同一の神主が1人で祝詞を唱え太鼓を叩き、神事が終了した後に行われた直来で、本祭やお神輿に関してのお話を神主から伺った。昔、本祭中の音楽はCDではなく実際に笛を吹いていたが、何十年も前にその笛の名人がいなくなってしまい、笛の技術は伝承していくことができなかったという。吹いている人から実際に伝承しようと習ってはみたものの上手く吹けずに伝承を途切れさせてしまった、とおっしゃっていた方もいた。太鼓はリズムよく叩けばいいが笛はそういう訳にはいかないということで、本祭中はCDで四箇散米舞の音楽を流しているのだという。神主は直来の中で、今年も新型コロナウイルスの影響でお神輿を出すことはできなかったが、来年こそは必ず出したいと強く主張されていたのが印象に残った。青苗言代主神社と同じように、奥津神社でも担ぎ手不足が深刻な問題だが、要所で担ぎ、後はトラックの上に乗せて見せ歩く形でお神輿を出す年もあったという。全国的にお祭りの担い手不足が課題となっているため、お神輿の出し方もこのように変わりつつあるとのことで感慨深かった。



写真6 奥津神社での本祭の様子

6. おわりに

今回は新型コロナウイルスが流行している中での研修となったため、手指の消毒やソーシャルディスタンスなど細心の注意を払って行動した5日間であった。特にお店での食事を控えるためにコンビニエンスストアを利用することもあったが、稲垣さんから何度も食事の差し入れまでしていただいたことは本当に有難く、その温かいお人柄とご配慮に感激した。心より感謝申し上げたい。フィールドワーク特有のアクシデントもあった中、手塚薫先生と学生メンバーに助けられて研修を終えることができた。リーダーとしては不手際な点もあったかと思うが、筆者を含めメンバーそれぞれが今回の研修を元に、今後の勉学や研究にその体験をいかにして生かせるかを常に心がけていきたいと考えている。

5日間の研修を通してお世話になった奥尻町教育委員会事務局学芸員の稲垣森太さん、旅館での食事の際にはご厚意で大部屋をお貸しくださった青葉荘の方々、神事に参加させていただき、様々なお話も聞かせてくださいました奥尻島の皆様のおかげでとても楽しく充実した研修となったことに深く感謝申し上げます。



稲穂ふれあい研修センターの様子



青苗砂丘遺跡を解説する稲垣森太さん

奥尻島での学び

人文学部日本文化学科 3年 高野 風音

1. はじめに

私は、2021年8月11日（水）から15日（日）にかけて行われた4泊5日の奥尻島研修に参加した。学芸員課程を履修している学生の中で奥尻島研修は、絶対に参加したい研修1位であることは確かである。しかし、新型コロナウイルスの影響で2020年は開催されず、当時2年生だった私はとても残念だった記憶がある。今年こそは開催してほしいという願いの元、検査をした上で少人数ならば参加可能となり、ラストチャンスで3年生で参加できた。ただし、出発当日まで確実に開催できる保証はなく、感染者の多い札幌から奥尻島へウイルスを持ち込むわけにいかないため、参加者の体調の自己管理が徹底された。

今回は、出発当日の数時間前の検査で全員陰性、奥尻での体調管理・感染対策も万全で体調不良が出ることなく札幌に帰れた。本稿では、奥尻島研修での学びについて述べる。

2. 奥尻島津波館

初日は26:30に大学に集合、バスで睡眠をとりつつ江差到着後フェリーに乗船、お昼には奥尻島に上陸した。今でも、到着した時の強い日差しと札幌では聞けない蟬の鳴き声、研修への期待と「うにまるくん」の温かい歓迎は覚えている。上陸してすぐに昼食をとった後奥尻町教育委員会へ挨拶に伺い、津波館へ向かった。

津波館では、語り部の竹田彰さんから「北海道南西沖地震」の被害とその後の復興に関して行政の立場から話を伺った。津波、二次災害の火災による被害で家族や家を失った被害者が多く、迅速な対応を求められた当時公務員だった竹田さんのリアルな意見が語られた。特に復興作業に関して、その後の防災対策と景観のバランス、復興補助の財政、避難所や仮設住宅など、行政と島民の両側の意見を知った。行政の平等性が要求される中、それぞれ違う状況にあった被害者をどのように支援するか、また防災をいかに取り組んでいくか考えさせられた。これは、自然災害が多い日本において、防災だけでなく復興の在り方を反省できる貴重な体験である。

津波館へは、3日目にも訪れ、地震の記憶に加え丁字頭勾玉など奥尻島の歴史に関する展示がされてあった。丁字頭勾玉がなぜその名なのか、考古学資料の発掘方法など奥尻島唯一の学芸員である稲垣森太さんに展示解説をして頂いた。私が特に印象に残ったのは1階の中心部を大胆に利用した、奥尻島の誕生、災害、復興を再現した48の立体模型であ



青苗岬徳洋記念碑

る。1フロア全体を利用しただけあり、細かい工夫が施された模型は心を動かす展示だった。また、壁には災害によって亡くなられた198名を鎮魂する198の穴が開いたモニュメントがあり、解説されなければ気づかないモニュメントを置く、すなわち常に解説員が付いて回れる環境に奥尻特有の博物館の在り方を感じた。

屋外には時空翔や青苗岬徳洋記念碑があり、観光資源として利用できるモニュメントとなっている。特に、記念碑は津波にも耐え抜いた青苗岬の象徴ともいえる指定文化財のため、更にプッシュアップしても良いのではないだろうか。

3. 稲穂ふれあい研修センター

2日目は、佐藤義則展示室、宮津弁天宮を視察後、稲穂ふれあい研修センターで資料整理や新聞の切り抜きをした。

私は、1人で黙々と稲垣さんの興味がありそうなテーマの記事を綺麗に切り、台紙に日付順に張った。正直、単純作業をしていれば学芸員と教授の話聞けるし、学芸員が普段どのように仕事をこなしているか観察できると思った。それは大正解であった。

しかし、今考えれば単純作業だと考えていた新聞切り抜きは、実は学芸員として必要な作業だったのではないかと思う。というのも、学芸員課程の必修である博物館実習でも経験したように、学芸員は物の大きさを瞬時に把握し、細かな作業が必要とされる場面が多くある。特に、展示室に資料を設置、キャプションを作る際には必要で、来館者が直接見るところにその技術が出る。新聞の切り抜きは丁寧さが求められ、紙に貼る際には、左右前後等間隔に記事を張らなければならない。したがって、単純作業は実は学芸員の卵としての作業だったのかもしれない。

また、稲垣さんの求める記事を切り抜く作業は、来館者が求める情報を的確に聞き取り正確に伝える訓練ともいえる。切り抜けと指示されていない記事でも、傾向から似た記事を自ら探して切り取った。今回は、目で見て切り取るだけ、つまり視覚だけで要求を理解したが、本場の学芸員は話す中で要求を理解する必要がある。従来の展示メインの学芸員ではなく、来館者との交流を大切にしている稲垣さんならではの仕事を垣間見た気がした。

4. 青苗言代主神社・澳津神社の神事

3日目、4日目は青苗言代主神社と澳津神社の神事に参加する機会があった。神社といえ、お祭りで出店を見に行ったことしかなかったため、神事に招待された時は神社の礼儀

などを下調べして緊張した。実際に行った事は、静かに座って自分の順番が来たら二礼二拍手一礼、玉串を捧げるという一連の流れである。普段の生活とはかけ離れた空間に緊張感を覚え、本研修でなければできない経験だった。

神事後は、お供え物やお神酒を参加者で頂いた。そこで話されていた内容は両神社とも変わらず、人手不足、財政困難だった。立派なお神輿があるものの、立派である分それを支える人手が必要になる。特に、宮津弁天宮のお神輿担ぎは急で長い階段を上り下りする必要がある、今は行っていないとのことであった。今は、感染症によりお祭りが開けない。そんな中、いかに神社を改築して人を呼び込むか、学生にも意見を問われるシーンがあった。

島民の方々からは、本大学学生の協力で祭りを盛り上げる、学生の協力でクラウドファンディングを立てるなど我々への協力の声が上がっていた。また、今回のリーダーである西須さんは、花手水や手書き御朱印の可能性を案として挙げていた。

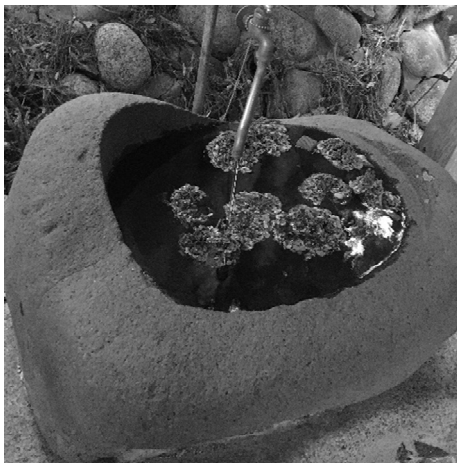
しかし、どちらにしても資金が必要で、離島の観光の重要性、若手不足をひしひしと感じた。今後も奥尻島の神社が失われないためには、北海学園大学学芸員課程の学生による協力が助けになる可能性があると共に、神社経営の難しさを学んだ。



青苗言代主神社での神事



宮津弁天宮の老朽化



澳津神社の手水



宮津弁天宮の階段

5. 後日談

本章では、奥尻島研修後の同年10月2日（土）から12月5日（日）に国立アイヌ民族博物館第3回特別展示/国立民族学博物館巡回展「ビーズ アイヌモシリから世界へ」で展示された奥尻島の丁字頭勾玉に関する簡単な紹介と博物館資料に関する意見を述べる。

本展では、ビーズを「ものともものをつなげたもの」と定義し、普段の生活で想像する装飾ビーズだけでなく、牙や羽なども繋げてあればビーズとして扱われた。具体的には、鉄ビーズやガラス玉のビーズ、アイビーズなどが展示されていた。その1つに奥尻町指定有形文化財である丁字頭勾玉も展示され、国立の博物館の特別展で主要な展示物として扱われていることに誇りを感じた。また、奥尻島津波館はレプリカが展示されており、本物を見たのは初めてで、本物の翡翠の色味、頭部の刻文を確認できたのは喜びだった。写真が急な角度から撮られていることから分かる通り、展示自体は資料に光が当たりすぎないようケース上部は黒く覆われていた。ゆえに、資料の扱われ方も丁寧で、学芸員課程の学生としての目線からも展示を楽しめた。

展示を見ている中、気になることがあり、巡回していた国立民族学博物館の池谷和信先生に質問する機会があった。池谷先生は、本展の世界中の多様なビーズ資料から、時代や地域を超えて好まれる魅力がビーズにはあり、世界中の人の考えが多様であることが分かると述べていた。確かに、本展にはアイヌモシリのみならずアフリカからヨーロッパまで様々な種類のビーズが展示されていた。利用方法はそれぞれ違うが、世界中でビーズ資料が発見される理由は、人類の普遍性とも繋がるかもしれないと考えた。

ところで、本展は奥尻島津波館をはじめとして多くの博物館の資料提供の下成り立っていた。このように、博物館同士の協力で企画展が構成されることに対し、私は賛成である。確かに資料の移動により、資料が劣化する恐れは多くある。しかし、協力により一博物館だけでなく多様な資料を展示できるため、企画展の規模が大きくなり集客力増加と企画展の質向上が予想される。実際、私も稲垣さんに本物の勾玉がウポポイで展示されると伺っていたため企画展に足を運んだ。したがって、博物館が横の繋がりをもって活動し、学芸員も稲垣さんのように交流を大切にすることで、日本の博物館の更なる可能性に期待する。



ウポポイで展示されていた本物の丁字頭勾玉

6. おわりに

今回の研修は、フィールドワークならではの貴重な体験ができ、私にとって大きな学びとなった。奥尻島滞在中は、稲垣さんと行動を共にする時間が多かった中、学芸員課程を履修している者としては学芸員の仕事の広さを学んだ。奥尻島という閉じられた社会の学芸員は、単純に博物館で業務をこなすだけでなく、島民との交流や地域の情報を常に耳に入れる必要がある。そうして、島特有の地域性に触れ、知識を深め、観光客や島民へフィードバックできる。

また、奥尻島では学習だけでなく、観光も楽しめた。奥尻ならではの、新鮮な海鮮や豊かな自然、広大な海、温泉など5日間ですべてを満喫できた。車に乗る機会が多かったが、奥尻島は、島の周縁を走る道が多く、運転の際は道を譲ることが頻繁である。島民にとっては当たり前のことであるが、道を譲った後のクラクションや礼は心温まるものがあった。たかが運転での小さな感謝だが、積もれば気分を変える喜びとなる。それも奥尻島の魅力の一つといえるだろう。

最後になりましたが、滞在を受け入れてくださった奥尻島教育委員会、宿を提供してくださった青苗荘の皆さん、食事を提供頂いた各店舗の方々、滞在中たいへんお世話になった稲垣さん、学生を引率下さった手塚先生、後輩たちにご助言を下された蟬塚先輩に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

奥尻島研修で得たこと

人文学部日本文化学科2年 栗原 一華

1. はじめに

2021年8月11日から15日にかけて行われた奥尻島の研修に参加した。昨年、2020年に開催される予定であった研修にも参加する予定であったが、コロナウイルスの影響により中止となってしまった。そのため、今年は研修を実施できるのかという不安があったが無事に参加し、研修を終えることができた。

今回の研修では、1日目は奥尻島到着後、奥尻島津波館で、奥尻島津波語り部隊・竹田彰さんから震災当時のお話を伺った。2日目と4日目は、稲穂ふれあい研修センターで研修を行った。そして、3日目と4日目には神社で行われた神事に参加させていただいた。本稿では、研修の際に学んだことや、感じたことについて記してみたい。

2. 稲穂での作業について

奥尻島の北部にある稲穂ふれあいセンター歴史民俗資料展示室で筆者は、資料のデッサン・計測を行った。学芸員の稲垣森太さんから指定された資料は、様々な種類の道具があった。特に水がめやガラス玉といった、漁業に関するものが多く見られた。それらの道具は、劣化していたり、コケやすすなどで汚れていたりしていた。そのため、湿らした布巾でそれらをふき取りながら、デッサンと計測を行った。

資料の多くは、道具の名前も、使用用途も知っているものであった。だが、それらの中に謎の道具が1つあった。それは、ひき肉に加工をする手回しのミートチョッパーという道具である。最初、ミートチョッパーという道具のことが分からず、学芸員の稲垣さんに伺った。すると、稲垣さんが館内に類似した道具が展示してあるとおっしゃったため、館内中を探し周った。すると、ミートチョッパーに類似した、カニを加工するための道具が展示されていた。手動のミートチョッパーも、カニの加工用に当初の目的とは別の用途に転用されていたのである。

そのほかにも、水瓶の底にある黒い丸のような模様についてなど、資料に関する様々な疑問点が出たりした。資料のデッサン・計測という作業自体はシンプルなものであったが、資料一つ一つをよく観察することにより、様々な発見や疑問点が生じることがあるということ、改めて感じる時間ができた時間であった。

3. 神事に参加して

青苗言代主神社と澳津神社で実施された神事に参加した。筆者は、新年に初詣に参拝に行くこと以外は、ほとんど神社を訪れることは無い。そのため、すべてが初めての経験で

あった。

神事に参加した後に、お話を聞かせていただいた。神社の敷地内では、仮設住宅のプレハブが、事務所として現在も使用されており、奥尻島には、今も震災の名残があった。奥尻島にある神社と祭りの現状や、震災前と震災後の違いについて、震災後に再びおみこしを購入したことなど、様々な内容であった。実際に、祭りで使われるおみこしや、道具類も見せていただいた。

筆者は、普段は神社に関わることはない。そのため、島民の皆さんが経験してきたこれまでの祭りに関する思い出話や、神社の今後に関する様々なことに対して、熱心に考えていることが伝わり非常に印象深かった。神社のことを、非常に大切に思っているのだということが伝わってきた。



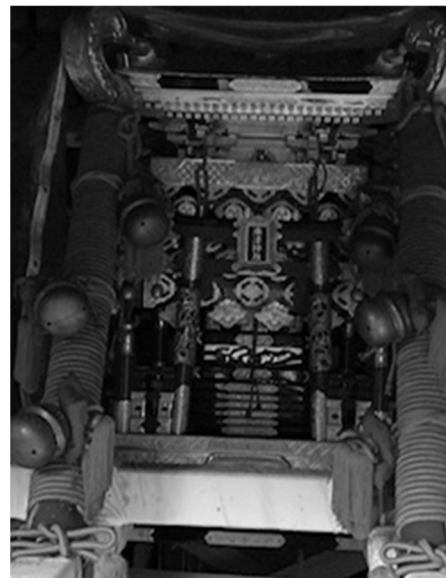
(写真2 青苗言代主神社)



(写真3 澳津神社)



(写真4 青苗言代主神社の神輿)



(写真5 澳津神社の神輿)

4. 奥尻島津波館での見学とお話について

奥尻島津波館では、当時のことについての詳細な話を聞かせていただいた。筆者は、震災による被害は、メディアで少し見たことがある程度であった。これまで、他の震災について実際に経験した方による体験談を聞かせていただいたことはあった。だが、実際に経験した人の目線に加え、行政側からの目線の話の聞かせていただくのは初めての経験であった。行政側の話というのは、震災を経験したメディアで報道されるということはそう多くはない。聞かせていただいた話の多くは、筆者にとって衝撃的なものばかりであった。そのため、この機会は、非常に貴重な体験となったと感じている。

8月13日には、館内の見学も行った。館内の一階には、当時の写真や被災した物、震災の流れを再現したジオラマなどが展示されていた。地下には、奥尻島の遺跡で発見された資料が展示され、震災についての映像を見ることが可能なブースが設置されていた。奥尻島津波館の展示の仕組みについても、稲垣さんから伺ったが、そのような展示を作る側の視点からの話は通常は聞けないので非常に興味深かった。

5. そのほかの出来事

上記の活動以外にも、様々な場所に行った。温泉に行く際に、島の西南にある千畳敷海岸に寄った。砂浜は、石が多く転がっていたり海藻が漂着していたりしていた。海水がとてもきれいだった。

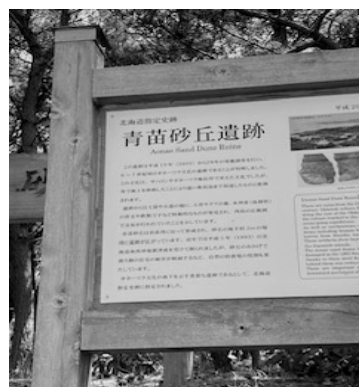
奥尻島唯一の天然温泉である神威脇温泉は、漁師たちのために、一階と二階で温度が異なっているという話を聞いた。これまで温泉の温度の違いの理由など考えずに、熱いか、熱くないかで入る場所を決めていたため、温度が異なる理由あるのは、印象深かった。筆者は、温度が低い方を選んだのだが、それでも熱く感じた。

島内南端にある青苗砂丘遺跡にも行った。この遺跡は、北海道指定史跡に指定されたオホーツク文化に関する遺跡となっている。だが、写真5からも読みとれるように、遺跡とされている場所は木や植物に覆われており、この場所が遺跡だと指摘されないと、まったくわからない状態であった。

島には、神事に参加した神社以外にも、多くの神社があった。そのため、移動の際に様々な神社の近くを通ることも多く、見つけた神社に立ち寄ることもあった。神事に



(写真5 青苗砂丘遺跡)



(写真6 青苗砂丘遺跡の看板)

参加した際に、奥尻島の神社の現状についての話は聞いていたが、老朽化した神社が想定以上に多く、非常に驚いた。神社に使用されている木材の劣化がひどく、危険な状態となっている場所も存在していた。

空港にも行った。コロナウイルスによる影響があったため、人はまったくと言ってよいほどいなかった。空港には、奥尻高校の生徒がイラストを考えたグッズのガチャガチャなどが置かれていた。



(写真7 鷗崎神社)

6. 食べ物

滞在中は、おいしい食べ物を食べる機会があった。特に、うにをはじめ海産物はとてもおいしく、食事の時間がとても楽しみであった。様々な海産物を食べる事ができて非常に満足した。



(写真8 食堂で食べた昼食)

7. おわりに

今回の研修で、様々なことを学ぶことができた。だが、コロナウイルスの感染リスクがある現状では、例年の研修通りにはいかなかったことも多々あった。2019年までの奥尻島研修に参加した学生による学事報告書の内容や、先生方のお話から、これまでの多彩な活動内容を知り、今回の研修では行えなかったことも、来年以降にもし可能であれば、さらに経験を積んでみたいと感じた。

最期に、このような機会を与えてくださり、ご指導くださった稲垣さん、手塚先生、共に研修を行った先輩方、コロナウイルスの感染リスクがある状況下で、私たちを受け入れてくださった奥尻島教育委員会の方々、奥尻島で様々なことを教えてくださった住民のみなさまに、深く感謝申し上げます。

北海道における四箇散米行列の伝播

文学研究科日本文化専攻修士課程 2 年 蟬塚 咲衣

1. はじめに

筆者は 2018 年から、北海道の南西沖に位置する奥尻島で行われている祭礼に関心を持ち、調査を行ってきた。現在、奥尻島では奥尻地区の澳津神社と、青苗地区の青苗言代主神社例祭の 2 地区のみが神輿や山車の巡行を行っているが、新型コロナウイルス感染症の影響で、2020 年以降は巡行を中止している。しかし、このような状況下でも、奥尻地区では、「ここ 20 年ほど神輿担ぎが全くできていなかったが、2021 年はコロナを払いのけるという意味で、車に積んででも神輿を出したいと思う。コロナ撃退ということで、四箇散米行列もやりたい」¹⁾、「2022 年は、コロナからの復活で神輿を盛大にやりたい」²⁾という声があり、同島の青苗地区でも「来年は、猿田彦・神輿・山車を出したい。祭りがないと地元が活性化しない。町で神輿がワッショイする姿があれば、帰省する人も来る。来年に向けて前向きにいきたい」³⁾という声があった。コロナ禍においても、祭礼行事復活の気運が向上する様子を目の当たりにし、祭礼が人々を奮い立たせる力を有することを実感した。

奥尻島で行われる祭礼は、「神道系」、「仏教系」、「宗教外行事系」の 3 つの系統に区分できる（表 1）。特徴として、奥尻町が地域の活性化を目的に「奥尻三大祭」と称してイベントを開催しており、そのうち室津祭と賽の河原祭の 2 つは、神社祭礼と寺院の法要と結びついている点が挙げられる。筆者はこれまで、系統の区分に関わらず、様々な祭礼において参与観察を行ってきた。表 1 の「①神社祭礼」にあたる青苗言代主神社例祭に関する報告と、「③法要+イベント」にあたる賽の河原祭に関する取り組みについては、『北海学園大学学芸員課程学事報告書』の 31～33 号を参照されたい。

本稿では、表 1 の「①神社祭礼」に該当する、澳津神社例祭について取り上げたい。四箇散米行列は、澳津神社の例大祭において伝承されている民俗芸能である。奥尻島以外の地域でも行われており、

表 1 奥尻島の祭礼分類

そのうちの 1 地域である礼文島に、2021 年 7 月 14～15 日で調査を行った。本稿では、これまでの調査で明らかになった四箇散米行列の伝播について記し、最後に筆者の学芸員課程および大学院での研究活動を振り返りたい。

系統	神道系		仏教系	宗教外行事系
分類	① 神社祭礼		③ 法要 + イベント	④ イベント
	巡行あり	巡行なし		
事例	各地区神社祭礼		室津祭	賽の河原祭
	奥尻三大祭（地域振興）			

2. 四箇散米行列について

まず、松前神楽とは、松前城下を中心に古くから行われていた神楽である（北海道教育委員会 1966：2）。1625年頃に松前城下に神楽屋が造営された記録があることから、17世紀初め頃には行われていたとされ⁴⁾、基本的に神職によって舞われる⁵⁾。松前神楽の特色として、松前藩との関係の深さや、ほかの神職神楽には類曲の少ない「千歳」「翁」「三番叟」が舞われていること、伝承地が広域であること、歴代の神職が様々な芸能を受け入れて発展させてきた多様性があることなどが挙げられる（北海道教育委員会 2017：32-33）。2018年に国の重要無形民俗文化財に登録され、それ以前から道南地域を中心に北海道の日本海側で多く伝承されている。

松前神楽の演目の1つである四箇散米舞は、弓、剣、刀の三種とそれを乗せる折敷を採物とする4人舞で、四方の国々の暴逆無道なものを打ち払い、天下泰平となるさまを表したものである（北海道教育委員会 1966：6）。装束は白衣、袴、鬼狩衣、長鳥帽子、白鉢巻であり、松前藩の威徳を表したものとされ、松前藩十代藩主松前矩広と常磐井今宮の合作と言われている（松前神楽小樽伝承百年祭実行委員会 1993：19）。

四箇散米行列とは、松前神楽の四箇散米舞から派生したものである。木製の道具を持って舞いながら行進するものであり（北海道教育委員会 1966：6）、人数は特に定められていない（松前町教育委員会ほか 1964：179-181）。地域によって表記が異なり、四箇散米行列、四ヶ散米行列、四箇散米舞行列、四ヶ散米舞行列などが見られるが、本稿では、四箇散米行列に統一して記すこととする。

3. 四箇散米行列の伝播

筆者は、四箇散米行列がどの地域で行われているのかについて関心を持ち、聞き取り調査や松前神楽の各保存会への問い合わせを行った。コロナ禍直前である2019年時点の伝承地を表したのが、図1である。

最も早く行われたのは現福島町の福島大神宮と現知内町の雷公神社で、松前藩政時代の17世紀末にはどのような形態かは定かでないが、行われていたとされている（礼文町教育委員会 2015：3）。小平町では、福島町出身者が多かったことと、1903年に常磐井武胤宮司を道南から招いて松前神楽が伝承されたことから（礼文町教育委員会 2015：8）、1907年前後には四箇散米行列が始められたとされる。その後、1908年まで福島大神宮の宮司であった常磐井武胤氏が（福島町史編集室 1995：58）、1911年に利尻島北見富士神社の2代目宮司に就任したことを契機に、利尻島で四箇散米行列が始められ、北見富士神社の3代目宮司である常磐井武知氏（武胤氏のご子息）が翌年には利尻島仙法志神社の2代目宮司を兼務したことによって、同島の仙法志神社にも伝承された（礼文町教育委員会 2015：8）。また、礼文島の巖島神社では、利尻島の常磐井武胤宮司の孫である常磐井武四郎氏が1922年もしくは1930年に宮司に就任し、1935年頃には四箇散米行列が始められたとされる（礼文町教育委員会 2015：4）。さらに、利尻島から常磐井武知氏のご子息である常磐井武

秀宮司（福島町史編集室 1995：400-401）が 1955 年 11 月 10 日に奥尻島の戦後 2 代目宮司に就任し⁶⁾、1962 年頃に澳津神社で四箇散米行列が始められた。1990 年頃には、小樽市の潮見ヶ岡神社の現宮司である本間清治氏が、奥尻島澳津神社の祭礼を 1988 年頃に手伝いに行った際、「澳津神社で初めて四箇散米行列を見て、神社のお祭りを盛り上げるために取り入れようと思った」⁷⁾という理由から、小樽市に伝承された。また、黒松内町では、奥尻町戦後 4 代目宮司の牧田力氏のご令姉が、黒松内町大鳥神社の宮司であった武田信一氏と結婚し、牧田宮司が大鳥神社の祭礼を手伝うようになったことがきっかけで⁸⁾、1991 年頃には四箇散米行列が行われていた⁹⁾。

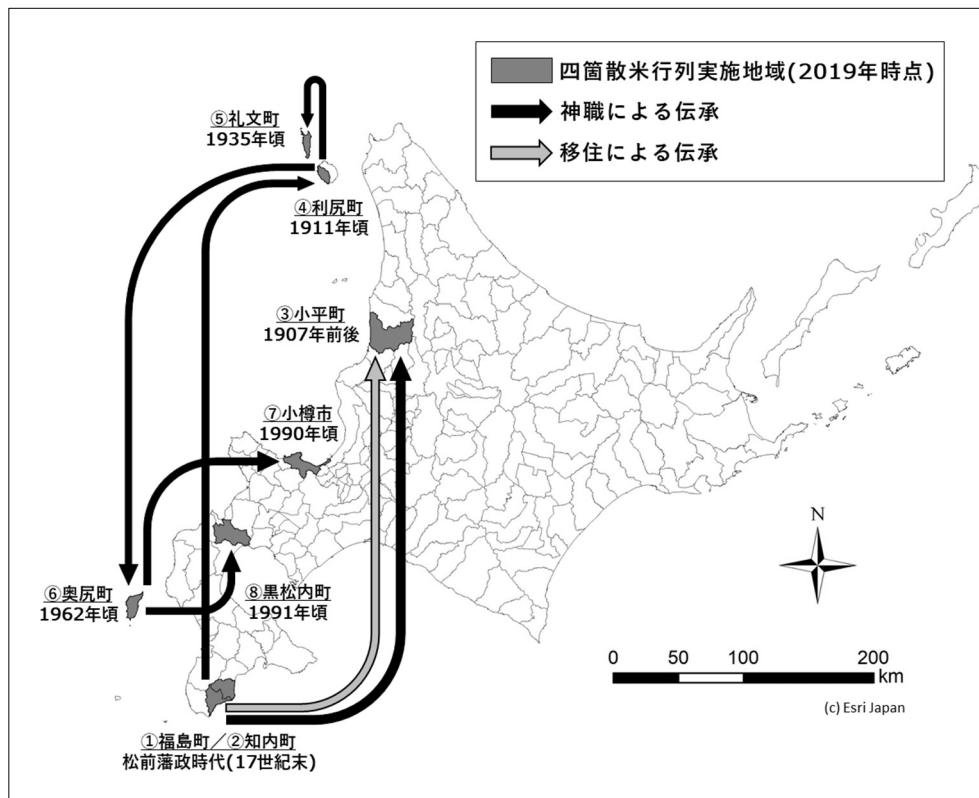


図 1 四箇散米行列の伝承地

境界：「国土地理院発行の数値地図（国土基本情報）」、「ESRI ジャパンの全国市区町村界データ」

以上のことから、四箇散米行列は、主に神職の移動によって明治期以降に各地域間で伝承され、2019 年時点の伝承地は日本海側に点在していることがわかる。興味深いのは、20 世紀末という比較的新しい時代に、奥尻町から小樽市と黒松内町へ波及している点である。このように、特定の地域における歴史だけでなく、伝播の過程を明らかにすることは、北海道全体の民俗芸能の伝播・定着や意義の理解に繋がると考える。現在、民俗芸能は、少子高齢化や人口減少によって担い手が不足し、継承が困難となっているものが全国的に見られる。そのような中で、歴史ある松前神楽に起源を持ち、装束をまとって武具を手に踊るといった古風な趣きを感じさせる四箇散米行列が、現在も大切に伝承されているのは、継承者らの並々ならぬ努力の賜物である。

本稿では、四箇散米行列を町指定無形民俗文化財に登録し¹⁰⁾、博物館においてパネルと映像資料を使用した展示を行う、礼文町の事例を取り上げたい。

筆者が調査を行った 2021 年 7 月の巖島神社例大祭における、神輿渡御と四箇散米行列の様子について記す。例年の神輿渡御は、住宅が少ない区間を除いて基本的に人力で行われるが、コロナ禍における人の密集を避けるため、2021 年は神輿をトラックに乗せ、6 台の車両に宮司や神社役員が分乗し、パトカーを含めた計 8 台が連なる形で行われた。他地区の神社や、礼文島にとって交通の要であるフェリーターミナルなどの要所で、宮司による「お参り」が行われた。渡御は、9 時から 14 時 40 分まで行われた¹¹⁾。



写真 1 2021 年に礼文町で披露された四箇散米行列と沿道に集う観客たち

四箇散米行列は、例年は猿田彦や神輿などとともに、1 日かけて氏子区域である礼文島の南部の地域を巡るが、2021 年はコロナ禍のためルートと時間を短縮し、9 時 15 分から 9 時 22 分頃までの 5 分強の実施となった(写真 1)。その後、9 時 28 分に担い手の子どもたち全員で記念撮影をし、2021 年の行程を終えた。実施した理由をたずねると、「2020 年はコロナで行列を全くできなかつたので、今年こそは行わなければ」¹²⁾という回答を得た。巖島神社の四箇散米行列は、衣装や採物の数などの関係もあり、毎年小学 5~6 年生が務めている。2 年連続で中止とする場合、四箇散米行列を経験する機会を逃す学年が出てしまうため、それを避けようとする強い思いがうかがえた。また、「四箇散米をするのは小学 5~6 年生だが、それ以下の学年の子どもたちには、自分が 5~6 年生になったらこれができる、という思いがある」¹³⁾、「祭りの日が平日でも、学校が丸一日休みになるので子どもたちも参加できる」¹⁴⁾などの声があった。地域の中で世代を越えて守り継ぎ、自分たちの大切な文化であることが強く意識されている点が印象的であった。2021 年は、ほか 7 つの四箇散米行列伝承地では不実施とされた中で、礼文町だけ実行に踏み切れたのは、このように地域全体が文化を支えようとする環境であることが強く影響していると考えられる。実際の行列の様子を見ても、練習の成果を元気よく披露する子どもたちを、様々な世代の地域住民らが沿道から温かく見守っていた。四箇散米行列は、固定されたどこかの場所で定点的に披露するものではない。パレード形式の線的な動きによって、生活の中で何

気なく使っている道路を、賑やかで華やかかつ、人々の地域・文化・伝承に対する思いがこもった場にするができるのではないだろうか。行列が多くの人々の目に触れることで、その思いを地域全体で共有し、一体感を生み出すことに繋がるのだと考える。今後も、四箇散米行列の継承に関わる組織や伝承方法、取り組みを明らかにするため、そのほかの伝承地でも調査を継続したい。

4. 奥尻島における四箇散米行列

奥尻島における四箇散米行列は、1962年頃の開始当初、球浦地区の青年団である「球浦青年団」の20～35歳の男性らが行っていた。当時参加した住民は、「四箇散米は花形だった。元々の祭礼行列に、四箇散米行列という要素を1つ増やすというのは、田舎では画期的なことだった。四箇散米は地域の人々の関心があった舞だ」¹⁵⁾と当時の注目度の高さを語っており、常磐井武秀宮司がその核となっていた。「球浦青年団」によって4～5年行われていたが、青年団の人数不足によって、1972年頃に小学校高学年から中学生の男の子が担い手の中心となった。手には、剣や薙刀などの採物を持つ(写真2)。写真を確認すると、1970年代後半には、女の子も担い手として参加している。澳津神社の四箇散米行列は、2001年を最後に行われていなかったとされるが、2019年に「寿都松前神楽保存会」が島を来訪し、松前神楽を奉納したことをきっかけに、約20年ぶりに披露された(蟬塚ほか2021:43)。



写真2 澳津神社に残る四箇散米行列の採物
(左から剣、刀、弓、薙刀)

島内の四箇散米行列に関する、興味深い事例を記したい。表1の①に分類される奥尻島の神社祭礼において、特定の地区で行われている祭礼行事が、別の地区で行われることは基本的でない。例えば、青苗地区の神社祭礼で行われる「はおい」という掛け声を別の地区で披露したりすることはなく、各神社の氏子区域内で催されている。しかし、澳津神社の四箇散米行列は、1974年頃に青苗言代主神社(当時、言代主神社)の祭礼時に披露されたことがあったという。実際に、中学2～3年生の頃に青苗地区での四箇散米行列に担い手として参加した、澳津神社の氏子の方の話によると「青苗に行ってやってほしい、という依頼があって、2年ほど行ったんだと思う。四箇散米は、言代主神社例祭の宵宮の日に1日だけやった」¹⁶⁾とのことである。このお話を聞くまで、青苗地区で行われた四箇散米行列の写真自体は残っているものの、これまで青苗地区の住民にうかがっても詳細を知っている方はおらず、おそらく特例の催しだったと考えられる。しかし、地区を越えて実施された希少な事例の1つであることは間違いない。四箇散米行列の経験者への聞き取りを通じ、今後さらに詳細が明らかになるだろう。子どもの頃に過ごした地区で祭礼に参加し、

結婚などを理由に他地区に転居して、現在は転居先の祭礼の担い手をされている方が多いため、話をうかがっているうちに思わぬエピソードが飛び出すこともある。これからも、調査地域を広げつつ、1つ1つの証言を集めていきたい。

5. 研究における今後の展望

筆者は、2022年2月21日に行われた「北海道民族学会・日本文化人類学会北海道地区研究懇談会第3回卒論・修論・博論合同発表会」において、修士論文について発表を行った。筆者が修士論文で取り上げたのは、表1の「①神社祭礼」に分類される、青苗言代主神社例祭（青苗地区）と澳津神社例祭（奥尻地区）の2つであった。その質疑応答の際、北方民族博物館学芸員の中田篤氏から、「奥尻島には現在巡行を行っている2地区のほかに、既に巡行を行わなくなってしまった地区の祭礼がいくつもあるが、それらのアーカイブは可能なのか」という質問を受けた。先行研究や資料が少ない奥尻島の場合、現在は行われなくなった祭礼の様子に関する知識、経験、記憶を有している住民は、年々減る一方である。島内の2大地区である青苗地区と奥尻地区に比べ、それ以外の地区はコミュニティの規模自体が小さく、島内16地区中、人口が30人を切っている地区が6つある¹⁷⁾。

筆者が大学1年生で参加した奥尻研修（筆者にとって初めての聞き取り調査）で、貴重なお話を聞かせてくださったおばあさんは亡くなり、谷地地区の昔の祭礼に詳しいおじいさんは、ご高齢なことと島の医療体制などを理由に、奥尻島を離れてしまった。聞き取りの際、どのように対話を進めればその人の思いを知り、受け止めることができたのか、もっと耳を傾けられたのではないかと、常に自責の念に駆られる。祭礼研究は、あまり人命と関わらないものと思われるかもしれないが、聞き取り調査を中心に研究を行う以上、緊急性を意識せずにはいられない。そのことを改めて痛感した学会発表であった。

6. おわりに

最後に、筆者の学芸員課程および大学院での活動を振り返り、学芸員を目指す学生へのメッセージを記したい。学部を卒業し大学院進学と同時に、新型コロナウイルス感染症が世界的に流行した。修士過程の2年間は、現地調査を最低限に留めざるをえなかったことは非常に残念であり、研究のモチベーションを維持することが難しい期間であった。6年間の大学生活を振り返ってみると様々な記憶が思い出されるが、そのほとんどが学芸員課程での調査や研究、そこでお世話になった方々の姿である。

課程修了後の進路に関しては、2022年4月から小樽市総合博物館（本館・運河館）で学芸員として働くことになった。中学生の頃に博物館で働くことに憧れ、学芸員資格が取得できる北海学園大学に入学して6年。想像以上に早い実現となり驚いている。

学芸員になるためには、計画性を持つことが重要である。毎年春に行われる学芸員課程のガイダンスの際、手塚薫先生が「授業だけで満足するのではなく、自分で学ぼうとすることが大切」という話をされていたことを覚えている。筆者が「博物館実習Ⅰ・Ⅱ」の授

業で開拓の村を訪れた際には、中島宏一先生が大学1年の筆者に「大学で何をしたかが大事」という言葉を掛けてくださった。大学生として過ごせる時間は限られている。自分は何を目標としているのか、そのために何をすべきかを意識すると良いのではないかと思う。筆者の場合は、学芸員になることを目標とし、採用試験の際には、学芸員になるためにどのような経験を積んだのかを証明できるようにしたいと考えた。先生方の熱意あるご指導や、互いに切磋琢磨できる友人の存在に助けられながら、できるだけ多くの研修に参加し、フィールドワークを重ね、研究を充実させられるよう努めた。実際の面接時に、面接官の方に「学芸員になりたいという思いが伝わってくるエントリーシートだ」と言っていただけたことは、嬉しく感慨深かった。

学芸員になる方法は決して1つではない。筆者が知る限りの北海学園大学卒の学芸員の方々も、誰一人として同じルートを進んでいないように、絶対的な正解はない。様々な方の経験を聞き、自分がどのようなルートを進むか考えることを勧めたい。心が折れそうになることもあるかもしれないが、学芸員の募集が出た時に応募しようと思える情熱を、ずっと持ち続けることが大切なのだと思う。そして、学芸員課程の授業外研修に積極的に参加することで、得られる経験は多い。学芸員課程の学生として良い学びになるだけでなく、就活のエントリーシートや面接、授業のレポートなど、あらゆる場面で力となってくれるだろう。筆者自身も、様々な場所で多くの方と出会い、色々な経験をしたことによって、視野を広げることができた。

筆者が調査で最も足を運んだ地域は、奥尻島である(写真3)。調査を行うようになったきっかけは、奥尻町で学芸員をされている稲垣森太氏が大学の先輩だったからである。稲垣氏は、当初筆者が持っていた、博物館の中で黙々と作業している学芸員のイメージを、良い意味で覆してくださった。筆者が島で調査を行っている時、住民の方から「森太は、俺たちよりこの島のことを詳しく分かっているからね。いつも感心してる」、「色々なことに関心を持って、一生懸命な学芸員だ。森太みたいな人は初めてだね」という声をよく聞いた。稲垣氏の住民らとの関わりを大切にしている姿勢は、これらの会話に表れている。稲垣氏の後輩だから、と調査の際は特に親切にしてくださった方も多かった。学芸員は知識量の多さだけでなく人望も不可欠であることを、身をもって学ぶ事ができた。これまでの研究は、稲垣氏のご協力がなければ実現できず、調査のたびに、一見さりげないように見えても、細やかな心遣いで常に私たちを見守ってくださった。

最後になりますが、本研究にあたりご協力いただいた皆様に深く謝意を表します。そし



写真3 2021年の青苗言代主神社の宵宮に参加した筆者(中央右)(撮影者:竹田彰氏)

て、右も左もわからない頃からご指導くださった学芸員課程の担当教員の皆様、お世話になった全ての方々に心より感謝申し上げます。これまでのご恩に報いることができるよう、尽力してまいります。

※本稿中の写真について、提供情報の記載がないものは筆者撮影である。

※証言者に関する情報は、仮名／性別／年齢／取材市町村名／職業／例祭での役割、不明箇所は一で記す。

注

- 1)A 氏／男性／70 代／奥尻町／元サービス業／氏子総代
- 2)B 氏／男性／60 代／奥尻町／一／神威山巡行実行委員会
- 3)C 氏／男性／70 代／奥尻町／小売業／氏子総代・青苗みこし保存会
- 4)舟山直治（2018）「松前城内神楽の系譜（表紙写真解説）」『北海道の文化』90 より。
- 5)北海道新聞「〈立待岬〉高橋豊彦 祭りの九月」2008 年 10 月 1 日夕刊地方、12。
- 6)D 氏／男性／一／利尻町／神職／神社関係者
- 7)E 氏／男性／70 代／小樽市／神職／神社関係者
- 8)7 の人物に同じ。
- 9)F 氏／男性／80 代／黒松内町／一／元神社役員
- 10)礼文町における文化財としての登録名は、「四ヶ散米舞行列」である。
- 11)渡御のスケジュールが記されている、巖島神社提供の 2021 年版「経路及び時刻表」を参照。
- 12)G 氏／男性／50 代／礼文町／神職／神社関係者
- 13)H 氏／男性／50 代／礼文町／一／四箇散米行列関係者
- 14)12 の人物に同じ。
- 15)I 氏／男性／70 代／奥尻町／元特別職公務員／四箇散米行列経験者
- 16)J 氏／男性／50 代／奥尻町／一／四箇散米行列経験者
- 17)奥尻町提供の「行政区別集計表（2021 年 10 月 29 日）」より。

参考文献

- ・蟬塚咲衣、浅妻佑軌、高橋佑惟、佐々木理子、稲垣森太、手塚薫（2021）「記憶地図」を通じた奥尻島の 2 つの例祭巡行の比較『北海道民族学』17：33-49。
- ・福島町史編集室（1995）『福島町史（第二巻）通説編上巻』福島町、福島。

- ・北海道教育委員会（1966）『北海道文化財シリーズ第8集 郷土芸能』北海道教育委員会、札幌。
- ・北海道教育委員会（2017）『国記録選択無形民俗文化財調査報告書 松前神楽』北海道教育委員会、札幌。
- ・松前神楽小樽伝承百年祭実行委員会（1993）『北海道指定無形文化財松前神楽 小樽伝承百年祭』松前神楽小樽伝承百年祭実行委員会、小樽。
- ・松前町教育委員会、松前神楽保存会（1964）『松前神楽』松前町教育委員会、松前。
- ・礼文町教育委員会（2015）『四ヶ散米舞行列調査報告書—巖島神社に伝わる島で唯一の郷土芸能—』礼文町教育委員会、礼文。

ミニミュージアムのねらいと講評

北海学園大学教授 手塚 薫

3年生以上に開講されている「博物館経営論」では、学んだ知識を活用し、ミニミュージアムの展示計画を練り、ミニチュア模型、図録、ポスターを実際に作成してもらう試みを毎年実施している。仕上げた作品を、履修学生たちの前でプレゼンし、さらには学生たちが個々の作品の評価を担当する。さながら、学芸員課程教育の総決算ともいべき性格を有している。制作は、レポート作成や試験前の多忙なスケジュールの合間を縫って、コロナ下ということもあり、自宅を中心に行われる。リアリティのない空想や既存の展示空間の物まねでお茶を濁せばいいという課題ではない。制作することで、実際のミュージアムでも現実に生じがちな課題も体験できると確信している。

「むきあう」 社会や地域の課題への対応 博物館は、幅広い文化芸術活動をはじめ、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業、環境その他の関連分野・機関と有機的に連携し、社会や地域における様々な課題に向き合う。

これは2021年7月に文化審議会博物館部会が、「博物館法制度の今後の在り方について（審議経過報告）」で示したこれからの博物館に求められる5つの方向性のうちの1つに相当する。ミュージアムは、地域やそこに暮らす人びとが、それぞれ直面する現代の様々な社会的課題に対して、収蔵資料やミュージアム活動を通じて向き合い、地域社会に生きる人々の生活をさらに豊かにしていくことが求められている。そのためには、日頃からミュージアムとそれを取り巻く社会的課題にも関心を持つことが肝要である。就活との両立が始まる3年生以上であれば、刻々と変化する時事問題にも通じているだろうから、とりたてて厳しいハードルということにはならないだろう。

さて、経営資源の5大要素は、ヒト、モノ、カネ、情報、時間である。優れた企業ではさらに、数値化できない価値観のような要素をも重視する。マッキンゼー&カンパニー社が提唱するソフトの4S（経営スタイル、スキル、スタッフ、シェア・共有された価値観）とハードの3S（戦略、組織、システム）は互いに補い合って組織の価値を高める。ソフト要素は人の感情や価値観がかかわり、変更が容易ではない。一方、ハード要素は経営者の意思や企業努力で再構築がしやすい。マ社では「共有された価値観」を、最重要な「S」に据えている。「共有された価値観」は、組織に所属する全メンバーの行動の規範になる考えかたであり、「ビジョン」と「基本理念」から成る。

ミニミュージアムでは、現代社会が直面している諸課題の解決に資するため、なによりも新たな価値の創造を重視している。「ビジョン」はゴール達成のために目指すべき短期目標とし、「基本理念」はそれよりやや抽象的で長期的な展望としている。この2つが複合・融合して「展示趣旨」（共有された価値観）になるというフローを認識してもらうよう働きかけた。さらに「現状分析」することで、出発点の明確化を促し、

現時点での課題とその解決を意識させた。楽しみながら展示制作（ミニチュア模型、図録、ポスター）に取り組んだ学生が少なくなかったように思う。

本稿では、作品のプレゼンテーション後に実施した学生たちによる投票の結果、ポスター・図録・展示部門をあわせた総合評価で最高得点を獲得した学生4人の作品を紹介する。これからミニミュージアム制作にチャレンジする学生たちは、本講評の後に掲載されたこれら優秀作品の作者4人によるレポートを熟読して今後の制作の参考にしてもらいたい。

「江戸のヒロインから学ぶ着物の魅力展」を制作した上田望永さんは、着物を着ることが趣味で、構想自体はスムーズに進んだようだ。紙粘土の芯の上に順番に布を重ね、着物を着たマネキンの作成を見ながら実物に近づける作業は予想以上に時間がかかったという。発泡スチロールの箱内で作業するのは大変なため、あらかじめステージを用意し、そのうえで作業を行ってから、最後に箱に戻すという極めて合理的な工夫を行ったことがユニークであり、高く評価できる。また、通学時にミニミュージアムが破損しないように、すべてのパーツに磁石を取り付け、固定するという斬新なアイデアを実践したのは画期的であり、作成時にも1点ごとに取り出して制作できるというメリットもたしかにありそうだ。

「京都異界探訪」を制作した加藤樹香さんは、紙粘土で井戸、鳥居、橋を作り、京都の裏の顔であると同時に、地元民にとっては日常である、どこか妖しげな異界とのつながりを印象づけることに成功している。異界をポスターでもうまく表現しており、キャッチコピー「怪しく美しい 千年の都に秘められた謎 とくにご覧あれ」は、受講生仲間にくっつか案を示し、一番票が多かったという作品だけあり、本人にとっても納得がいく仕上がりとなった。時間の制約もあり、通常はそこまでこだわりぬくことはなかなか難しい。

「ようこそ『竹の世界』へ」を制作した竹花美恵子さんは、かつて生活の一部となっていた竹細工がプラスチックの台頭で消滅し、伝統産業や竹林の衰退にも繋がっていることを明らかにしたうえで、竹文化とその復権を試みようとして企画した。展示室の壁面全体を竹マットで覆うなど、自然素材を使ったことで、竹の明るく穏やかなイメージを再現できている。図録を完成させてから、模型、ポスターの制作に着手したそうだが、展示模型を作る作業を気持ちに余裕をもって十分に楽しめたという。模型作りの途中で、図録の手直しもできるという思いがけない効果もあった。まさに制作手順の吟味と時間配分がいかに重要かということをお話している。

「冥界の王ハデスの真実」を制作した中村美南さんは、ギリシア神話に登場するハデスの悪者イメージを払拭し、ハデスの認知を広げることがビジョンに掲げ制作に入った。冥界のイメージ通りになるように色、質感、装飾の細かな点にまで気をつけて質を向上させている。とくに岩を模した壁は、来館者に飽きられないように、一面ごとに質感を変化させるというこだわりぶりであった。壁紙や装飾品が剥がれると見栄えが一気に悪くなるので、そこは妥協できないポイントだという重要な指摘を行っている。丁寧で細かい作業の1つひとつが、全体の完成度を高めることを見事に体現している。

博物館経営論 ミニミュージアム制作を終えて

人文学部日本文化学科3年 上田望永

1. はじめに

博物館課程には博物館経営論という授業がある。一見座学がメインに思えるこの授業だが、博物館課程の最終課題とでもいえるような課題がある。それがまさにこのミニミュージアム制作である。ミニミュージアム制作は学校側から支給される一般的によく見られる発泡スチロールの箱の中に、自分1人で一から全てを考えた企画展示室を作るというものである。実習や、資料論など学んできた全ての知識が生きる場でもあり、同時に他の授業の課題と並行してやるには過去最も計画性の必要な課題であったといえるだろう。

オンラインの授業が多くなる時期であったこと、正解の見えない課題であるために、この授業を受ける全員が不安になったのではないだろうか。やってみなければわからない作業と、なかなかうまくまとまらない図録作成には苦戦を強いられた。

思考を形にするには技量が足りず、動かせば壊れてしまうような繊細な企画展示室の部品をどのように学校までの長時間の移動と展示する期間に耐えられる作りをするのか、箱の中で作るには技量が足りないという事実をどのようにカバーするのかという点に重きを置いた制作において、本稿では改めて振り返るとともに、この講義で得た経験や知識を再確認していく。

2. ミニミュージアムの構想

一から何かを作るにはまず構想を練らなくてはならない。何をテーマに作るか、どのような規模でどのようなものなら自分で作れるかという様々な課題とぶつかることとなった。

まず、提出の順番としては企画展のテーマ(名前)と展示室の図面の提出があり、簡単に現状やコンセプトなどを提出して、模型や図録の制作に着手する形になる。テーマを決めないことには何も進めることができないのである。大きすぎるテーマはその後の指針にならず作りにくくなってしまいが、テーマを狭めすぎると身動きが取れなくなってしまう。また、ここで一番重要になってくると感じたのは、そのテーマに興味、関心があるかどうかである。全く知らない分野であれば、調べることがかなり大変な作業になってしまうだろう。卒業論文のテーマが決まっている人や、過去に何らかのテーマにして調べたものがある人はそのテーマに関連づいているとやりやすいと感じた。

私の場合、3年生の前期の課題となったミニミュージアムの制作は、ほかの授業の課題と並行して行うことになった。オンライン授業などによって想像していたよりも時間が限られていたため、今後も必要な知識であることや、学んだこと、調べたことのある分野であることは制作において、重要な点となった。私の企画展のテーマは「江戸のヒロインから見る着物の魅力」である。着物を着ることが趣味であり、伝統や文化にも興味があるため、構想自体はスムーズに進んだと考えている。この段階でどのようなものを展示したいという案がいくつかあり、それらに並行して後述する現状やコンセプトの作成へと進んだ。

3. 現状分析・ビジョン・コンセプトの設定

以下に図録に掲載した現状分析、ビジョン、コンセプトを引用し、その設定過程について述べていく。

【現状分析】

近年観光地等において若者や外国人を中心に「着物」がブームとなっている。しかし、その観光地で着られている着物はほとんどが着物、小物、着付けが一式セットになっているものである。これは「レンタル着物サービス」というもので、浅草や川越、京都など神社仏閣が多い、または、古き良き日本の町並みのようなものが残っている観光地で提供されているサービスである。着方も必要なものもあまりよく知らないという人が多い。着物は特別なものであり、日常のものではない。現在の日本では多くの人が洋服を着ていて着物や浴衣は成人式やお祭り、花火大会など着る機会が限定されているイメージを持ちがちではないだろうか。

現状分析では近年における「着物」の在り方に着目し、「特別なものとしての着物」という現在の文化の広がり方を述べている。この企画展では多くの人が一般的に着物を着ていた時代と現在の着物の在り方を比較し、過去から学ぼうという趣旨のため、現在の着物に対するイメージや扱われ方を簡単にまた、身近に感じてもらえるように実例を示しながら説明している。

【ビジョン】

- ・企画展を通して着物を普段着として着ていた江戸の流行から着物の自由さや気軽さを知る。
- ・江戸のヒロインという一般人よりも人目につく彼女たちの着こなしから着物の楽しみ方を知ってもらう。

ビジョンでは上記2点を目標として設定した。1点目は、敷居が高く感じられたり、特別なものとして感じられてしまいがちな着物のイメージを少しでも気軽に、身近に感じてもらうようにと考え設定した。成人式の振袖や結婚式のような華やかなイメージが多い着物だが、普段着としていた時代の簡単な着方を目にすることでイメージの変革を狙ったものである。2点目は当時の読者モデルのような立ち位置である人たちの着こなしから、幅広い楽しみ方を知ってもらうことで、着物を着ることに対して興味を持ってもらおうと考え設定した。着物をより身近にということに重点を置いた展示のためこのような目標設定とした。

【コンセプト】

本展を通して

- ・着物を身近に感じてもらい着物を自らそろえて着付けることに興味を持ってもらう。
- ・着物の魅力を知ってもらい敷居が高くて着られないなどのイメージを改めてもらう。

コンセプトでは、現状分析とビジョンを踏まえ、最終的な目標としてこの二点を設定した。かなりテーマの範囲を狭くして、わかりにくい部分を排除し、身近に感じて、実際に着てみてほしい、という部分を大きく掲げる形となっている。普段堅苦しい、敷居が高いと思われがちな着物という文化を、現代に残し、波及させるためにも、この企画展が興味の足掛かりや、関心を寄せるきっかけになってくれるようにと願いながら、このような目標を設定した。

4. 模型制作

制作は、想像していたものよりも難解なものであった。構想自体は固まっておきイメージもある程度は完成された状態でのスタートではあったのだが、実際に発泡スチロールの箱をどう扱うべきか、何をどのように作っていけばよいのかという点がとても難航した。当初、図録と並行して行うつもりだった制作は、制作のみの形に変更し、折り紙すらまともに折れない不器用さをカバーするために、やりやすい方法の模索にひたすら時間を割かなくてはならない状態になったのである。いくつか今回の制作での工夫を含め、模型におけるポイントや見どころを説明していく。

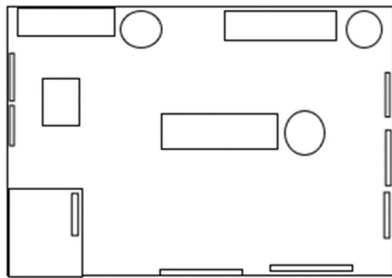
まずは模型を作る準備段階で、この後の展開をスムーズに進めるために行うポイントは、制作物は何よりも先に床を作るというものである。床は発泡スチロールの箱の底にぴったりはめることのできるサイズに段ボールを切り、あらかじめ色や模様などをつけておくことが重要である。1枚の床板として作った段ボールは、発泡スチロールの箱には戻さずその上で企画室を組み立てていくということが重要である。また段ボールは厚手のものを使っておくと、その後何かを刺して固定するときなどに簡単になる。

さらに、通学時の運搬による衝撃などで破損してしまうリスクを下げるためすべての企画展示室内の部品を磁石で固定し、取り外し、移動が可能にようにした。作成の時にもすべて外しながら作れるメリットは大きい【画像1】。



【画像1】すべての部品を取り外した状態】

ではここからは展示内容に触れながら模型について説明していく【画像2】。これは、企画展示室の見取り図である。各セッションごとにある程度の順路を設けることで理解しやすい展示を作ること心掛けた。各展示ケースは百元ショップで売っているトレイを利用し、土台は画用紙で外側を作り中に段ボールを重ねてつぶれないようにする方法をとった。段ボールは同じサイズにカットし箱にするのは難しいが、適当な大きさにカットし高さの補強にするのはとても簡単である。これらの部品はシールマグネットを使いそれぞれの部品が個別に動かせるようにした。ここまでは、成功したのだが、一つだけ想定外のことが起きた。トレイは底の面が正面になり、裏には展示が正面から見えるように紙を張ったのだが、この時瞬間接着剤を使用したことによって透明のトレイが白くなってしまった。調べてみると、瞬間接着剤とプラスチックは相性が悪いものが存在するということがわかった。細心の注意を払って扱うべきである。さらに、小さい範囲の着色にはマニキュアを使用したり、色を変化させるには木工用ボンドなども利用した。



【画像2 見取り図】



【画像3 見取り図と同じ向きの模型】

また、一番苦勞した点は着物のレプリカを着たマネキンの作成である【画像4】【画像5】。まず、着物を着せる芯を紙粘土で作りそこに順番に布を重ねていく。微妙な色の差はペンやボンドで色を変え、縫い合わせるのにはサイズの難しいので布のほつれ処理をボンドで行いサイズを合わせて切っていく。展示する絵の資料と見比べながら極力形や色を近づけていく作業は特に時間がかかった。ボンドや紙粘土は乾くのに予想以上に時間がかかるため、その時間を考えて作業することが大切だと感じた。



【画像4 着物レプリカ】



【画像5 レプリカのもととなった資料】

制作にあたって予想外の点はいくつかあったが、トラブルに見舞われながらもある程度までは想像していたものに近づけることができたのではないだろうか。反省点としては、展示資料の絵の額縁がないことや、説明パネルの作りが簡素になってしまったことである。計画通りにはいかないことばかりの中で、どこに力を入れるか、どのように見た目を整えるかというバランスは難しかったが、自分なりのアイデアで完成させることができたのはよかった【画像6】。



【画像6 完成品の一部】

5. 図録・ポスター

ここからは、模型制作と並行することができず時間配分に苦しんだ図録の作成について説明していく。図録は展示内容についてのほか、説明パネルなどの仕様についてまとめたものである。実際に使ったキャプションや展示品についての解説などもされている。今回の展示は資料の数自体が少なく、一つ一つが半独立の形をとった展示のため図録の出来上がりは心配していたが、模型を作るにあたって情報量が増えたこともあり、まとまりのあるものになったと思う。キャプションの文体と図録の文体が多少異なるため、その部分の推敲は大変だったが、キャプションや説明パネルのわかりやすさには特にこだわった。ターゲット層を考えると、全体にオシャレでスタイリッシュな要素を入れたかったが、時間の関係で簡素になってしまった点は反省材料となった。

ポスターの作成では、カラーでの作成となったが、パソコン上で見ている色と印刷してからの差や、情報量とインパクトのバランスに注意し、目を引きかつ分かりやすいものになるように意識した。ポスターは駅の市域情報のところに張ってもらうという狙いを込めて、足を止めて読み込まなくても、どの様なことをやるのかということが一目でわかることを中心に据え制作した【画像7】。



【画像7 本企画展ポスター】

6. おわりに

以上、ミニミュージアムの制作について様々な点から振り返ってきた。一連の流れを通して大切なことは余裕をもって計画を立てることであったと思う。始めてやる慣れない作業はつまずいてしまう点もあり、計画通りにはなかなか進まない。また、作業をしていく中で新たな発見や、増やしたい部分も出てくるため、それを形にするためにも余裕をもって作成することが重要である。何を伝えたいか、それを伝えるためにはどのような展示が効率的であるか、その展示を制作することは可能であるか、この三点を意識しながら制作を進める必要があるため、どれか一つが欠けていても制作がままならなくなってしまう。自分が作れるものだけを集めて作ってしまえば目標からずれてしまい、伝わらない展示になってしまう。しかし、自分の制作技量と全く合わないものを計画すると、時間やクオリティの面で大変になってしまうだろう。自分のできる最大限のものを作るためにどのような配分で課題を進めていくかということを考え、その都度臨機応変に対応していくことは、どのような作業においても重要であると感じた。

また、この課題を通して、想像力を働かせることの重要性に気づいた。「こういう風なら作りやすい」「この形はほかにどんな作り方ができるか」などの印象から、それを解消するためのプロセスを考えると案は浮かびやすく、実行に移しやすいということが今回の制作を通して分かった。最後までやり抜くこと、計画を立てること、臨機応変に対処すること、目的意識を持つこと、そして、想像力を働かせること。この課題ではたくさんのことを意識する機会があった。どれも今後の人生において大切なことだと感じ、また、これからも高めていかななくてはならないポイントであると思う。今回のミニミュージアム制作を今後の生活にも生かしていきたい。

博物館経営論課題 ミニミュージアム制作を終えて

人文学部日本文化学科3年 加藤 樹香

はじめに

博物館経営論の最終課題は企画展の展示室の模型を最初から作り上げ、図録とポスターの作成も行うものであった。先輩方が制作したミニミュージアムには、他の授業との兼ね合いも考えて余裕を持って進めるべきと全員がアドバイスしていたが、先輩方の教えを素直に受け取りコツコツと進めれば良かったと、制作途中に何度も思った。

新型コロナウイルスの影響もあり、対面での授業は少なく、ある程度の説明を受けたあとで実際に学校に行ったのは発砲スチロールを受け取りに行った時だけであった。

展示を1人で作りあげるという課題は工作が得意なのでそこまで苦労はないだろうと考えていたが、想像していた以上に大変な課題であった。1人での作業の中で、まとまらない構成や思うようにいかない模型の制作は心が折れそうになることもあったが、制作を終えてみると、今までの学芸員課程の集大成のような授業であったと感じる。

本稿では、ミニミュージアム制作における工夫点、意識した点、反省点、注意点を通して、この課題で得た学びを振り返っていく。

1. ミニミュージアムの構想

自由テーマの企画展ということで、自分の好きなもので展示を構成できるのだと知って非常に楽しみであったが、同時に何を題材とし、何を展示するか、どのように展示するか、借りられる展示物なのか、模型を制作するのか、など多くの問題もあり不安が募った。挑戦してみたいテーマは多かったが、企画展を開催できるほど展示物を用意することができるかということ意識し、テーマの決定を行った。

企画展のテーマは「京都異界探訪」である。このテーマに決めたきっかけとしては、偶然テレビで「京都には地獄に通じる井戸がある」という映像を目にしたことである。元々卒業論文で京都の文化や伝統に関することを題材にしようと考えていたので、京都ということもテーマ決定理由の1つであった。調べてみると京都には以外にも、幽霊が買いに来た飴屋や渡っても戻ってはいけない橋だとか、何やらオカルトチックな場所がいくつも存在することを知り、興味が湧いてこのテーマに決定した。図録作成のための文献やインターネットでの情報集めは非常に楽しい作業であった。

2. 現状分析・ビジョン・コンセプトの設定

以下に図録に掲載した現状分析・ビジョン・コンセプトを引用し、その設定過程について述べていく。

現状分析では、過去の京都の人々が経験した災厄が現代にも残っていること、それらを受け継ぎ疎かにしていないことをまとめ、ビジョンでは、それらを知ることによって新たな京都を理解する。そしてコンセプトでは観光資源や新たな魅力として学ぶことで親しみを持ってもらうことを目指した。

【現状分析】

近年、グローバル化が進む現代では変遷が激しく常に新しいものへと変化していく。このような現代の中でありながら、昔のままの様相を色濃く残しているのが「千年の都」とも称される京都である。

京都では多くの文化・伝統・行事が当時の形を保ち残っている。しかし、残っているのは目に見えるものばかりではない。千年もの時が経った今でも、陰陽師達が残した呪術や怨霊によってもたらされたものが生きているのである。日本三大祭の1つである「祇園祭」も疫病退散を祈願した御霊会が始まりであるように、京都とは古くから魍魎魍魎が跋扈する異界との関わりが強い。

京都の礎を築いた桓武天皇が弟の早良親王の怨霊に苦悩し、四方の神に縋り、鬼門に社を建て、驚くほど頑丈な警備を神々に祈った。歴史の授業で習ったことという認識でしかないかもしれない。しかし、京都の人々はこのことを「昔のこと」とは思っていない。年中行事を疎かにせず、現代まで続いているのは目に見えないものとの交流が盛んだったからではないだろうか。

本展では、京都で暮らす人々に馴染むように今も残っている異界に目を向けることで、当時のまま残っているものを知っていただきたい。

現状分析では、テーマである「京都と異界」について、過去の京都での災厄に視点を置いて、それらが現代の京都にどのように残っていて、どのように人々の暮らしに影響しているかを述べた。現代の京都に残る異界の具体的な説明を省くことで、来館者に想像力を働かせて自ら考えたもらうことを意識した。また、人々の暮らしに馴染むと説明することで、気味の悪い異界から、日常生活の一部となっている異界へと焦点が移るように工夫したものとなっている。

【ビジョン（短期目標）】

本展を通して、

京都の「異界」を学び、興味を持ってもらう。

「異界」と聞くと、どこか怪しく恐ろしいものを感じるかもしれない。しかし、京都で暮らしている人々にとっては何の変哲もない日常である。「異界」を学び、新たな世界を覗いていただきたい。

ビジョンでは上記を目標として設定した。自分たちの社会の外側に広がる世界である異界は、妖怪が住む世界や靈魂が行く死後の世界などと考えられてきた。そんな怪しく恐ろしい異界だが、京都では日常に過ぎないということを説明し、この展示では異界と日常を結びつけることで、日常の中の非日常を体験してもらえることを目標とした。

異界と聞くと恐ろしいものを感じるかもしれない。しかし、本稿での異界は交わることのない別の世界などではなく、常にそばにあるが気付きづらい日常といったものである。先ほどミニミュージアムの構想で述べた「地獄に通じる井戸」を実際に見に行った時に、どんな辺境の地にあるのかと思ったが、有名観光地の清水寺の近くの住宅街にあった。井戸の堀の向こうは民家やアパートに囲まれていた。そこで暮らしている人々にとっては身近で日常の異界である。

【コンセプト（長期目標）】

本展を通して、

- ・京都を「異界」という観点から見ることで新たな観光資源を目指す。

清水寺・伏見稲荷大社・八坂神社など京都には多くの観光客に人気の名所が存在する。だが、京都の名所は数多く存在する。そこで、「異界」を交えた場所を知り、新たな観光資源を目指す。

- ・京都の新たな魅力を知ってもらう。

華やかな都の顔を持つ反面、おどろおどろしい闇を持ち合わせる京都。雅やかな歴史の裏に隠された真実を学ぶことで、京都の新たな魅力を知っていただきたい。

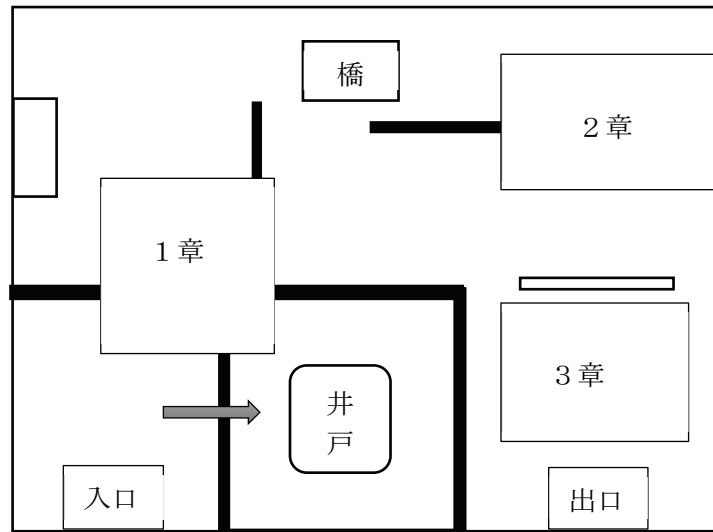
コンセプトでは、上記2点を目標として設定した。1点目は観光面として異界を見るものである。有名観光地と異界の意外な繋がりや、ガイドブックに取り上げられることも多くない少しマイナーな異界を展示品として扱うことで、京都の異界を幅広く味わってもらう。2点目は新たな発見である。世界からも屈指の観光地と扱われる京都の言わば裏の顔を知ってもらうことで新たな発見と印象の変化を与えられることを意識した。また、堅苦しく感じられないようにコンセプトを簡潔に設定し、異界に関する情報をあまり入れないことで先入観にとらわれないように工夫した。

3. 模型制作

制作は、メイン展示以外の展示構成、何をどのように展示するかなど全く考えていなかったなのでそこから始めることとなった。図録を先に作成することで流れを考えながらまとめることができるので、展示構成が決まっていない場合は図録から作成することを勧める。図録は図書館にある文献やインターネットからの情報を参照した。図録を作成し終わった後に、模型を制作し始めたので模型は提出するその日までかかりきりとなってしまったため計画的に制作してほしい。

模型の制作は思うようにいかなかったことが多かった。ダンボールを使って底上げしすぎて発砲スチロールの蓋が閉まらず、提出の際に学校に持っていくまでが大変だったので、底上げ作業は慎重に行っていただきたい。発砲スチロールの側面には黒の画用紙で壁紙を装い、怪しい雰囲気 연출した。画用紙では側面に沿って貼り付ける作業に苦戦し、つなぎ目の部分が目立つため、実際の壁紙を用いることも1つの手だと感じた。

展示室の壁紙を貼り終えたら、内装と展示品の制作に取りかかった。内装は展示構成を3つに分けたのでそれぞれを壁や展示品で区切るようにしたが、井戸の展示室から出た後はどの順路で進んでも良い仕様になっている。来館者の興味のある分野はそれぞれで異なることを考慮し、一部が混雑することを防ぐためである。展示品を時代順に配置しなかったのもそのためである【画像1】。



【画像1 展示室マップ】

展示パネルは紙、ケース展示はプラ板と紙粘土、実物の模型は紙粘土を用いて制作した。展示した井戸を囲うように壁を設置することで井戸をメイン展示として見せるように工夫した【画像2】。紙粘土を主な材料として井戸を制作したが、着色の際に水彩絵の具で着色したため色がまばらで、乾いた後にひび割れが多く屑が出てきてしまうので、乾いてからボンドで補強してその上からアクリル絵の具で着色するべきであったと感じている。他にも橋と鳥居も制作したが、同様に水彩絵の具で着色を行ったため見栄えと強度を考えるとアクリル絵の具も試してみるべきであった。実物の模型制作は納得のいく出来映えとなったが、当初は鳥居を3~4基制作しようと考えていた。しかし、時間的余裕がなかったため1基のみの制作となったことが心残りである【画像3】。



【画像2 実物模型 井戸】

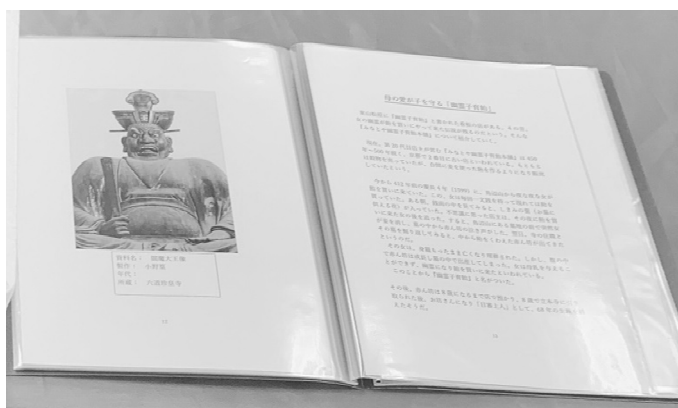


【画像3 実物模型 鳥居】

発砲スチロールは想像していたより扱いづらいうえに、細々とした作業が多かったのが苦労した。気が進まない作業だと思っていたが、イメージ通りの物ができていく段階は見ていて面白かった。少しでも制作意欲を継続させられるように、「自分自身が楽しいと思える展示」を制作するように心掛けた。何をどのように展示すれば私は面白いと思うかを常に考えることで自分のモチベーションをキープすることもできる。

4. 図録・ポスター

図録を作成してから模型を制作し、展示構成を具体的に考えるための作業でもあったので図録に割いた時間の方が多くなった。1章～3章まで、それぞれ異なるテーマとしたが構成は同じである。テーマの説明文章を入れ、そのテーマに関する資料、必要な場合は資料の詳しい説明文も加えた【画像4】。



【画像4 実際の図録】

図録作成は私にとって最も楽しい作業であった。自分の好きなことを好きなだけ調べながら文章にしていく工程は非常に有意義な時間であった。パネル文章を作成するうえで気をつけたことは、専門的な話は書かないことである。予備知識がない状態でも楽しんでいただける展示を作ること

を心掛けた。自由テーマの展示だと自分の興味のある分野を選択すると思うが、好きだからこそ独り善がりの展示にならないように気をつけてほしい。

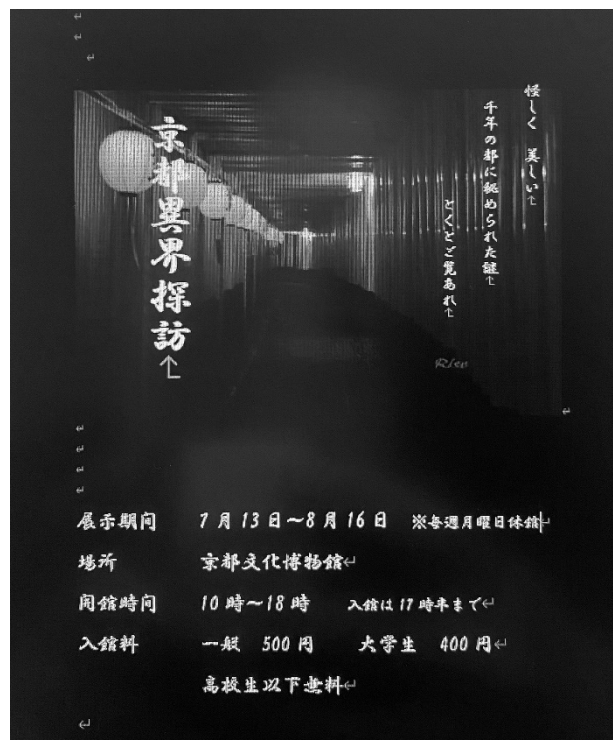
図録作成での反省点としては、模型制作を後回しにしたため図録に掲載する予定の井戸や鳥居などの実物の模型の写真が撮れなかったことで、図録が中途半端なまま模型を制作することとなったことである。

ポスターの作成は、あまり時間がかからなかった。「京都異界探訪」というタイトルは計画書を提出する前から決定していたので、タイトルが映えるようなポスターにしたいと当初から考えていた。第3章の作成時に夜の伏見稲荷大社の写真を発見し、日の光を浴びて明るく輝く朱色の鳥居とは打って変わって、夜の暗闇に提灯の明かりで照らされた鳥居はどこか不気味で怪しい雰囲気を醸し出していた。まさに異界と称したくなるような美しさに惹かれてこの写真を選んだ。

鳥居の朱色がより映えるように全体は黒で統一し、文字は白でおどろおどろしさを出すためにフォントにもこだわった。写真の上にタイトルとキャッチコピーを載せることで黒と白のコントラストが鮮明になるようにした【画像5】。

キャッチコピーを考えることが大変であった。怪しくもあるが魅力もあるということを示し、遙か昔から現代まで様々な変遷を乗り越え残ってきたということを伝えられるようなキャッチコピーにしたいと考えていた。中々良い案が思いつかず、いくつか候補を決めて共に学芸員課程を受講している友人たちに手伝ってもらい1番票が多かったものを決定し「怪しく美しい 千年の都に秘められた謎 とくにご覧あれ」というキャッチコピー

となった。少し古風な言い回しをすることで、京都の歴史の深さがうまく表現できたのではないかと考えていて非常に満足の結果となった。



【画像5 実際に作成したポスター】

おわりに

ミニミュージアム制作を通して学んだことは、「進行具合の調整」と「計画性の重要さ」であった。前者では、図録を作成してから模型を制作したことで、図録作成に支障が出た。模型制作にも、どの順番で展示品とパネルを設置するべきか分からないなどの問題が出た。具体的に何を展示するか決まっていなかった場合は、図録から作成すると良いが、どちらかを疎かにするような進行ではいずれどこかに不都合が現れることになる。後者では、内容が定まっていないうち、軸となることだけを考慮して提出した計画書はほとんど役に立たなかった。早い段階で展示構成や展示品の選定、パネル文章、模型制作に手を付けていれば、更に良いものができていたと思うと後悔が残る。それを回避するためにも、先輩方のアドバイスを元に細やかなスケジュール調整を行い、明確な目標を立てて挑み、早めの計画と迅速な行動をとることが重要であるところで勧告しておく。

また、このように振り返る機会をいただけたことで上記のようなことに気づけた。ミニミュージアムを制作している最中は課題を提出するためにただ辛い作業を乗り切ったが、思い返してみるとこれからの人生に役に立つ経験であったように思える。自分1人で企画から展示までやりきった中で、自身の計画性のなさに自信を喪失することも時々あったが、この課題に取り組んだことで自分の改善点を知るよい機会となった。

ミニミュージアム制作－「竹の世界」展を終えて－

人文学部日本文化学科 3年 竹花 美恵子

はじめに

「ミニミュージアム制作」は、自分で企画展を構想し、展示模型・図録・ポスターを一人で制作するという課題である。博物館経営論の中で、大きく重要な課題であり、学芸員課程における集大成の位置づけであり、1年次、2年次に学芸員課程で習得したことが活かされる場でもある。

今年はコロナ禍で、対面授業は初回のガイダンスのみで、後はオンライン授業となり、一人で、不安の中、先生のアドバイスと先輩の皆さんのミュージアム制作レポート・作品を頼りに、道標にして作業を進めることとなった。

本レポートではミニミュージアム－「竹の世界」展－の制作過程の中で、意図したところ、工夫したところ、反省点を振り返り、この課題を通して、学んだことを述べていきたい。

1. ミニミュージアムの構想

2021年度のミニミュージアム制作の日程は下記のとおりである。

【ミニミュージアム制作日程】

- 4月 ・「ミニミュージアム制作で検討すべきこと」提出
先生から、質問とアドバイスを受ける
 - ・先輩のミニミュージアム作品見学
 - ・制作用発泡スチロールと図録用クリアファイルの配布
- 6月12日 制作の現状報告提出
- 7月10日 作品の搬入締切り
- 7月16・17日 作品発表・他学生による評価実施

私の場合は、テーマの設定に関しては早い時期から、模索していたが、なかなか決まらずにいたところ、4月に札幌市教文ホールで開催された「光と和の時間－心灯す 竹あかり」展で、竹細工の灯りに癒され、以前、芸術の森美術館「イサム・ノグチ展」で和紙と竹で作られた照明に魅了されたことを思い出し、「竹」について調べてみたいと考えた。

あまりにも漠然としたテーマを決めてしまい、どのように展示をするのか、展示の目的は、何を見せたいのか、企画を具体化させる段階で、構想が進まず行き詰ってしまった。最初の企画試案に対して、手塚先生からアドバイスをいただいて、まず、現状分析、ビジョン、コンセプトをしっかりと考えることから始め、図録を作りこみ、模型・ポスター制

作という順で作業を進めることにした。

テーマを決めるに当たっては、第一に自分の好きな物、興味・関心のある物を選んだ方が良いと思われる。展示構想に幅が広がり、制作中も意欲は持続するし、作業に気持ちが入り、スムーズに進むのではないか。

2. 現状分析、ビジョン、コンセプト

企画展の現状分析、ビジョン、コンセプトを的確に考え、文章にする作業は重要である。次の図録や模型を作る土台となる。

以下に、図録に掲載した現状分析、ビジョン、コンセプトを引用し、述べていきたい。

【現状分析】

私たちは、自然の恵みともいえる「竹」を生活の中に深く取り込んで活用してきました。古代より日本の生活の中に根付いている。

日常使いの箸から始まり、暮らしの中の道具、建築資材、玩具などに「竹」が利用されてきた。

常緑で倒れにくく、真っ直ぐに伸びる竹は、生命力を象徴するおめでたい植物のひとつとされ、お正月に飾る門松にも使われている。

しかしプラスチックの登場により、買い物かごはレジ袋に替わり、食べ物の生産や貯蔵、台所用品、衣類から住居の断熱材・カーペットまで、プラスチック製品は、われわれの日常接するあらゆるものに置き換わっている。

近年、人々の生活が洋風化し、安価な輸入品が増加したことなどにもより、竹材、タケノコの国内生産量は減少傾向にあります。そのため、国内には管理不足の竹林が多く見られ、荒廃している。

現状分析では、古来より日本の生活に根付いていた「竹」の存在が、プラスチックの出現で、竹林の荒廃、竹産業の衰退を引き起こしている。現在、竹がどうなっているのか、何が問題なのか、これからどのように進んでいくのか。その状況に対して、どのようにアピールすべきかを考えるきっかけを持ってもらいたいと考えた。

【ビジョン（短期目標）】

竹細工は日本の伝統産業の一つである。

生活の中に根付いている「竹」の種類・産地、日本の竹利用の歴史、竹工芸を調べ、竹についての知識を深める。

ビジョンでは、日本の「竹」についての知識を知ってもらうため、展示においても多くのスペースを使い、中心に据えた。

【コンセプト（長期展望）】

竹製品を駆逐してきたプラスチックは、竹と違い分解されずに自然界に残る。マイクロプラスチックの海洋汚染は深刻である。

このような時代において自然の恵みとしての竹を、放置される竹林の対策としてだけではなく、日常生活の資源として見直す必要がある。

- ・竹灯りの温かな光の空間を提供し、静かな空間の中に、暮らしの中にある竹製品などを実際に展示する。
- ・シアターコーナを設置し、世界の竹、竹細工などの伝統産業を紹介する。
- ・日常生活の中に竹のぬくもりを感じる、伝統工芸の竹細工の魅力を伝える。

コンセプトでは、シアターコーナで日本の伝統産業を視聴し、「竹」の灯りのなかで穏やかな癒しの空間を感じてくれるよう意図した。

3. 図録の作成

図録の作成のためにまず資料収集を始めた。

参考文献として、竹の歴史、竹細工、竹産業に関する書籍、農林水産省と環境省のホームページ、国内の竹関係の博物館の情報などを調べ集めていった。

同時に、図録の作成が、私にとっては一番の難しい作業であり、図録の作成方法が具体的にわからなかったので、手塚先生にお願いして、学芸員課程実習室にある図録を見せて頂いたり、大学図書館に行き、閉架書庫にて北海道博物館や他の博物館の過去の特別展・企画展の中で、植物、動物、彫刻品などの「もの」に焦点を当てた展示の図録を数点借りて、目次や凡例、構成、参考文献の記載方法を参考にした。

図録の展示構成としては、次ページに示す通りに決めて、収集した資料(文章、写真、図表)を、先生提示の「A5 ミニミュージアム図録体裁」に準じて作成していった。

【展示構成】

第一章・竹を知る

竹の種類

竹の産地の分布（日本・世界）

日本の竹利用の歴史

第二章・竹の利用

竹の活用

竹のさまざまな利用

籠と箆、和竿、造園・建物の利用

生物資源としての利用・健康機能面

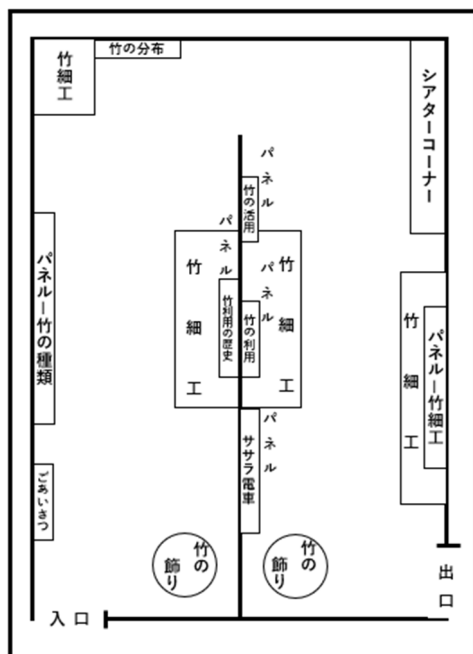
ササラ電車

第三章・シアターコーナ

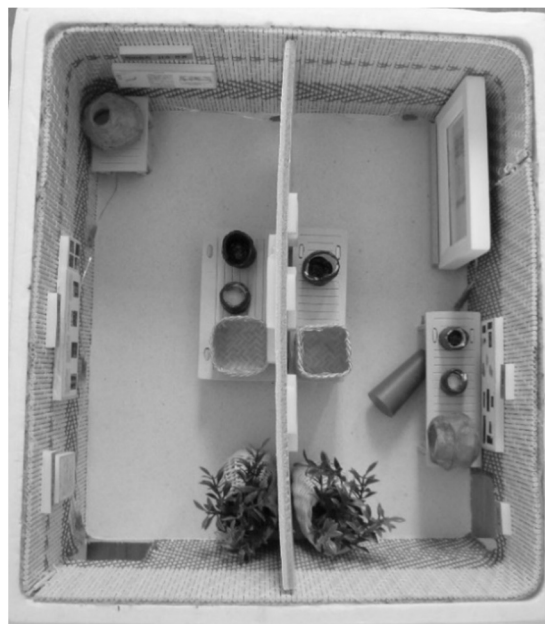
映像で世界の竹の種類、竹細工など伝統産業を紹介する

4. 模型の製作

展示模型の制作は、前述の展示構成に合わせて、順次、パネル、竹細工、シアターコーナ、竹の飾り物を作っていた。パネルは、図録から一部を引用するとともに、他の新たな資料で作成した【画像1】【画像2】。



【画像1：展示室平面図】



【画像2：完成した展示模型全体】

展示に使う材料は企画展のコンセプトに従い、自然の材料を使うことを心がけた。展示室の内装は、私の抱く「竹」のイメージで明るく、穏やかな空間にするため、全体を薄緑、黄緑系の色を使うことにした。

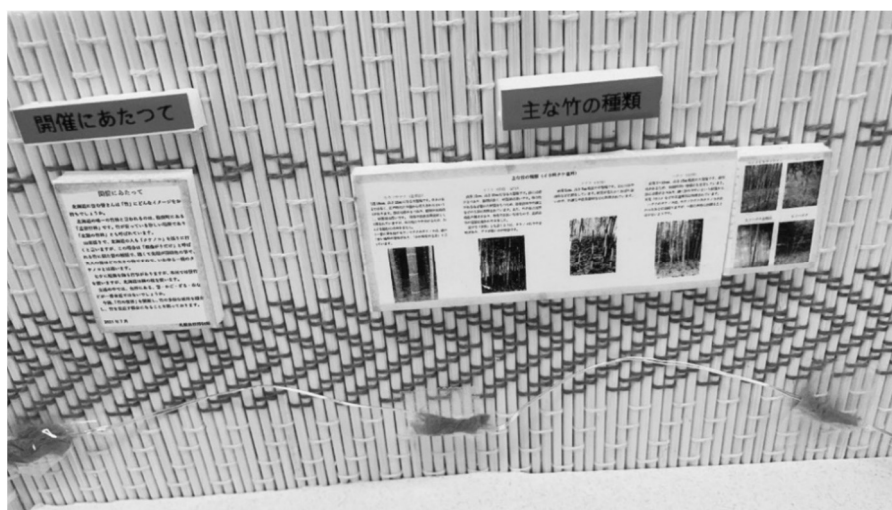
床は、薄緑色の紙（厚め）を貼り、壁は、気に入った壁紙が見つからないので、ホームセンターで夏用の竹マットを購入し、解体し表面の竹部分を使用した。竹細工を置く陳列台も、木を使った。竹ひごで竹細工を作る予定だったが、竹ひごが曲がらず断念し、紙粘土で小さな竹かご（のつもり）を作り、着色して展示し、多くは竹細工の写真を展示した。

◆工夫した点

- ・ 入口表示：発砲スチロール容器の外側に表示した【画像 3】。
- ・ パネル（文章・写真・図表）：資料をカラーコピーして、縮小し、貼りパネルに貼り、緑色のマーカーで囲みをつけ、浮きあがって見え、目立つようにした。パネルの題字は、緑色のテプラを使い印字し、同様に貼りパネルに貼った【画像 4】。



【画像 3：展示室入口の表示】

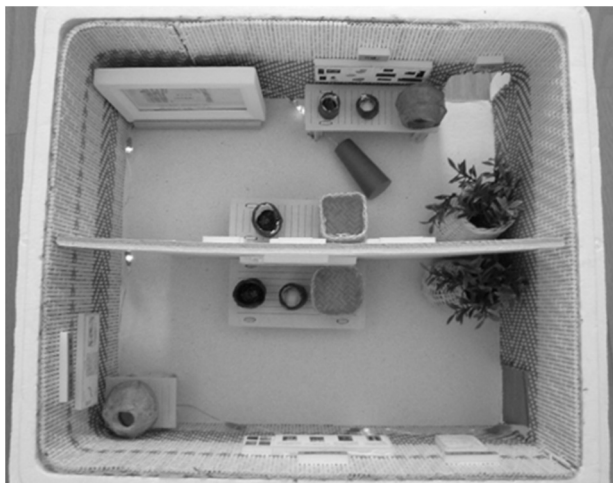


【画像 4：パネル（下の部分は竹灯りの電球）】

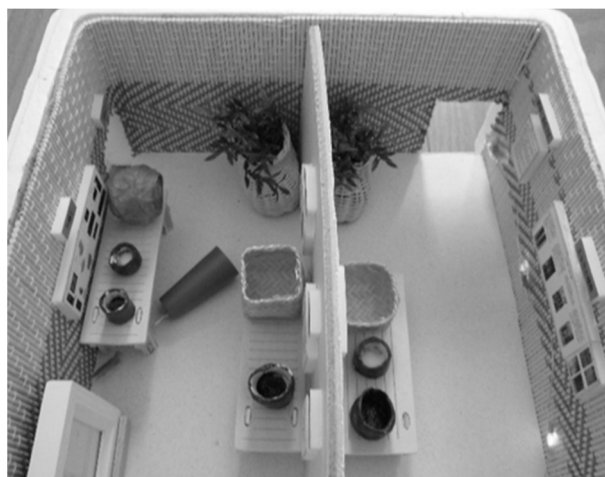
- ・ 竹灯り：クリスマスツリーに使っていた、小さなイルミネーションを利用して、電球に薄緑の和紙を被せ、スイッチとともに壁や、床に置き、スイッチの場所も掲示した

【画像 5・6・7】。

- ・ ササラ電車：札幌市民にとって、冬の訪れの風物詩として、毎年、新聞・テレビで紹介されるので、ササラ電車のパネルコーナーを設置した【画像 8】。



【画像 5：竹灯り 左側上部】



【画像 6：竹灯り 右側】



【画像 7：竹灯りスイッチ】



【画像 8：ササラ電車】

◆反省点

当初は、来場の方に楽しんでもらう企画として、以下の2つを考えていたが、オブジェや

作業台が作れず、力不足で断念した。

イベント：展示室の真ん中に、竹の大きなオブジェを飾り、「七夕飾り」を置き、来場者に

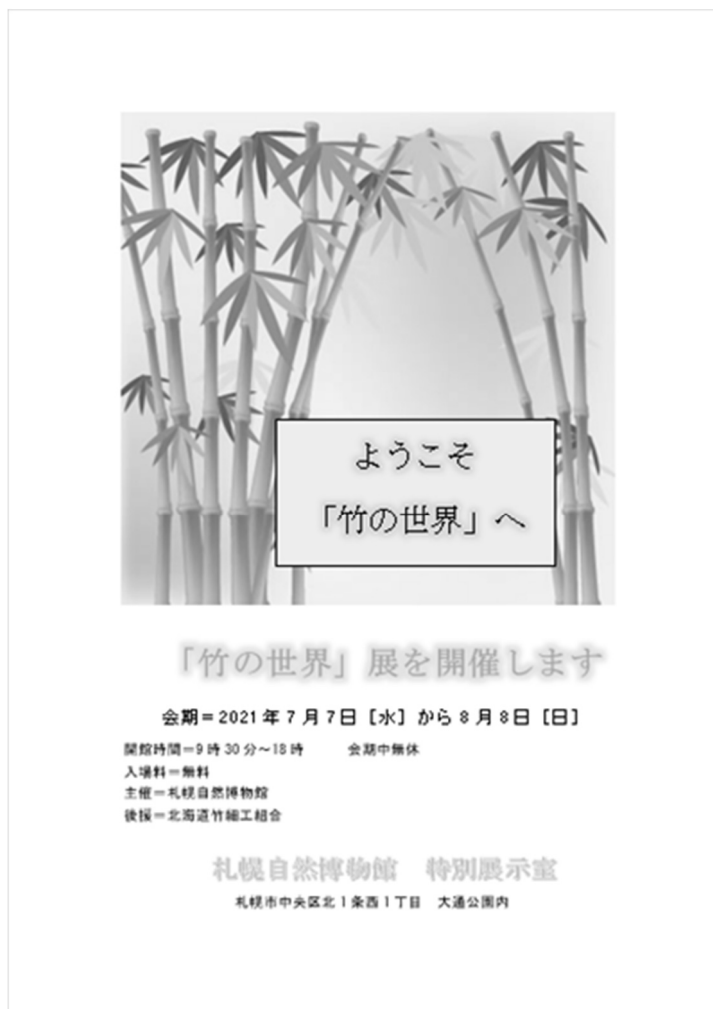
短冊に願い事を書いてもらう。(それ故に開催期間を7月7日～8月8日に設定)

ワークショップ：来場の子どもたちに、竹トンボや竹のカゴなど小物を作ってもらう

5. ポスターの制作

ポスター【画像9】は最後に制作した。

展示模型の内装の色に合わせ、明るく、柔らかい印象にするため、薄緑色の用紙を使い、「竹」のイラストを大きく扱い、必要な文言を入れた。



【画像9：ポスター】

◆工夫した点

- ・先輩の作品を見学した時、せっかくのポスターがよれていたのが何点かあり残念だったので、見やすく、長持ちするように、ポスターを張りパネルに貼り、その上に透明コートフィルム（ブッカー：市立図書館の本に貼られているカバー用フィルム）を貼り、裏側に卓上カレンダーを再利用して、直立させた。厚めの紙でも代用できる【画像 10】。



【画像 10：横から見たポスター】

おわりに

制作全体を合わせると、かなりの作業時間を費やしたが、7月10日と早めの締切りだったため、以降の時間は他の課題やレポート提出に充てることができ、締切りが重ならず良かったという記憶がある。

最初に、私にとって難しそうな図録を作成し、次に模型、ポスターという順序で進めた。図録が完成したことで、気持ちに余裕ができ、展示模型を作る作業は楽しい時間であり、文房具店、手芸品店、ホームセンターを回り、使えそうな材料を探し歩くのも楽しかった。模型作りをしている過程で、図録の見直し、削除、修正もでき、図録も良くなっていった。

今回、ミニミュージアム制作の報告レポートを記述することにより、振り返る機会と時間を持てたことは大変有意義であった。企画展で、何を伝えたかったのか、どういう意図をめざしたのか、それらにふさわしい展示だったのか、はたして伝わったのか、もっと何かできたのではないかと、改めて考えることができた。また、制作の過程を振り返り、まとめるというレポート作成の難しさも知ることができた。

制作にあたっては、最初に企画展の構想を練ることが大事である。そこに重きを置いて、しっかりと考えていくと、その後、自分に見合う作業方法が見つかると思う。

博物館経営論「ミニミュージアム」制作を終えて

人文学部日本文化学科 3年 中村 美南

1. はじめに

博物館経営論での「ミニミュージアム」制作は、これまで学んできた博物館学の知識を活用し、自身で設定したテーマに基づいてミニミュージアムの展示を完成させるものであり、ミニチュア模型や図録、ポスターも一人で制作する課題である。今回のように自分の考えを一から実際に具現化する課題は初めてであったため講義内で制作の手順や先輩方の作品を見せてもらい、アドバイスも受けつつ作業に取り掛かった。だが、先輩方のように完成度の高い作品を制作することができるのか、満足いく作品を作成することができるのかという不安もあった。このような不安も多くあったが、全て終えて振り返ってみると、これまでの講義を踏まえつつ作業を進めることができたと感じている。

本レポートでは、ミニミュージアム制作での工夫点や反省点、改善点を振り返りつつ、当課題で得た知識を述べていく。

2. ミニミュージアムの構想

ミニミュージアム制作に取り掛かる前に、準備段階としてテーマや構成の決定を行った。この段階で今回のミニミュージアム制作で検討すべきことについてのコンセプトや現状分析、展示プラン、図面などの提出が求められた。

まず一番大切なのは企画展テーマの決定である。自分自身が何のテーマに興味を持って進んで制作できるのか、想定する来館者にどのようなことを伝えたいのかなど考えるべきポイントは多様にあった。また先生や先輩方の助言として、好きなこと、興味のあることから選ぶのが良いということであったので、それに従うことにした。加えて、現状分析や長期目標に具体性を持たせることができるものを選ぶようにした。その結果「冥界の王ハデスの真実」というテーマで制作することを決めた。単純にギリシア神話が好きであったので、このテーマでミニミュージアムを制作したいと考えていた。ハデスに焦点を当てた理由としては、ギリシア神話といえば「ゼウス」を思い浮かべる人も多く、反対にハデスは冥界の王であるのでゼウスに敵対する悪のイメージやそもそも存在すら知らない人がいると思い、その認識を改めてもらいたいと考えたからである。

このように興味のあることをテーマにしたことで、現状分析や長期目標もすんなりと決定することができた。また展示物や図録のコラムを作る際には、そのテーマについてすでに持っている知識もあるので時間の短縮になるとともに、知らない知識については興味あるテーマなので進んで資料を探ることができ、新たな知識を得ることに繋がった。助言通り興味のあるもので企画展テーマを考えただけで、ミニミュージアム制作において自身が立てたテーマの軸をブレさせることなく制作終了まで進めることができた。

3. 現状分析・ビジョン・コンセプトの設定

以下、実際に図録に掲載した現状分析・ビジョン・コンセプトについてそれぞれ取り上げる。その中で、意識したことや設定過程についても述べていく。

【現状分析】

近年の日本におけるギリシア神話の認知度は低くなっている。「ゼウスしか知らない」「オリュンポス十二神は誰がいるのか」「あの神話は何の神の話なのか」を鮮明に記憶していない人がほとんどであると思う。その中でも「ハデス」と言われて一瞬で思い浮かべることができるだろうか。ハデスはゼウスやポセイドンの兄であるのに2人に比べて認知度が低い。また、冥界(=地獄)なので悪者扱いされ、正反対の天空を支配するゼウスと敵対しているのだと「悪」のイメージが強くなってしまっている。加えてなんの神なのか能力や性格などが分からない人も大勢いると思う。

世界が多様化を進めていく中で、歴史や教養として私たちも日本の神話だけではなく海外の神話の知識を身に着けることが必要である。それゆえ、神話の中でも有名なギリシア神話にまず興味を持ってもらおうと考えた。

現状分析では、ギリシア神話の日本における認知度について言及し、世界が多様化を進めていく中で教養として必要になる海外の神話に焦点を当てた。展示企画テーマとして「冥界の王ハデスの真実」という題で行うと決めていたので、ハデスに対する世間の反応や現状を述べ、ハデスは世間のイメージとは違うという印象を与えることを心掛けた。そして、ギリシア神話で有名なゼウスの名を使いハデスについて述べることで、ギリシア神話に興味がない人にも関心を持ってもらい来館者が入りやすくなるように工夫をした。

【ビジョン(短期目標)】

1. ハデスの存在の周知
2. 「悪」のイメージの払拭

ビジョンでは上記2つを目標として掲げた。来館者に意識してもらいたいこととして、ギリシア神話に登場する冥界の王ハデスの存在を知ってもらうことを第一の目標とした。まずはどのような人物なのかを、誕生の仕方や能力、兄弟との関係、ハデスに関する神話などを挙げ理解してもらいたいと考えた。

第二の目標は「悪」のイメージの払拭である。冥界=悪者というイメージが浸透し、映画『タイタンの戦い』(2010年製作/アメリカ)や『ヘラクレス』(1997年製作/アメリカ)などでも悪者として描かれている。このことから世間的には全知全能の神ゼウスと敵対するイメージを持つ人々も少なくないということがわかる。しかし実際は穏やかで心優しい一面もある「悪者」ではないハデスを知ってもらいたいと考えたため2つ目の目標とした。

【コンセプト(長期目標)】

1. ハデスという存在の全国化
2. ギリシア神話に親しみを待たせる

コンセプトは長期目標であるので、具体性を持たせ現状分析で述べた課題を解決するための2つの目標を挙げた。現状分析ではギリシア神話の日本の認知度の低さやハデスの「悪」イメージの浸透について述べた。コンセプトではこれらの現状をどのように変化させたいのかを指摘している。

具体的な内容として本企画でハデスを知ったことをきっかけに、オリュンポス十二神やギリシア神話、古代ギリシアなどに興味を持ってもらえることを目指す。また、ギリシア神話関連展示をシリーズ化し、全国的にギリシア神話の存在を広め確立させる。そして、ハデスに対し正しい認識ができるようになることも目指している。

4. 模型製作

今回のミニミュージアム制作の中で一番苦労したのが模型製作である。事前に図面を提出してあったので、初めからどのような模型にするか悩む必要はなかったが制作していくうちに改良した方が良いと思う点が何か所も見つかり模型を更新させながら制作を続けた。完成した模型は【画像1】である。



【画像1 完成した模型】

まず初めに行ったのは底上げである。先生からのアドバイスとして底上げをすることで模型全体のバランスがとれ、より良い作品が出来上がるということを教わった。実際に、展示物をどのように飾ろうか想像しやすかった。だが同時に思っていたより発泡スチロー

ルが小さい印象も受けた。

次に展示物をどこに配置するのか決めていきながら、模型内の装飾をしていった。展示ではハデスやゼウスの彫刻とそれに関連する絵画を取り扱う予定であったので、大雑把に紙にデザインを描きつつ展示物の配置を決定していった。装飾で初めに決めたのは壁紙である。イメージは「冥界」であったので冥界が描かれている絵画を参考にして、色や質感、出入り口の装飾を決めた。



【画像 2 入口のケルベロス像】



【画像 3 室内装飾】

【画像 2】は入口であり、冥界の入口にいとと言われる地獄の番犬ケルベロスイメージし、雰囲気を楽しんでもらうために実際に設置した。また出口にはハデスの象徴である

水仙を床に咲かせた。室内の装飾は【画像 3】である。黒を基調とし、壁の質感は岩の感じを出せる素材と彫刻の白が映える素材を選んだ。また、壁は来館者が飽きないように一面ごとに壁の質感を変化させた。しかし反省点として壁紙をしっかりと張ることができなかったことが挙げられる。素材によっては後から剥がれてきてしまうものもあるので、慎重にのり付けするのが良い。壁紙や装飾品が剥がれてしまうと一気に見栄えが悪くなり、納得するものを完成させることが難しくなってしまうので非常に大事なことである。また、改善点としては【画像 1】の入口がケルベロスに半分以上幅を取られてしまったので、もう少し大きく設定するべきであった。

また展示物作成において、彫刻部分と壁上部の装飾は紙粘土、壁の仕切りは発泡スチロール、絵画は印刷した絵、キャプションを表現している部分には画用紙を使用した。【画像 4】の壁上部にはハデスの象徴である水仙と豊穡の角をイメージして装飾している。



【画像 4 壁上部の装飾】

全体的に彫刻展示で幅を取ってしまうので、設計段階で通路を広く感じさせる配置にしておいてよかったと感じている。また、この企画展は「第一章冥界の王へ」「第二章ハデスは「悪」なのか」「第三章ペルセポネとの出会い」というように章ごとに展示物に変化しているのだが、その章立てをキャプションだけで表しているので変化が弱いと感じた。どこからどこまでが第一章なのかとわかるように変化をはっきりさせる工夫をするべきであった。だが、全体的には初めに自分が思い描いていた企画展模型が完成したと思っている。

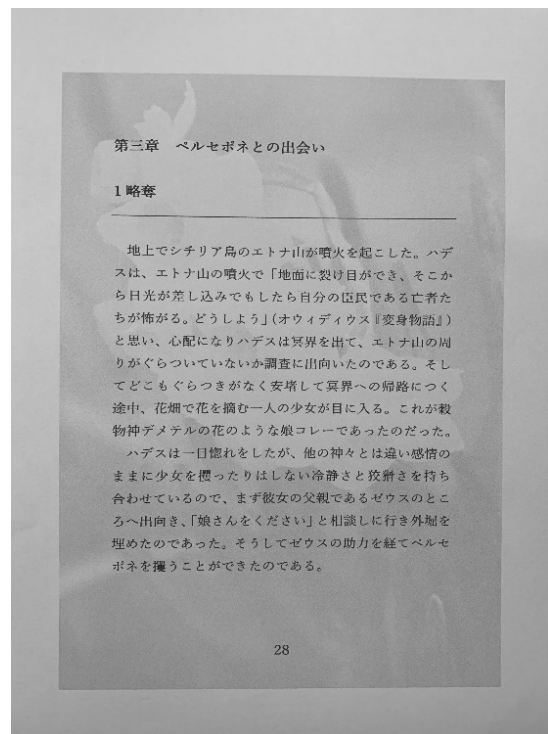
5. 図録とポスターの制作

図録作成は模型作成終盤からはじめ、ポスターは完全に模型が完成してからイメージに合うものを作った。章ごとの説明やコラム、展示趣旨や挨拶など初めての図録制作だったため、慎重に文章を練りながら進めていった。

図録のデザインはシンプルで見やすいものを目指した。章の初めの概要説明のページには、その話に合った画像を文章の背景として使用し、想像しやすいようにした。【画像5】は第三章「ペルセポネとの出会い」であるが、ここでの背景はハデスとペルセポネのシンボルである水仙を採用した。ほかにもハデスの基本情報をまとめてプロフィール形式にして表現することをこころみた。また、模型や図録を作成している間に使用する資料の変化もあったので資料目録はすべての作業が終わってから作成した。

しかし反省点として、章の説明やコラムなどどうしても文章ばかりになってしまい、少し見づらかったと思った。ただ長い文章にするのではなく、長くても見やすいデザインにしたり画像や図を入れてみたり工夫をするべきであった。だが、内容的にはギリシア神話やハデスを知らない人でも理解できるものが完成したと思う。

ポスター作りは、模型と図録が終わった後に取り組んだ。これは、ポスターは展示に興味を持ってもらえるのか一番重要なものであるので、全てが終了した後今までの考えを表せるものを作りたいと思ったからである。【画像6】は実際のポスターである。冥界イメージの気味の悪い感じを出したかったので黒を基調とした。画像にはハデスがペルセポネを攫う場面の彫刻を使用した。サブタイトルを付けてもっと想像してもらえようようにすべきであったが、【画像6】のように画像と空間をうまく利用して納得のいくポスターを作ることができたと思っている。



【画像5 水仙を背景とした章説明】



【画像6 ポスター】

6. おわりに

以上、ミュージアム制作で工夫した点や反省点、改善点を挙げていった。今回改めて振り返ってみると、自分の想像を形にできた達成感ともっと工夫したかったという気持ちを持つことができた。

本課題で大事だと感じたのは、時間を割く順番である。大変だったのは模型製作であるが、それだけに時間を使っていると図録やポスターがなおざりになってしまう可能性もある。実際、私自身も模型製作に時間を掛けすぎて図録やポスターにはあまり時間を割けなかった。このことから、時間を掛けるべき順番と計画は最初に行っておくべきだと感じた。そして模型製作をスムーズにするためには何をどのように展示して、どう見られたいのかをしっかりと確認しておくことが重要である。

今回のミニミュージアム制作は最初から最後まで自分ひとりで取り組む課題であり、今まで学んできたことを発揮させる場所であった。好きなことを表現することは楽しいが、理想が高くなりうまくいかない自分を責めたくなる時もあった。だが、制作終了したときの達成感、授業で共に学んできた人たちに評価される喜びを感じた。自分の意志を最後まで貫き、制作にあたっての計画性や何を表現してどのように伝えたいのかなど、自分自身の成長も実感できた。

また、今回ミニミュージアム制作を経て得た、時間を割く順番と計画性は社会に出ても期日までの作業や普段からの業務にも発揮されると感じた。期日までに完璧な状態にしたくても時間との問題で断念しなくてはいけないこともある。どのように時間を使うのが重要で、必要ないことは取捨選択をすべきであると学んだ。そして、その中でベストな状態をいかに作り出せるのが大切である。卒業後も社会の中で、ミニミュージアム制作で得た知識と経験、自分の意志を貫き成長していく意識を大事にしていきたい。

リクワイアド・エンバイロメント(Required Environment)と
ハンドリング・インストラクションズ(Handling Instructions)
～「実際に使うモノ」と「博物館資料」の扱いの違い～

3年前の学事報告書 - 31号では、期末レポート内の「オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1」と、「オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2」について述べた

今回、期末レポートを評価するにあたり、気になった点として「リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)」〔以下「R. E.」と表記〕と「ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)」〔以下「H. I.」と表記〕についてとりあげる。

期末レポート内では、学生が選択したモノを博物館資料として捉え、

- ・R. E. : 保存の際に気をつける点 (環境設定等)
- ・H. I. : 取り扱いの際の注意点

について記述することを求めている。これはシラバスで提示している学習目標の3つの項目の1つであり、「博物館資料の取扱いは、日用品の扱いとは大きく異なります」という部分についての、学生の理解と知識の反映に結び付いた課題でもある。

—学習目標—

【1. 博物館資料を扱う者としての心構え、及び倫理の理解】

博物館資料の取扱いは、日用品の扱いとは大きく異なります。フィジカル、インテレクチュアルの両面について考慮して取り扱わなければ、資料としての価値を損ねてしまいかねません。実習、あるいは実務で博物館資料と関わる際に、その重要さをしっかりと念頭に置いて行動できるようにしていきたい。

北海学園大学 学芸員課程 『博物館資料論 講義概要 (シラバス)』より抜粋

しかし「日常で使用するモノの扱い」と「博物館資料としての扱い」の違いをレポートで表現することに難があった学生が数名おり、私の教え方にも改善の余地あったと反省している。

博物館資料としての保存・管理と取扱いは、実生活での使用に際する手入れや取り扱いとは異なるという点は、期末レポート要項の説明のみならず、授業内でも述べてきた。しかし、十分に伝わらなかった学生がいたことを受け止め、より具体的な事例を増やして強調する必用であったのではないかと考えている。

博物館資料 (モノ資料の場合) は、頻繁に手入れやクリーニングを施してはいけない。汚れず劣化しない保存環境で保管して、手入れやクリーニングの必要を最小限にとどめることが求められる。やむを得ず手入れやクリーニングを行う際も、日用品と同様の手法や洗剤を使用してはならない。いかに50年後、100年後、数百年後……と恒久的に現状のコンディションを維持していくかを見据えた保存のための環境設定が必要である。

取り扱いについても日用品の「使用方法」とは全く異なる。最悪の状況を想定し、どんな微細な傷や付着物に対しても最善の対応をしなければならない。

このような心得や対策を伝えるため、口頭での説明のみならず、実際の作業現場の画像もスライドで紹介した。しかし、学生が感覚としてより深く理解するために来年度は保存管理と取り扱いでの、具体的な間違っただ事例を加えることなどを検討している。

上記の考察に加え、やはり COVID-19 による影響も感じられた。この件に関しては、不可抗力として済ませるのではなく、私自身がいかに臨機応変に対処していくかが重要であると考えている。昨年度（2020 年度）に引き続き、今年度（2021 年度）も COVID-19 への対応として、状況を見極めながら授業内容に修正・変更を施した。

「博物館資料論」を受講する学生の大部分は 1 年生であり、4 月から始まる 1 学期に「博物館概論」を新入生として受講し、9 月下旬から始まる 2 学期に「博物館資料論」受講するのが通例である。

「博物館概論」で博物館学のイントロダクションとして「博物館とは何か？」について学んだ 1 学期のあとに、続く 2 学期の「博物館資料論」にて「単なるモノ」ではなく「博物館資料」について学ぶのは効果的な流れである。同時に、「博物館概論」での理解度が、後に受講する「博物館資料論」および他の学芸員課程省令科目での学びに影響する。

特に今年度は 4 月に新入生として入学した時から、COVID-19 への対応による授業形態の変更の可能性や、他教科との授業形態の違いに戸惑っている雰囲気を感じられ、1 学期の「博物館概論」は今後の大学生活への不安を抱きながら受講しているようでもあった。講師である私自身が、常に COVID-19 の状況と大学側の判断をうかがいながら毎週の授業に取り組んでいたのだから、新入学生の不安と戸惑いは更に大きなものであったに違いない。

このような雰囲気を感じた 1 学期を終え、2 学期の「博物館資料論」が始まったが、多くの小レポートを採点するうちに気になることがあった。「博物館とは何か？」についての理解を前提として毎週の「博物館資料論」の授業を進めているが、この点の理解度が少し浅いのではと思わせる学生が数人いたことである。理解度が浅いという表現が適切かどうかは難しいが、つまり「博物館とは何か？」について、何人かの学生は試験のため言葉としては暗記したが、感覚として身に着けるのに難があったのではということである。この点については、やはり上述した 1 学期の状況が起因しているのではと考える。この点に気づいてからは、学期の中盤以降から後半にかけての授業では、いかに博物館資料を感覚的に理解させるかについて考えながら授業内容を修正していった。

現時点では 4 月から始まる 2022 年度の COVID-19 の状況と授業形態がどのようになるかはわからないが、不安な学生の気持ちを教える側が汲み取って、1 学期の「博物館概論」をさらに臨機応変に修正できる余裕を持ち、2 学期の「博物館資料論」、そして他の学芸員課程省令科目へと繋げていくことを意識しなければならないと痛感している。また、他の科目とのつながりを、各回の授業でも学生に意識させることの重要性を改めて考えさせられた 2021 年度であった。

博物館資料ドキュメント 『篆刻(てんこく)～「みこと」』

人文学部日本文化学科 2 年 宗廣 みこと

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

この資料は篆刻(てんこく)という石製の判子で、2017年に宗廣みことによって製作されたものである。宗廣みことが書道に使用する道具がまとめて入っている鞆の中から発見された。製作者兼所有者が「蘭亭序」(らんていじょ)という書道作品を写した作品の左下にこの篆刻が見られる。

資料全体の形は正四角柱で、押印面は横 1.9 センチ、縦 1.9 センチの正方形、高さは 5.0 センチ、彫の深さは 1~2 ミリ程度である。重さは約 60 グラムで、小さいがずっしりとしている。素材の石の種類は定かではないが、グレーに近い黄緑色に白色のマーブル模様のような模様がうっすらとついている石で、光に照らすと表面の白っぽい部分が少しだけ透ける。色あいや、それが篆刻によく使われることなどから判断して、青田青白章石だと考えられる。また、製作者の記憶と所有物から、彫刻刀で彫られたものであると思われる。押印面以外の手触りは、やすりで磨かれているため滑らかでつるつるとしている。

押印面は四角い縁取りの中に製作者の名前である「みこと」の文字が縦書きでデザインされている。製作者本人の筆跡に比べると、直線的で横広な形の文字となっている。資料の側面のうち一面に、製作者の名字である「宗廣」と、「刻」の文字が彫られており、上から朱色の墨を塗って強調されている。こちらは直線的ではあるものの、製作者の筆跡に近い文字である。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

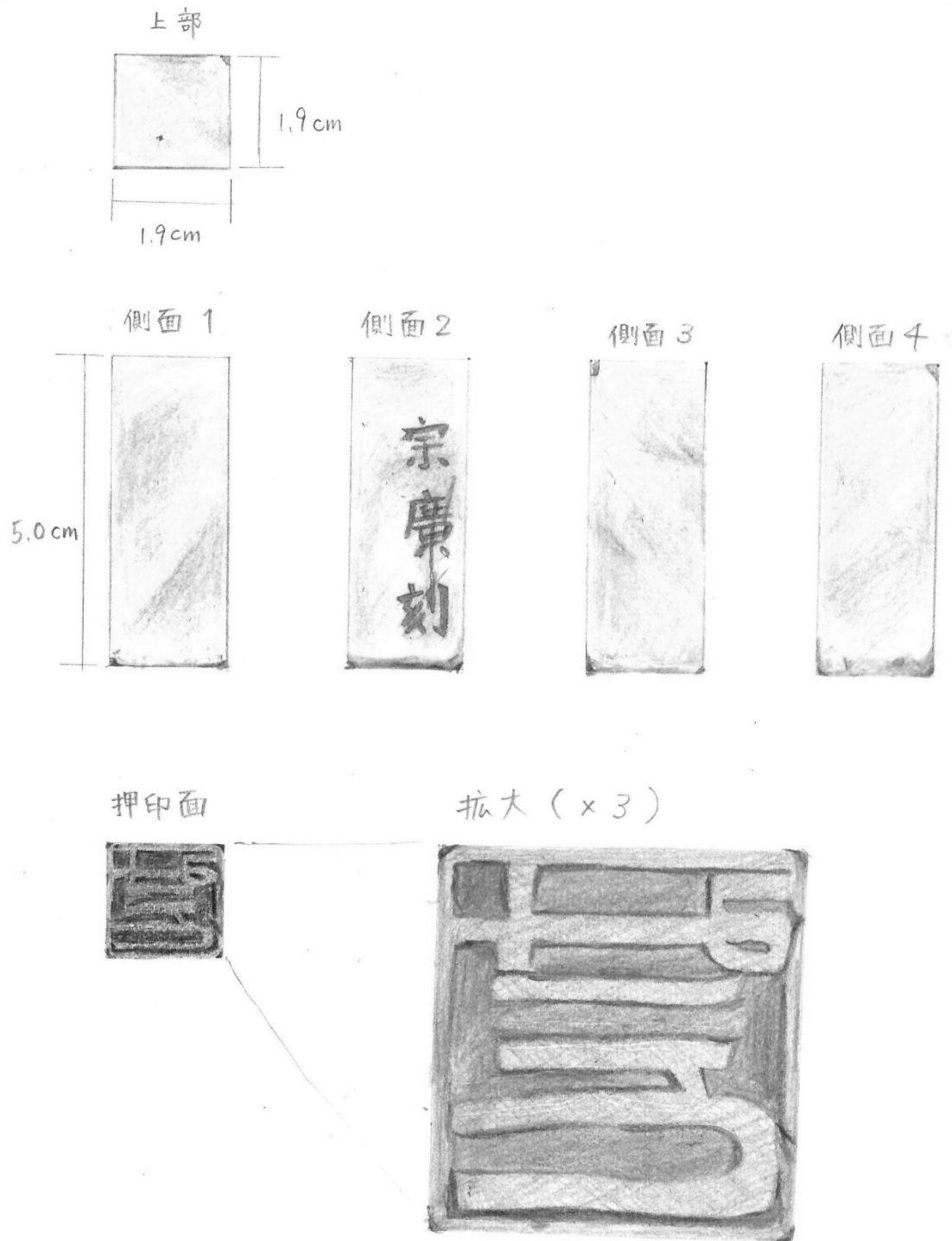
資料は 2017 年、書道の授業の課題として高校 1 年生だった所有者の宗廣みことにより製作されたものである。この資料の完成時に一緒に作られた、画用紙を四角に折りたたんでセロハンテープでとめただけの蓋のようなものが押印面に被せられた状態で保管されていた。

所有者は、この資料は印泥とともに使用したいという考えを持っているものの未だ印泥を購入するに至っていないため、資料を製作した授業以外では使用されていない。

押印面、側面の文字ともに、石の表面に油性ペンで下書きをし、おそらく彫刻刀で彫られた。側面の「宗廣刻」の字の部分に所々見られる朱色の墨がついた傷は製作者の彫り損じである。授業では基本的に制作者の名字か名前の漢字を篆書でデザインすることを求められたが、この資料の製作者は自身の名前が平仮名であることに個性を感じ、それを生かしたいと思った。しかし平仮名が篆書で書かれたものは存在しないので、製作者なりの篆書のイメージと平仮名を融合したデザインとなっている。「こ」の両端にだけ余白があるの

は、おそらく余白がない場合よりも平仮名の「こ」であることがわかりやすくするためだと思われるが、三文字全体のバランスをとったデザインとも考えられる。一方で側面の文字は、製作者の筆跡と酷似していることや彫り方が押印面に比べて単純であることから、デザインというよりは記名の役割を果たしていると思われる。

イラストレーション (Illustration)



コンディション・レポート (Condition Report)

使用回数が少ないことや、3年ほど日光に当たらない場所で動かされることなく保管されていたことにより、大きな変色や破損は見られない。しかし、資料は制作時または使用時に丁寧な扱い方をされておらず、押印面の四隅、側面、持ち手部分の角など、所々に小さな傷や欠けが見られる。特に持ち手部分の右上の角は明らかに欠けている。

押印面には、使用時に付けられた印泥(いんでい)と呼ばれる朱肉が付着したままで保管されていた。印泥は完全には固まっておらず、軽く表面を拭けば拭き取れる状態である。そのため依然として篆刻としての機能は失われておらず、資料完成時と同様に問題なく押印することができる。印泥や側面に彫られた字に塗られた朱色の墨にも、特に変色は見られない。

リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

石製のため変色や腐敗を過度に懸念する必要はないが、印材は中国産である可能性が高いので、印材が生産されたであろう中国の気候に近い環境での保存が好ましい。石材の劣化につながるカビを防ぐため適度な湿度のある環境での保管が良いと思われる。また、直射日光は避けるべきである。地震等で落下した際の衝撃で破損してしまうことを防ぐために、クッション性のあるもので全体を保護しておくことが必要で、袋や箱に入れて保管するのが推奨される。

また重さのあるものであるため、落下による資料の破損の防止に加え、事故の防止のためにも頭上より高い位置での保管や展示は避けた方がよい。

ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

この資料に使用されたであろう青田青白章石は、石材の中でも比較的環境によるひびが入りにくい石である。ただ、光に当てると微妙に石の繊維のような線が見えるため、線と同じ方向への衝撃が加わると破損しやすい可能性がある。万一なんらかの影響でひびが入ってしまった場合は、柔らかい布などに油をしみこませて優しくひびに馴染ませると、ひび割れを目立たなくしたりこれ以上ひびが大きくなるのを抑えることができたりする。しかし印材と油の相性次第では印材の変色を引き起こしてしまう可能性もあることを知っておく必要がある。変色を引き起こしにくく古くから篆刻のひび割れの保護に使用されていることから、この方法を実行する際に使用する油としてはツバキ油が推奨される。

この資料の取り扱いの際、最も懸念されるのは衝撃によるひび、欠け、割れである。床に落としたり固いものにぶつかったりすると、簡単に傷ついたり欠けたりしまうため、取り扱う際は滑って落とすことがないようにしなければならない。持ち運びの際は全体をクッション性のある素材で包装し、他のものとぶつかることのないようにする必要がある。特に押印面は少し割れたり傷ついたりするだけでも押した判の仕上がりが変わってしまう

ことがあるので、さらに布や「はかま」と呼ばれる篆刻用のキャップなどで保護しておく
と良い。

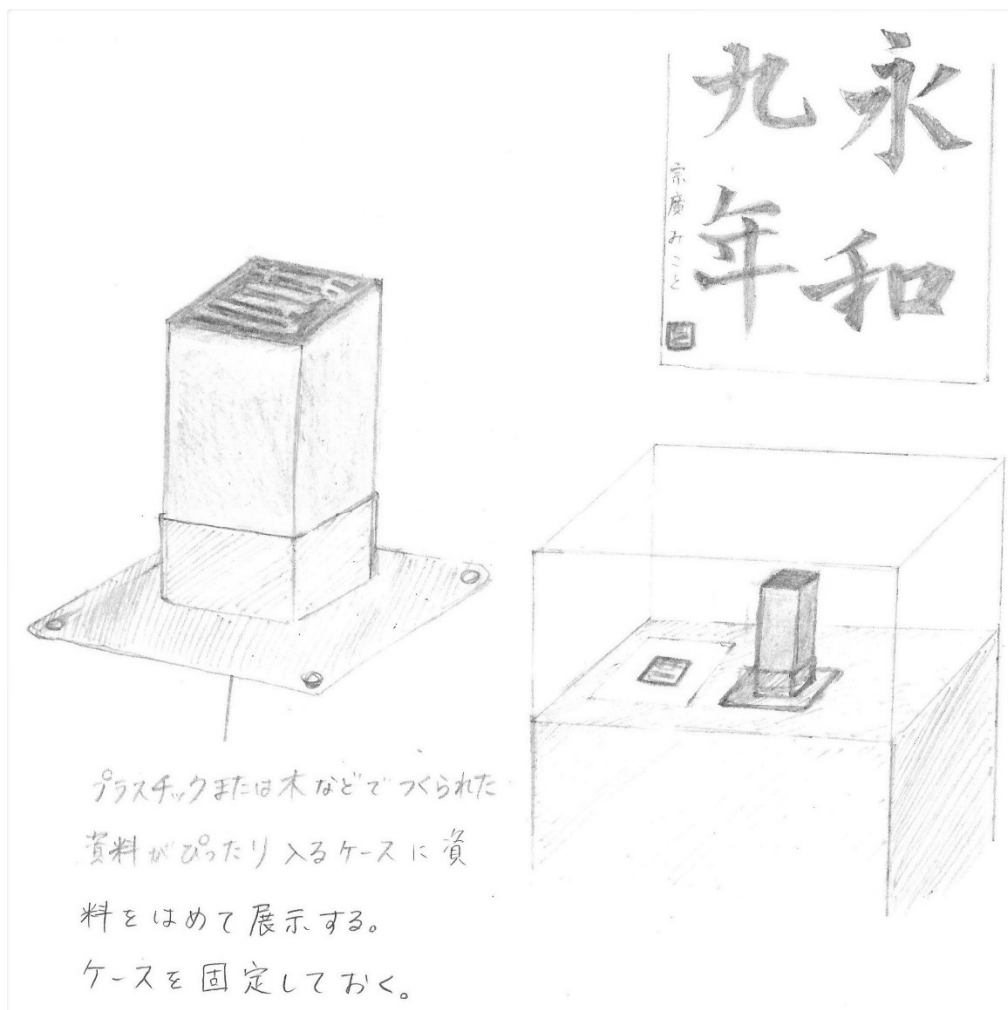
また、小さいがしっかりと重みがあるため、落下による事故を防止するために、高い位
置で扱うのはなるべく避けた方がよい。

エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

宗廣みことが王羲之の「蘭亭序」をうつした作品とともに、同人物が書道をする際に使
用した道具のひとつとして展示する。

凹凸や石の天然の色合いがよくわかるように、色や明るさが強すぎない光で照らす。強
化ガラスなどのケースに入れ、押印面を上に向けて特によく見えるように展示する。その
ため倒れやすい不安定な置き方となるので、欠けや割れを防ぐために資料を固定して展示
したい。そこで、下図のような展示方法を提案する。また、押印された紙を資料とともに
展示して、使用した際のデザインもわかるようにする。

以上を踏まえて、下図のような展示方法を提案する。



レーベル (Label)

大人を対象にしたラベルなので、難読と思われる文字以外にふりがなはふっていない。とはいえなるべく多くの人が理解しやすいような文章にした。篆刻を初めて知ったという人でもわかりやすい親切な文章を心掛けた。しかし文章よりも実物を見てほしいのであまり長々と文章を書かず、展示を見る際に必要だと思われる情報とプラスアルファの情報にとどめた。

フォントは書道を意識した毛筆風のものにし、色合いは書道作品や道具の展示から浮いてしまわないように、墨の色としてよく使われる黒と朱色の2色でまとめた。

篆刻「みこと」

篆刻(てんこく)という石製の判子。2017年製作。宗廣みことによって制作された唯一の篆刻である。宗廣みことが王羲之の「蘭亭序」をうつした作品に押印されている。篆刻としては珍しい平仮名のデザインが特徴である。「こ」の部分の両端にだけある余白の意図は、「こ」であることをわかりやすくするため、全体のバランスをとるためなど諸説あるが未だ定かではない。

博物館資料ドキュメント 『春日大社「鹿みくじ」の鹿の置物』

人文学部日本文化学科 1 年 吉嶋 大翔

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

この資料は、奈良県の春日大社で授与されている「鹿みくじ」の鹿の置物である。春日大社で「鹿みくじ」を購入すると、おみくじと一緒に木製の鹿の置物が付いてくる。おみくじは鹿の口にくわえるように丸めて挟み込まれていた。この鹿の置物は、奈良の伝統工芸品である一刀彫にちなんで作られたものである。一刀彫とは、一刀で大胆に彫ったように見える木彫りの工芸品のことである。一つ一つ手作りで作られているため、顔の表情や体の形が物によって少し異なっている。

資料の素材は木である。奈良の一刀彫は、ヒノキ・カツラ・クスノキ等を素材として使用している。そのため、この資料もそれらの木を素材にしていると考えられる。

鹿の形に彫られている資料の彫り方は次のようになっている。顔は目から口先までを尖らせるように彫っている。口の真ん中はおみくじが入るように目元近くまで深く彫っている。耳と前足のひざには中央に縦の切れ込みを入れて、足と耳が二つに分かれて見えるように彫っている。耳の白く塗られた部分の中央に切れ込みが入っている。鹿の体の左と右の両側に切れ込みを入れている。この切れ込みは、足を表している。前足の先と後足の太ももから足先までを切り込みで表現している。切れ込みを入れることで、鹿が足をたたんで座っているように見える。

一つ一つ手作りにしているため少しのずれはあるが、鹿の形や彫り方、色の付け方は左右対称になっている。体全体は角張った形をしており、あまり丸みは帯びていない。

鹿の形に彫った木に色を付けているが、色の塗り方は次のようになっている。黒目と尻尾、足先は黒で塗られている。黒目は丸に細い線を付けている。この細い線は耳の方向に伸びている。白目と口先、耳は白で塗られている。さらに、体全体に白い丸がある。鹿の左側に 5 個、鹿の右側に 5 個、鹿の背中に 3 個、合計 13 個（白目を含むと 15 個）の白い丸がある。白い丸の大きさはほぼ同じであるが、鹿の背中側にある一つだけ少し小さい。本来はすべて同じ大きさだが、塗るときに少し小さくなってしまったと考えられる。鹿の裏側には、朱色で春日大社と書かれている。

資料のサイズは手のひらに乗る大きさであり、あまり大きくはない。各部位のサイズは次のようになっている。口先から尻尾の先までの長さは 5.4cm、頭から足までの長さは 3.9 cm、前足のひざから尻尾の先までの長さは 4.9 cm、口全体の長さは 0.9 cm、背中の幅と頭の幅は 1.7 cm、黒い尻尾の長さは 0.7 cm、白い丸の直径は 0.4 cm（背中側の一つだけ 0.3 cm）、黒目の直径は 0.2 cm である。

資料の重さは未計測であるが、木製であり、手のひらに乗るほどの大きさなので、比較的軽いといえる。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

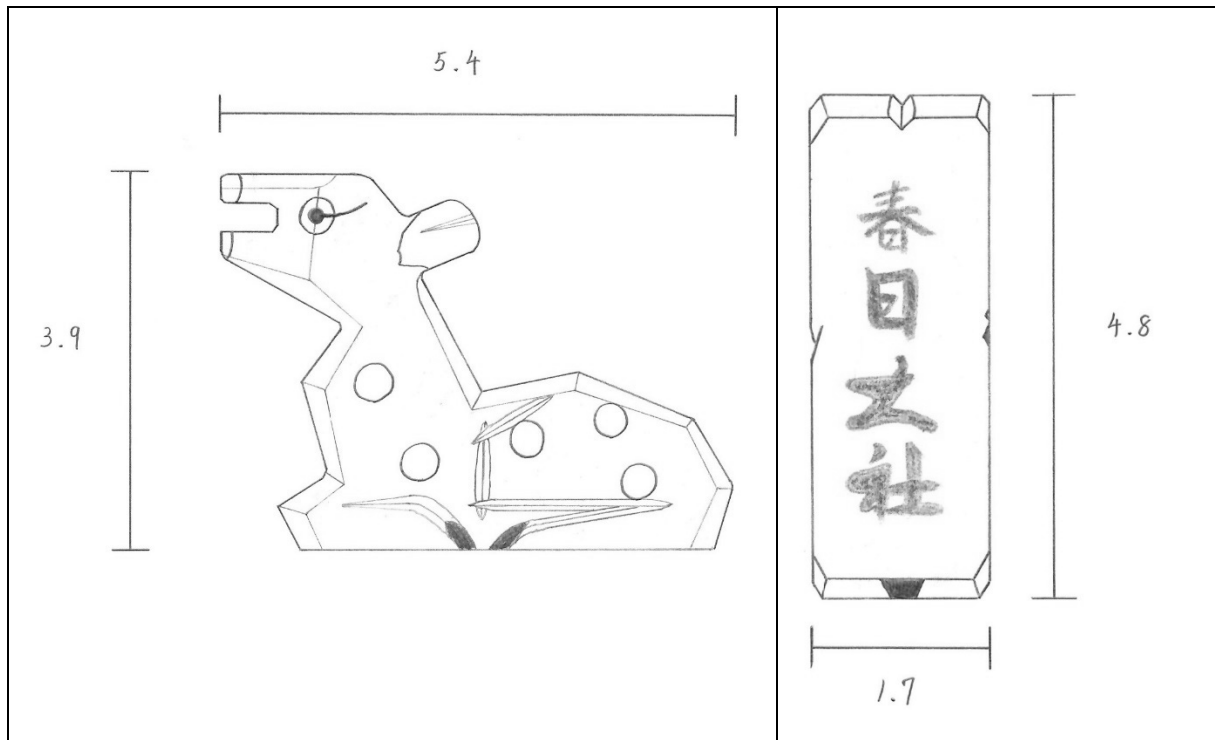
奈良県の奈良公園にたくさんいる鹿は、春日大社の神様の使いとして大切に扱われている。奈良時代に神様が常陸国（茨城県）から春日の御蓋山へ来られたとき、白鹿に乗って来られたといわれている。現在、奈良公園を中心とした地域に約 1300 頭の鹿が生活している。このことから、春日大社では「鹿みくじ」が授与されている。

春日大社では、木製の鹿の置物が付いてくる「鹿みくじ」の他に、「白鹿みくじ」というものも授与されている。これは、式年造替を記念して作られたものであり、神様が春日の地へ来られるときに乗ってきた白鹿にちなんで作られている。「白鹿みくじ」を購入すると、おみくじと一緒に陶器でできた白い鹿の置物が付いてくる。おみくじは、「鹿みくじ」と同じように鹿の口にくわえるように丸めて挟み込まれている。

この資料は、2011 年から 2012 年頃に現所有者が奈良へ旅行に行ったときに、奈良公園の中にある春日大社で購入したものである。この鹿の置物は所有者の家で合計で 4 つあるのが確認された。それらは所有者の家の中で棚の上などに置いて飾られていた。

所有者の家庭では、通常おみくじは持ち帰らずに結んでいる。春日大社の「鹿みくじ」についても、春日大社で結んでいったために残っていないと考えられる。そのため、おみくじの結果が何であったのかは不明である。

イラストレーション (Illustration)



単位は cm 縮尺は 1.5 倍

コンディション・レポート (Condition Report)

資料を全体的に見ると大きな傷や汚れはないので、コンディションは良好であるといえる。しかし、細かく見てみると傷や、色のはがれたり薄くなったりしているところはいくつかある。

この資料は木製であり、少し傷がついているところがある。鹿の右側の前足と後足に、削れたような傷が2か所ほどある。後足の傷は前足よりも大きく削れており、白い丸のあるところまで及んでいる。そのため、この白い丸の下の方の色が少しはがれている。鹿の左側のひざに、まっすぐ線が引かれたかのような傷が1か所ある。これは、しっかりとした直線なので、製作途中についた傷の可能性も考えられる。

この資料には色が塗られている。少し色のはがれたり薄くなったりしているところがある。鹿の左目の黒目の部分の色が少しはがれている。体にある白い丸のいくつかに薄くなっている部分が見られる。時間が長く経ったことで薄くなったかもしれないが、もともと薄い状態であったとも考えられる。体の左側と右側にある白い丸以外の白く塗られた場所の色はかなり濃い。口先と耳、背中の白い丸は木の木目が見えないほどの量の塗料が塗られており、背中の白い丸は少し盛り上がっている。しかし、体の右側と左側にはこのような形跡はない。このため、もともと薄かった可能性も考えられる。

リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

この資料は木製なので、ペスト・マネージメントが重要である。虫に食われることがないように、虫が発生しづらい環境で保存する。温度や湿度などの条件が整ってしまうとカビが発生してしまうので、この点にも注意して保存する。カビは湿度が70%以上になると発生しやすくなるので、高湿度に気を付けなければならない。

一方で、この資料には塗料が塗られているので、低湿度と光に気を付けなければならない。湿度が低すぎると乾燥によって塗料が劣化してはがれてしまう恐れがある。木製の本体も乾燥によりひび割れることが懸念される。また、光を当てすぎると、褪色してしまう恐れがある。塗料のはがれたり、褪色しないように注意しなければならない。

湿度が高くなりすぎるとカビが発生する。しかし、湿度が低くなりすぎると乾燥や収縮によって木はひび割れ、塗料もはがれてしまう。湿度が50%から60%になるように調整して保存するのが最適である。

急激な温度・湿度の変化には気を付けなければならない。この資料は木製で、さらに塗料が塗られているので、急激な温度・湿度の変化で資料の状態が悪くなる可能性がある。資料の状態が悪くならないように、収蔵場所と展示場所の温度・湿度の差が大きくなりすぎないような環境にして保存していく必要がある。

光についても、収蔵するときはなるべく光が当たらないようにし、さらに、展示するときも照度や照射時間に気を付け、光が当たりすぎない場所で展示しなければならない。

ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

この資料を取り扱うときは手袋を着用する。素手でそのまま触ると手の汗や脂が付着して資料が汚れてしまうかもしれない。木製なので汗や脂が付いてしまうとそれを取り除くのが困難になってしまう。このようなことが起こらないように、取り扱うときは手袋を着用して丁寧に取り扱い必要がある。

念のため、マスクも着用する。口から飛沫が飛び、それが資料に付着するかもしれない。長い時間で考えると、口から出る少しの飛沫の付着が資料の劣化の原因になることもある。このようなことが起こらないように、取り扱うときはマスクを着用するとよい。

収蔵場所から展示場所等へ移動するときは細心の注意払って取り扱う。

エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

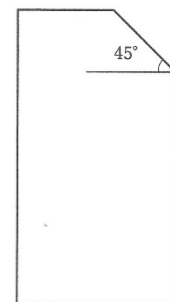
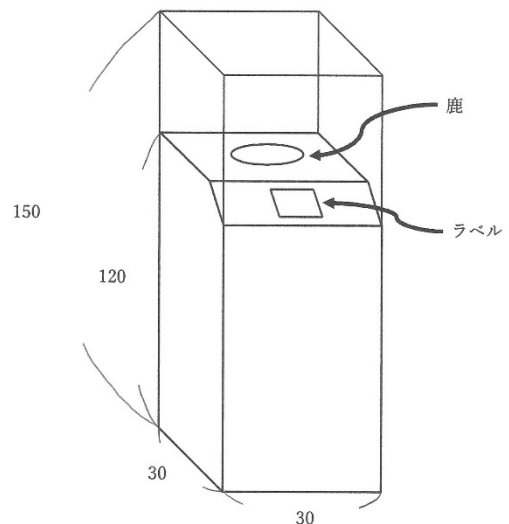
ガラスケースにこの資料を入れて展示する。ケースの中に鹿を二つ置く。一つは鹿をそのまま立たせて、鹿の全体が立体的に見えるように斜めに置く。もう一つは底面に書かれている「春日大社」が見えるようにまっすぐに置く。このように二つ置くと、鹿の全体の姿と春日大社の文字を同時に見ることができる。

この資料は軽くて倒れやすいので、四隅を支えるようにして固定するか、衝撃を吸収する素材を下に敷いて鹿をその上に置く。

ラベルは鹿が置いてある場所の前にある角度が付いている場所に取り付ける。ラベルを貼る場所の角度は45°にする。45°程度の角度を付けると、背の高い人から低い人まで、どの高さの目線から見てもラベルが見やすくなる。

ガラスケースの横の長さは、30×30cmの正方形にする。横の長さはあまり長すぎてはいけない。この資料は小さいので、あまり長くしすぎると物自体がより小さく見えてしまうかもしれないからである。ガラスケースの鹿が置かれている場所までの高さは、120cmにする。ガラスも含めると、150cmになるようにする。120cm程度の高さにすると、子供から大人まで、どの高さの目線から見ても鹿が見やすくなる。

この資料は光に弱いので、光に注意して展示する。展示する場所は、人がこの資料を見やすい、暗すぎない光の量でありながらも、資料に悪い影響は与えない光の量になるように調整する。



レーベル (Label)

レーベルの書体は、タイトルが MS ゴシック、本文は MS 明朝である。タイトルは見やすいように MS ゴシック太字を使用し、サイズは 18 ポイントである。本文の文字はタイトルよりも細い字に見えるように MS 明朝を使用し、サイズは 12 ポイントである

レーベルの枠は、角が丸くなっている四角形を使用している。レーベルの大きさは縦が 8.4cm、横が 11.9cm である。レーベルの中の色は薄い茶色にすることで、鹿の体の色と木の色を表している。

春日大社 鹿みくじ

奈良県の春日大社で授与されているおみくじの鹿みくじに付いてくる木製の鹿の置物。おみくじは鹿の口に丸めてくわえられていた。奈良県の伝統工芸品である一刀彫によって作られている。一刀彫とは、一刀で大胆に彫ったように見える木彫りの工芸品のことである。この鹿は一つ一つ手作りで作られているため、顔の表情や体の形が少し異なっている。春日大社では、この木製の鹿みくじ以外に陶器で作られた白鹿みくじも授与されている。奈良の鹿は古くから、春日大社の神の使いとして大切に保護されてきた。このことにちなんで、春日大社は鹿みくじを授与している。

博物館資料ドキュメント 『カメラ～ミノルタ HI-MATIC7』

経済学部 1 年 伊藤 赴

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

この資料は、ミノルタカメラ株式会社（現コニカミノルタホールディングス株式会社）が 1963 年 12 月に発売した、HI-MATIC7（ハイマチック 7）というフィルムカメラである。

ミノルタカメラ株式会社は 1928 年に創業した日独写真機商店を前身とする、主にカメラ、複写機（文書などを複写する機械）を製造していたメーカーである。2003 年にカメラなどを製造していたコニカと経営統合、コニカミノルタホールディングス株式会社となった。カメラ事業からは 2006 年に撤退しており、現在は遺伝子検査サービスやプラネタリウム事業を手掛けている。

フィルムカメラとはフィルムで撮影するカメラのことであり、デジタルカメラが普及する前に一般的に使われていた。カメラのフィルムはポリエステルなどの支持体に、主にハロゲン化銀とゼラチンからなる写真乳剤を塗布しており、このフィルムに光が当たることによって、写真乳剤が化学変化する。これによって画像が記録される仕組みとなっている。

以下では HI-MATIC7 の特徴や機能、材質などについて述べる。

このカメラはレンジファインダーカメラである。これは連動距離計を搭載したカメラであり、距離計を用いてピントを合わせる。ファインダー内にある二つの像（二重像）が重なる位置に合わせてピントを合わせることができるとなる仕組みとなっている。

EE 機能を搭載した EE カメラである点も特徴として挙げられる。EE 機能は現在の AE 機能にあたるものであり、今日では EE と呼ぶことはない。カメラ本体に装備された受光素子、露出計（写真撮影の際に適正な露出を測る器具）によって被写体の明るさを自動で判断し、露出（写真撮影の際に取り込まれる光の量のこと）を決めるという機能である。EE 機能の動作には電池が必要である。電池は MR-9 (HD) という型式の水銀電池が使用されていた。EE 機能を解除し、手動で撮影することも可能である。

巻き上げレバーは分割して巻き上げることが可能になっている。これによって軽い力で巻き上げることが可能になっている。

本体下部に「JAPAN」と表記されていることから日本製だと思われる。価格は 22,900 円であった。

カメラ本体は「minolta」のロゴが入った専用のケースに納められている。このケースがカメラ本体に付属していたのか、別売りで用意されていたものなのかは不明である。

本体はシルバーで塗装されており、本体中央部に革を模した黒色のシートが貼り付けられているが、このシートの材質は不明である。本体の正面に「minolta」、上部に「HI-MATIC7」のロゴがそれぞれ刻印されている。本体の両側面には金具が装着されており、ストラップを通すことが可能になっている。

カメラ本体やレバーなどのパーツは金属製だと思われるが、どのような種類の金属であるかは不明である。ファインダー接眼窓はガラス製だと思われる。カメラ内部のスプロケット（フィルムを均一に送る装置）、巻取りスプール（フィルムを巻き付けるための軸）などはプラスチック製だと思われる。レンズはガラス製だと思われるが、詳しい材質は不明である。レンズキャップは樹脂製もしくはプラスチック製だと思われる。重量は約 770 g である。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

以下、入手経路について述べる。この HI-MATIC7 は所有者（伊藤 尙）の祖父が購入したものである。祖父は既に他界しているため正確な入手経路や入手した時期は不明だが、所有者の父親の話によると祖父が 1963 年ごろに質屋で中古品として購入したものとのことである。HI-MATIC7 は 1963 年に発売されているため、発売から年数が経っておらず、入手した際のカメラの状態は良好だったものと考えられる。祖父がこのカメラを使用していたことを親戚が記憶していること、このカメラを使って撮影されたとみられる旅行先での家族写真などが残っていることなどから、購入後は日常生活や旅行などあらゆる場面でよく使われていたと考えられる。その後、使用されなくなり、祖父の家で保管されていたようである。祖父が他界し、祖父の家が取り壊された後は所有者の父親によって保管されていた。所有者が発見した際には、「minolta」のロゴが入ったケースの中に入っていた。電池やフィルムは装着されていなかった。

コンディション・レポート (Condition Report)

全体的に汚れが付着しているが、特に上部、正面に多くの汚れが付着している。茶色っぽい汚れが全体的に見られるが、何が原因で付着したものかは不明である。

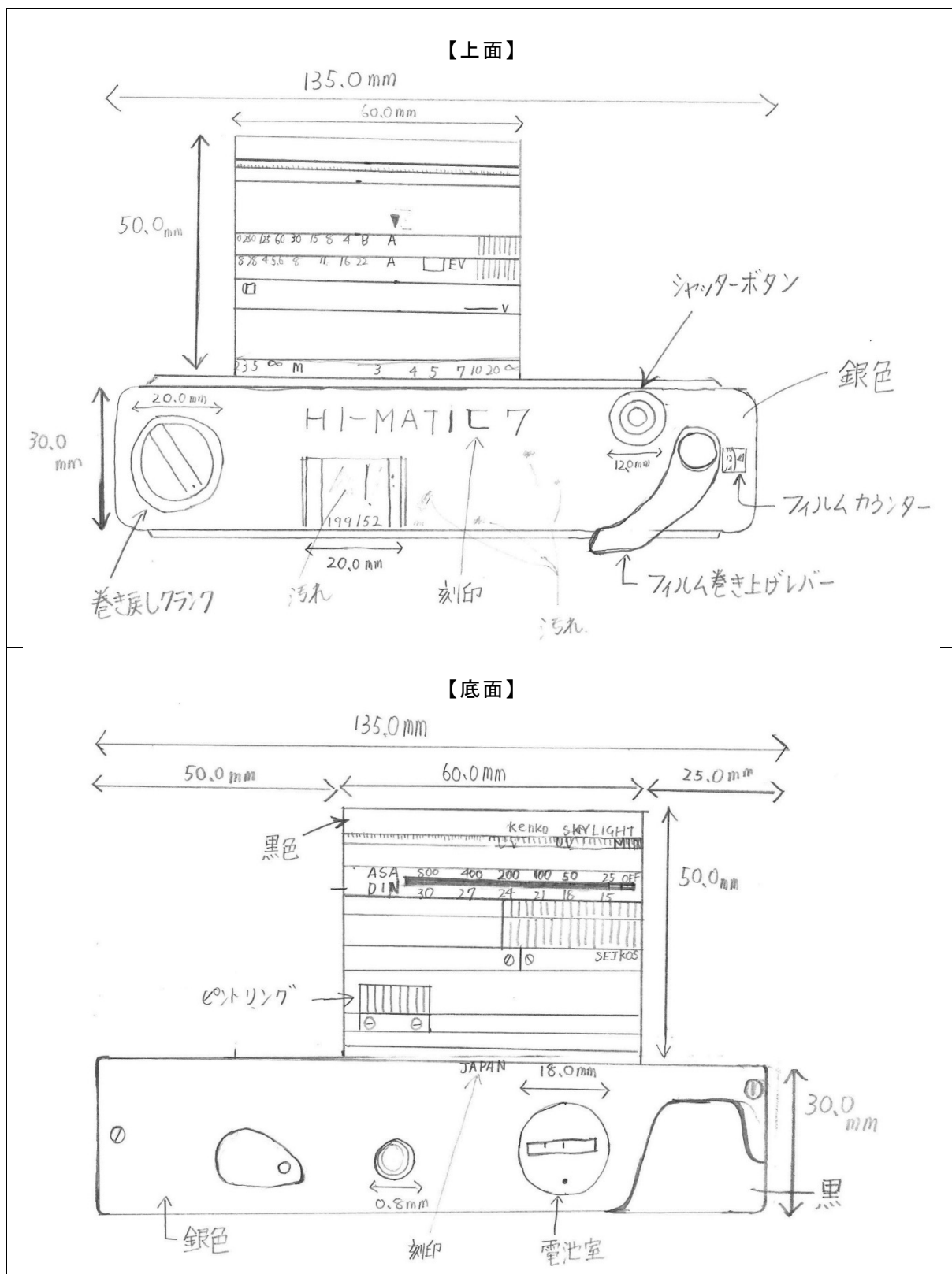
レンズ内部も多少の埃がみられるが、比較的きれいな状態を保っているといえる。

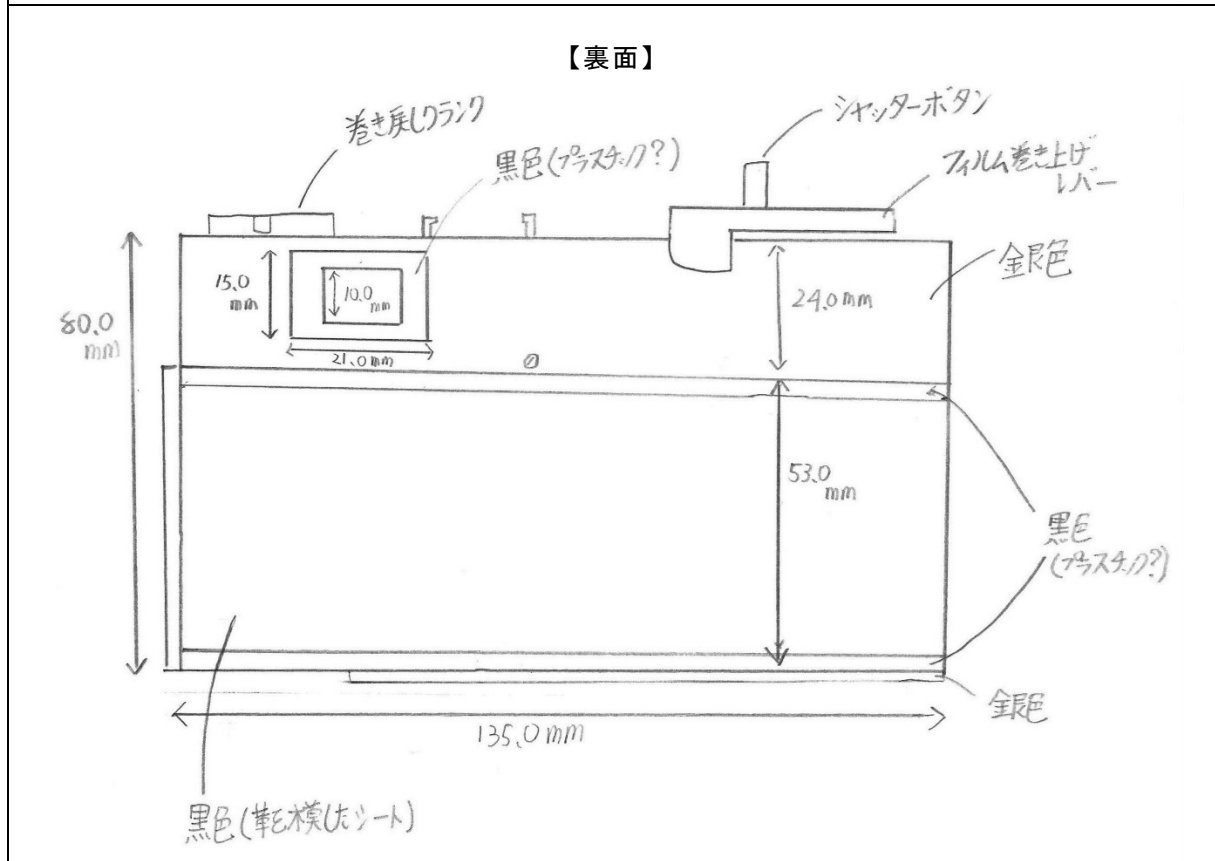
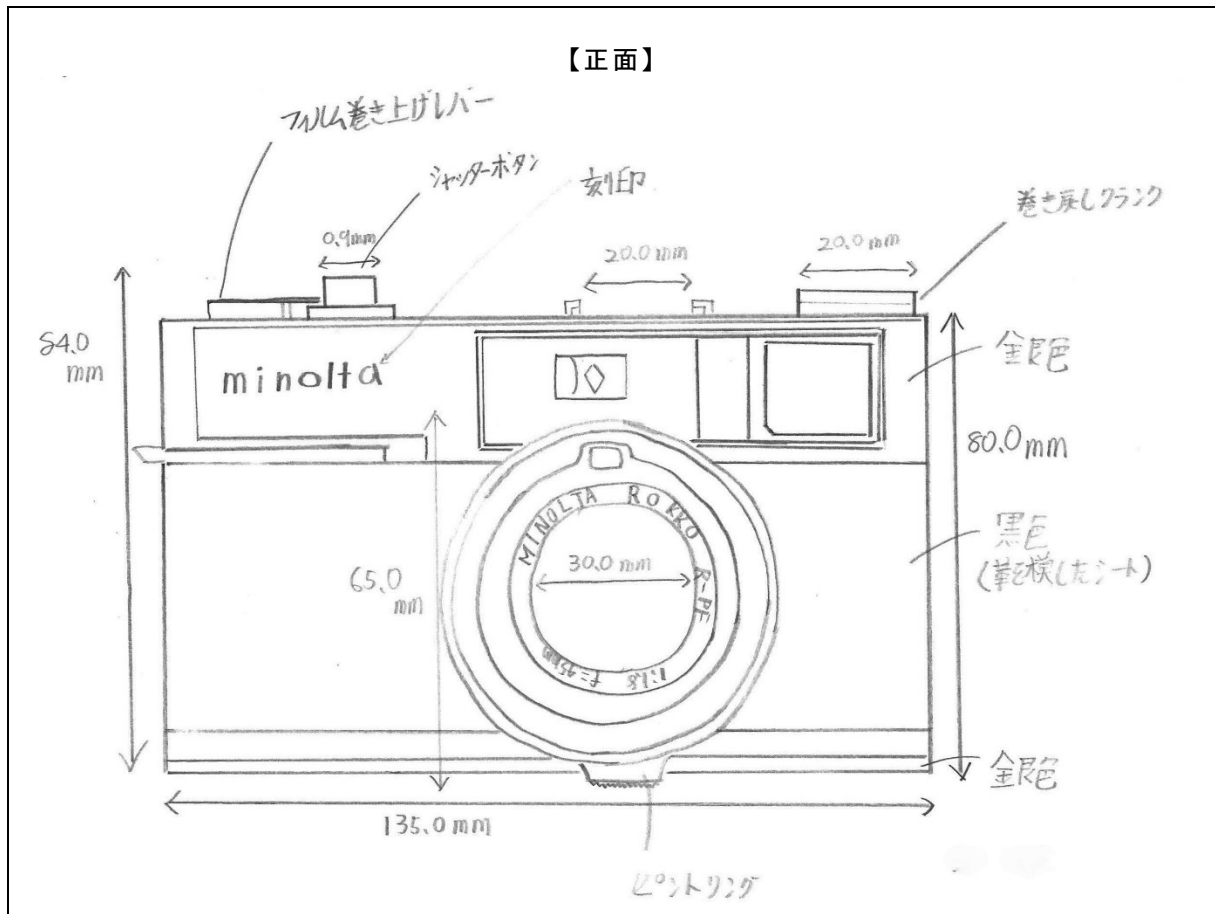
カメラ本体には目立った傷は見られない。刻印や印刷された文字なども鮮明に残っており、塗装のはげも見られない。カメラ本体に貼り付けられている革を模したシートは正面や両側面の一部にではがれかけている。

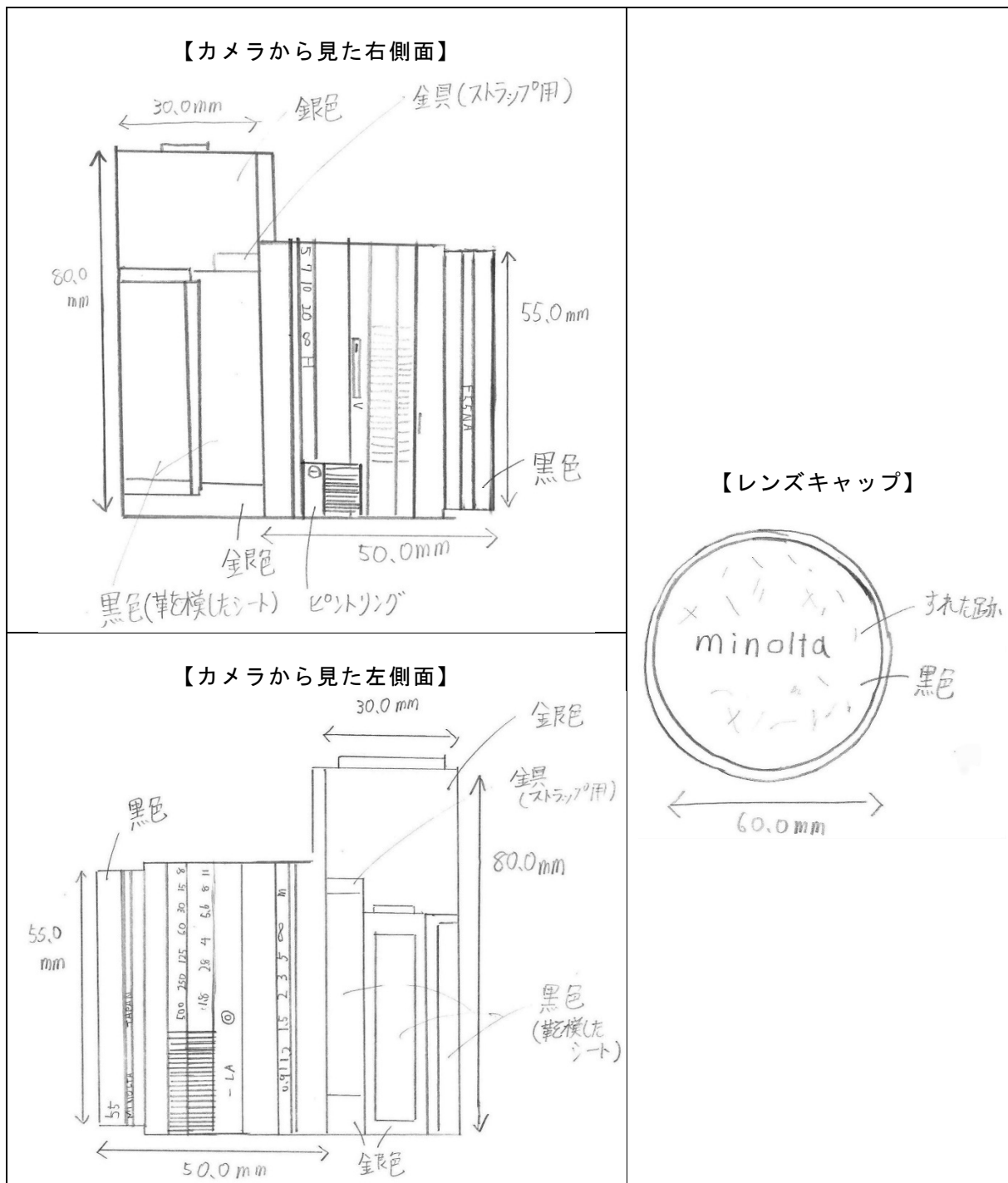
レンズキャップには、表面、裏面、側面に無数の線状の傷が見られる。これはレンズキャップを脱着する際やカメラをケースに収納する際などについたものだと思われる。

このカメラが現在も実際に写真を撮影することができるのかは不明である。ただし、ファインダー内の露出計が作動すること、シャッターを切ることが可能であること、フィルムを供給することが可能ということは確認できている。

イラストレーション (Illustration)







リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

カメラの保存において好ましい湿度は約40%~50%と言われている。これより高くなると、カビが発生する恐れが高くなり、これを下回るとカメラ本体の樹脂部分などの劣化を早める恐れがある。湿度を把握するために保管場所には湿度計を設置するとよい。

保存場所の気温については、カビが発生しやすい気温である20度~30度を避けて、18~20度で、気温差が生じにくい場所で保管することが好ましい。ただし、カビを防ぐため

に、低温または高温な場所で保管するとカメラ本体に悪影響が出る可能性があるため避け
た方がよい。温度を把握するために保管場所には温度計を設置するとよい。

人間の垢、皮脂、埃や塵、食物などはカビ等の原因となるため、保管場所の定期的な清
掃やカメラ本体の清掃が必要となる。皮脂や埃や塵が付着することを防ぐ為に、カメラに
触れる際には手袋を着用することが好ましい。

結露水もカビの発生の原因や、カメラに悪影響を及ぼすため、急激な温度変化を避ける
など、結露の発生を防ぐことも必要である。

また、塗装などの劣化を防ぐ為に光には十分に注意し、金属部品などの劣化を防ぐ為に、
酸を含まない紙や段ボールを使用して収蔵することが好ましい。

電池については、液漏れなどによるカメラ本体への被害を防ぐ為にも取り外しておく。

ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

リクワイアド・エンパイロメントでも述べたように、埃や塵、人間の垢、皮脂などがカ
ビの原因となる。これらを付着させないため、清掃が行われている部屋で、手袋を着用し
て扱うなどの対策をとる必要がある。結露水も不具合の原因やカビの発生につながる恐れ
があるため、保管場所から別の部屋へ移動させる場合には、部屋の温度差にも気を付ける
必要がある。傷をつけないために他のものと一緒に運ぶことは避ける。また、落下による
破損を防ぐ為に、両手で持つ、梱包して運ぶなどの対策が必要である。

ボディ外観の手入れは学芸員でも可能だと思われる。埃、皮脂、水滴などはカビの原因
となるため、付着した際にはやわらかい布などで乾拭きをするのがよい。しかし、レンズ
やカメラ内部はデリケートであるため、専門業者に依頼する方が望ましいと思われる。

エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

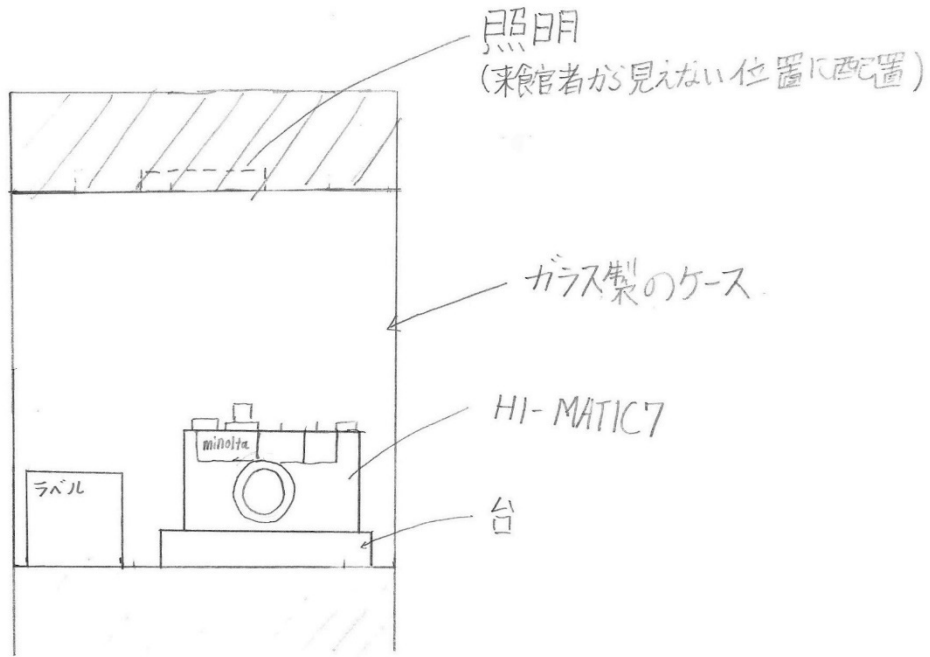
展示する際には、資料の破損等を防ぐ為に、ガラスケースに入れて展示する。ガラスケ
ース内の環境はリクワイアド・エンパイロメントの項目で述べたものとする。また、ケー
ス内の環境を維持する為にケースの目立たない位置に温度計と湿度計を設置する。

照明は展示ケース内に設置する。この際、照明器具は来館者に見えないように設置し、
照明にはLED照明や博物館用に製造された紫外線防止ランプを用いる。これらの照明を用
いることで、発熱や紫外線による資料の劣化を防止することが可能となる。

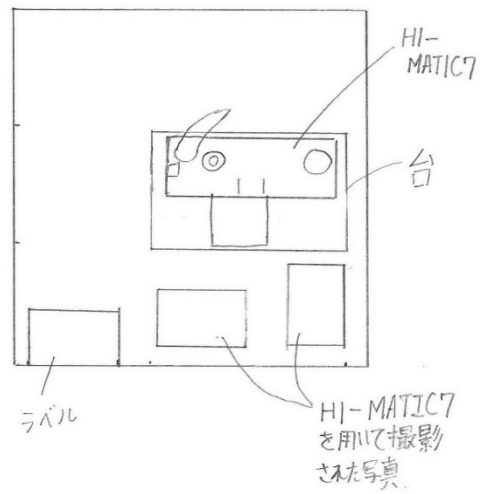
カメラ本体を全方向から見るができるように、展示ケースは4方向（正面、右側面、
左側面、裏面）から見れるようにする。

展示ケース内にはHI-MATIC7で撮影された写真も展示する。こうすることで、HI-MATIC7
で撮影するとどのように写るのかを来館者に伝えることができる。

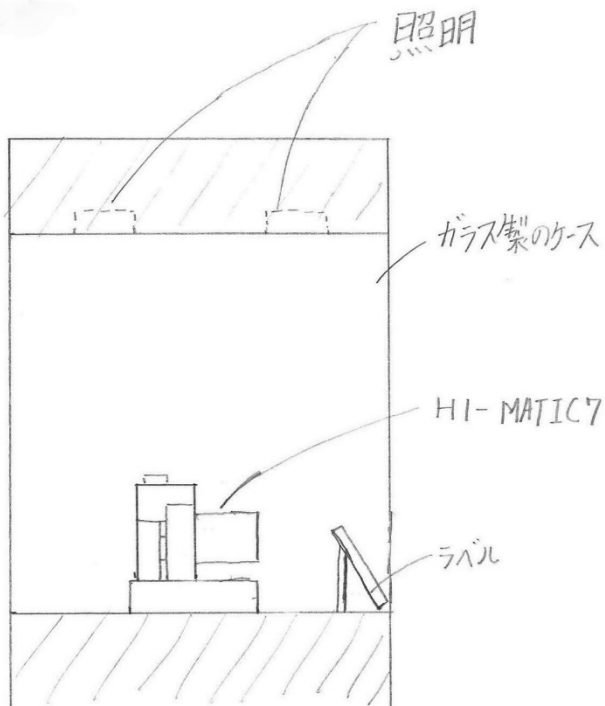
【正面】



【上から】



【側面】



レーベル (Label)

ハイマチックセブン
HI-MATIC7

1963年12月発売

ミノルタカメラ株式会社製造

個人蔵

HI-MATIC7はかつてミノルタカメラ株式会社が製造していたレンジファインダーカメラ(距離計を内蔵したカメラ)である。このカメラには、カメラが被写体の明るさを自動で判断し、露出(写真撮影の際に取り込む光の量)を決めるEE機能が搭載されている。このEE機能は解除することが可能であり、自ら露出を決めて手動で撮影することも可能である。フィルムを供給するための巻き上げレバーは、軽い力で操作できるように、分割して巻き上げることが可能となっている。

博物館資料ドキュメント 『ステンドグラスキーホルダー「ピアノ」』

人文学部日本文化学科 2年 齋藤 穂乃花

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

本資料は金属製のフレームとレジン素材から成る、ステンドグラス風のキーホルダーである。

本体サイズ：縦 70.0mm、横 50.0mm、厚さ 20.0mm

金属枠のサイズ：外枠 1.5mm（細いところで 1.0mm）、黒鍵盤の幅 5.0mm

チェーンの長さ：26.0mm

リング部分：直径 25.0mm

重さ：チェーンも含め約 35g ほど

金属部分の消炭色の素材は、磁石に反応する素材であることはわかるものの、現時点で断定することはできない。

通常、ステンドグラスは切ったガラス同士を溶かした金属で繋ぎ合わせて制作されるものである。しかし、本資料は裏面が真っ平で、表面から見るとそれぞれの枠の中で中央部分が凹むように着色部が固まっていることから、金属枠にレジン、あるいは樹脂等を流し込んで作成された物ではないかと考察する。

レジン或いは樹脂と思われる部分は赤、黄、青、緑の半透明 4 色と、不透明な白が使われている。赤は 8 カ所、黄は 7 カ所、青は 6 カ所、緑は 5 カ所、白は 8 カ所ある。白以外の色には、いくつか 0.30mm ほどの気泡が確認できる箇所もある。そのため、白については他の 4 色とは異なる素材を使用している可能性も考えられる。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

本資料は日本のロックバンド、ヨルシカのライブツアー2021『盗作』に合わせて発売されたグッズである。

本資料を含め、ライブツアーのグッズは、2021年7月8日の18時からインターネットでの先行販売が行われた。ただ、今回取り扱っている資料は2021年8月1日にカナモトホール（札幌市民ホール）で行われた札幌公演の物販にて、現所有者である齋藤穂乃花が税込1,300円で購入したものである。インターネットのオンラインストアでも、物販会場でも、商品名は「ステンドグラスキーホルダー「ピアノ」」と表記されていた。

——ヨルシカ——

ヨルシカは、作詞作曲とギターを担当する n-buna と、ボーカルの suis で結成されたバンドである。曲やアルバム単位でそれぞれ一貫した物語や世界観のある音楽が特徴的である。

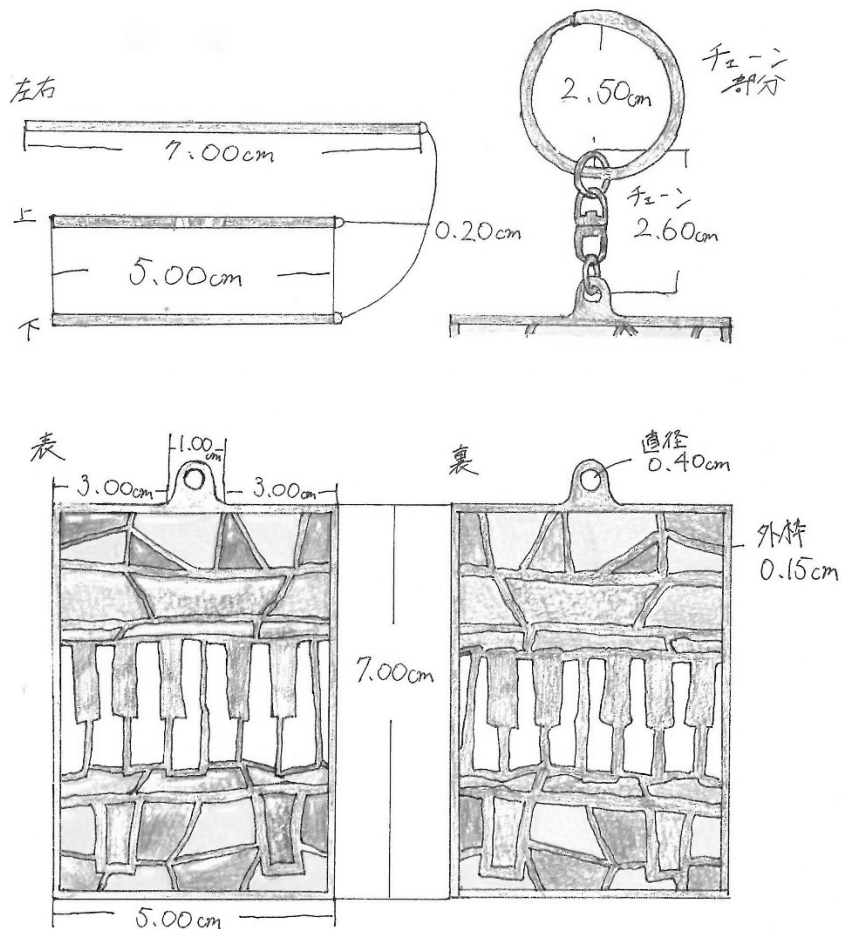
——ライブツアー『盗作』——

本資料を購入したライブツアー『盗作』では、2020年7月29日に発売されたアルバム『盗作』と、その対になる2021年1月27日に発売されたアルバム『創作』の全楽曲が歌われた。

——アルバム『盗作』とスタンドグラスキーホルダー「ピアノ」——

アルバム『盗作』と『創作』では、音楽を盗む泥棒が主人公である。『盗作』の初回限定盤には、音楽を通じてその泥棒と交流する少年の話の小説が付属していた。本資料は、その少年が泥棒に作ったスタンドグラスのピアノを再現したグッズであると思われる。青と緑の色ガラスが使用されている部分と鍵盤の部分を見ると、アップライトピアノの形をしているように見えるデザインである。アップライトピアノは、少年が泥棒から音楽を教わる際に使われた楽器である。また、『盗作』や『創作』に限らず、ヨルシカにおける他楽曲にもピアノはよく使用されており、他アルバムの物語においてもしばしばピアノが登場する場面がある。

イラストレーション (Illustration)



コンディション・レポート (Condition Report)

本資料は、所有者宅にて、市販の除湿剤を置いた、日の当たらない本棚の中に保存されていた。普段は空調を入れていない室内ではあるが、人間が快適に過ごせる程度の環境である。

資料に使用されている素材については、退色や腐食のリスクは比較的低いと思われる。しかし、落下や他のものとぶつける等の衝撃が損傷を与える主な要因となりえる。これまでに資料に衝撃を与えたことはない。

本レポートを作成するにあたり、初めてビニールから開封したため、傷もなく、状態は極めて良い。

資料の図の作成の際に念入りに確認したが、埃やカビ、サビ等の汚れの他、目視できる程度の傷や破損も見当たらない。

リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

確認できる範囲では、これまでの保存環境による資料の破損や傷み、汚れ等は確認されなかった。しかし、本資料を保存する際は、湿度や温度が極端に高い場所や低い場所を避けるべきである。

資料を収蔵庫から持ち出して作業をする際には、火気や暖房器具に近づけないよう気を付けなければならない。

展示環境については、資料への影響を考慮していない照明が直接当たる配置は避けるべきである。

ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

資料をケースから取り出す際は、手の脂による汚れを防ぐため手袋を着用する。落下などの衝撃による破損を防ぐため、クッション素材を入れた収蔵ボックスに収納する。

持ち上げる際は両手で持ち、移動する際はクッション性のあるシートを敷いたカートに載せて静かに運ぶ。

エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

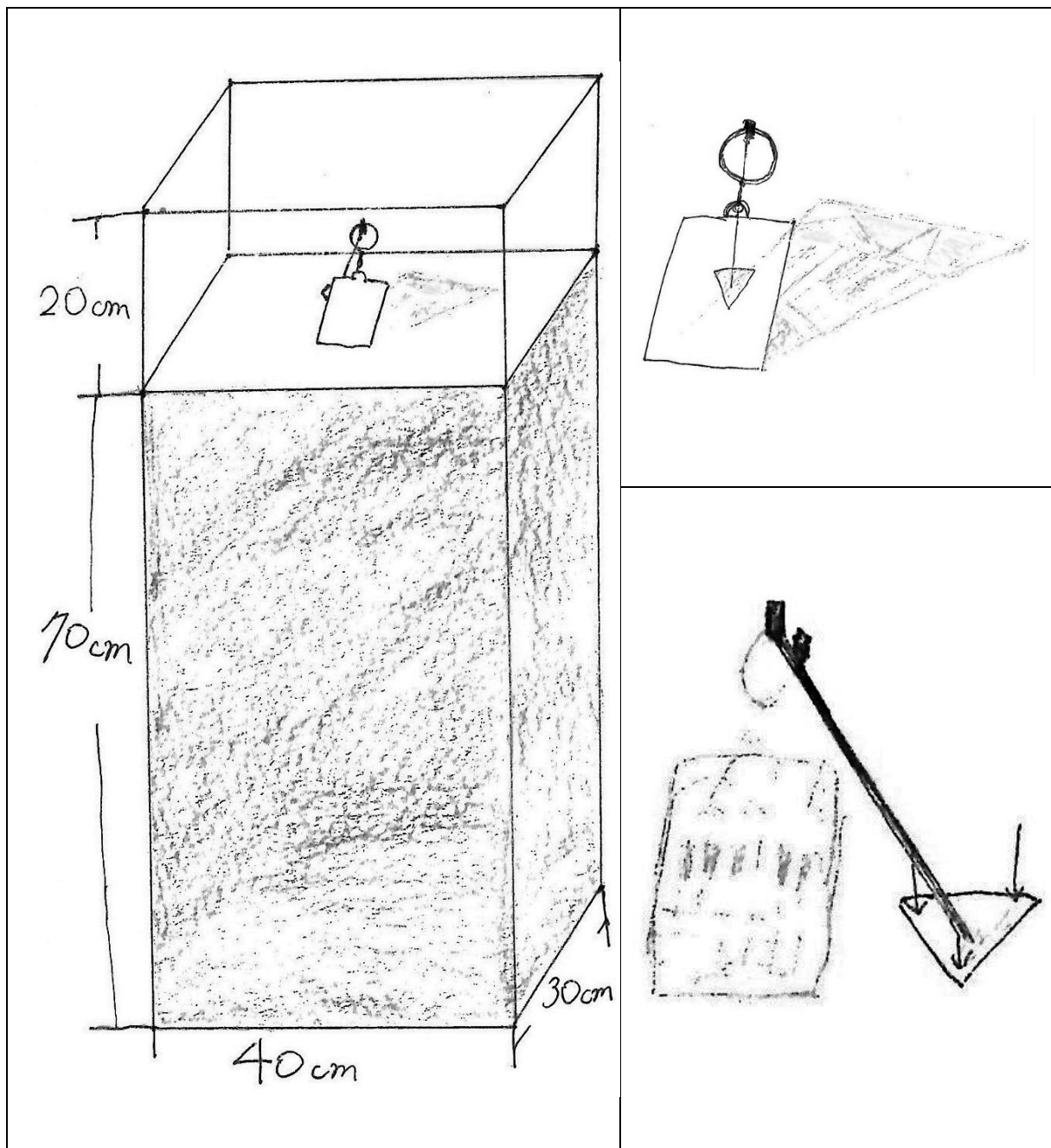
縦 30cm、横 40cm、高さ 70cm ほどの黒い台の中心辺りに資料を置き、縦 30cm、横 40cm、高さ 20cm ほどのガラスケースで覆う。ただし、黒い台の資料を置く面は白色にする。

光源を資料の斜め左上辺りに設置することで、スタンドガラスの影を見せる。資料とその影を見やすいように、展示する台は比較的lowめに、モノトーン調にする。

資料が影を作りやすいように、資料のリング部分を引っ掛けて立てることができるスタンドを使用する。スタンドも同様に黒色で、資料に影響を及ぼすガスなどを発生しない素

材で作成する。スタンドにはリングを引っ掛けるための出っ張りが二ヶ所あり、足の部分は三角形の平面になっている。三角形の各頂点（図の中で矢印で指した辺り）をネジ等で台座に直接固定することで、安定するのではないかとと思われる。この時、資料の影に被らないよう位置に注意が必要である。リングが外れて倒れるような事態が発生しても小さな衝撃で済むよう、資料の底辺部分は台座につけるようにする。

衝撃でガラス部分が割れたり、金属フレームに傷が付いたり破損する恐れがあるため、移動や展示の際には最新の注意が必要である。移動の際には柔らかい素材で保護するなどして不慮の事故に備え、十分なスペースがある安定した台に展示する。



レーベル (Label)

褪せた五線譜の質感をイメージしたデザインである。背景には羊皮紙のテクスチャーを使用している。

サイズ：縦 13cm、横 18cm

フォント：明朝体

資料名：22pt 太字

本文と関連アルバム名：14pt

ステンドグラスキーホルダー「ピアノ」

ライブツアー2021「盗作」に合わせ発売されたグッズ。

『盗作』の物語内で、少年が泥棒に作ったステンドグラスを再現したもの。

泥棒の事務所に置かれているアップライトピアノがモデル。

「不格好で、ちぐはぐな色をしたガラスの集まり」

関連アルバム

『盗作』

『創作』

YORUSHIKA

博物館資料ドキュメント 『p Trumpet』

経営学部経営学科1年 渡辺 彩花

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

使用年数は2017年～2022年現在。世界で初めてプラスチックのみで製造された、B♭トランペットで、名称は「p Trumpet」。通常の brass 製は衝撃に弱く、かなり重量感もあるが、これはすべてプラスチックで製造されているため、メンテナンスフリーで耐久性も高く、軽量である。

手の大きさや握力を問わず持ちやすい設計になっており、3個のピストン（音程を変えるボタン）は正しいフィンガリング（指使い）が身に付くようにデザインされているので、子供から大人まで気軽に楽しむことができる。また、楽器奏者には必須であるバルブオイルやスライドグリスなどのメンテナンス用品を使用しなくてよい点は魅力の一つである。

重さは約500gで通常約1.2kgの brass 製と比べても圧倒的な差である。価格は17,000円程度と破格であり、サイズは全長56.0cm、幅17.6cm、厚さ11.2cm。ベルの大きさは直径11.2cm。

付属されている2個のマウスピース（吹き口）は特別に設計されており、カップが浅く高音域が鳴らしやすい3cと、カップの深さが標準で全音域向けである5cという2種類のサイズが付属。通常の金属トランペットのマウスピースを代わりに使用することもできる。マウスピースは演奏直前に楽器に取り付けるものであり、練習を重ねればこの吹き口単体で音程を自由自在に変えることができる。

チューニングスライドはチューニングの際に使用するものだが、これを長くすれば音程が低くなり、短くすれば音程が高くなる。付属しているウォーターキーを使用して、息を吹き込んだ時に楽器内で発生する水蒸気を外に出す。

楽器には初のバイオコートの特許済み抗菌技術で保護がなされている。楽器の表面が汚れた際は暖かい石鹼水を含ませた柔らかい布で拭き、付着した水分を吹きとってから乾燥させる。細い管の汚れは綿棒などで軽くふき取るのが一般的。

カラーバリエーションは全部で赤、白、青、緑、黄、橙、紫、黒の全8色であり、購入時に選択できる。所有者（渡辺彩花）のものは緑。

製造元はWARWIC MUSIC GROUPで拠点はイギリスのスタフォードシャー。プラスチック製のトロンボーンは製造も手掛けており、世界で最も売れ行きのいいトロンボーンとして知られている。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

このトランペットは所有者が中学2年生(2017年)のときに叔母に買ってもらったものである。所有者は当時吹奏楽部でトランペットパートに所属していた。パートリーダーになったのでより練習に励みたいと考えたが、重くて大きい楽器を徒歩で家まで毎日持ち帰るのは困難であった。そこで、家での練習用の楽器が欲しいと考えた所有者は楽器の購入を検討した。値段はピンからキリまであるが、プロを目指すわけではないので安価な商品を探し、出会ったのがこのプラスチック製トランペットだった。自分のお小遣いでも買える値段だったこととメンテナンスがあまり必要でなさそうであったことが決め手であった。所有者自身が購入する予定であったが、所有者の叔母が札幌市の中学校で吹奏楽部の副顧問を務めており楽器屋と面識があったことを機に、叔母が割引で商品を購入した。

所有者は購入後、学校では brass 製、家ではプラスチック製のトランペットを使用して練習に励んだ。高校に入学してから(2018年~2020年)はトランペットではなくホルンを始めたため、使用頻度は少なくなったが、時間のある時に趣味として活用していた。大学に入ってから(2021年以降)はトランペットでもなくホルンでもなく、木管楽器のオーボエを始めたためますます使用頻度は落ちてきているが、現在でも大切に保管している。

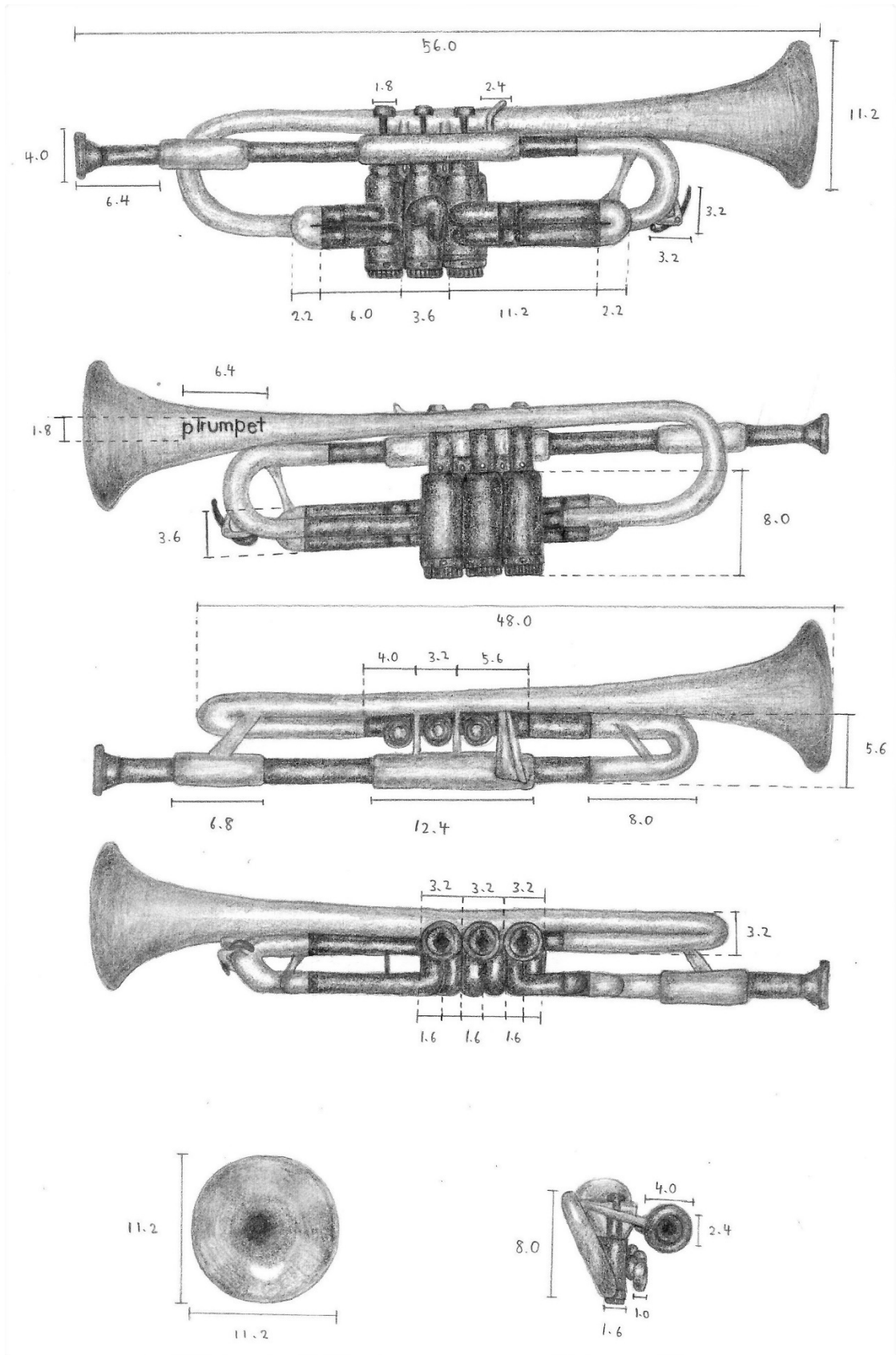
コンディション・レポート (Condition Report)

比較的新しいものであり、プラスチック製であるため表面的な傷や汚れは見当たらない。しいて言うのであれば、チューニングスライドの動きがなめらかではない点があげられるが、グリスを使用することは推奨されていないので改善の余地はない。また、ピストンの動きが少し鈍くなる時があり、吹いている途中でピストンが戻ってこなくなる時がごく稀にある。これもチューニングスライド同様でバルブオイルをさすことが推奨されていないので改善の余地はないが、どちらもそこまで気になるものでもない。楽器の表面はクロスで拭けばピカピカになる。

リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

- ◆マウスピースは長時間装着していると外れなくなったり、装着した状態での衝撃により折れてしまったりする可能性があるため保管時は常に外しておく。
- ◆通常の brass 製トランペットとは異なるので長期間使用しない場合でもグリスやオイルなどを塗ってはいけない。
- ◆高温下で保存すると素材が溶けてしまう可能性があるため 30 度以上になる可能性がある場所で保管しない。
- ◆光が当たらない場所で保管し、色あせを避ける。
- ◆楽器本体にほこりやゴミが付着する可能性があるため、保存用ケースに収納して保管するのが望ましい。

イラストレーション (Illustration)



ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

- ◆落下などの衝撃があると割れる可能性があるため、保管するときや持ち運ぶ際は専用のケースに入れる。
- ◆とがったものにひっかかると表面に傷がつくことが想定されるため、取り扱いには十分に気を付ける。
- ◆火気の近くには絶対に置かない。
- ◆ピストンを押した際にすぐに戻ってこなくなる場合があるので、ピストンを押すときは楽器と垂直になるようにまっすぐおろす。この動作が斜めになったりすると内部に摩擦が起こり、ピストンが戻ってこないだけでなくすり減ることがあるので気を付ける。
- ◆チューニングスライドは長期間使用していないと動きが悪く、引き抜こうとすると勢いよく抜けてしまう恐れがあるので管の抜き差しをするときには慎重に取り扱うことが求められる。また、ピストン同様楽器と平行になるようまっすぐ抜き差しをしないと摩擦が発生し、管がすり減る可能性や管の変形が考えられるので気を付ける。
- ◆ピストン下部のパーツが緩んでいると、ピストンを押した際にそのまま垂直にピストンが転がり落ちるため、使用前には下部が緩んでいないかを一度確認してから使用する。
- ◆マウスピースが楽器から抜けなくなってしまった際は無理に引っ張らず、少し回転をかけたりして慎重に動かし地道にとる。どうしても抜けない場合は楽器屋等、専門家にはずしてもらおう。
- ◆ウォーターキーは勢いよく押すと折れる場合があるので、ゆっくりと押す。
- ◆マウスピースは衛生面上、使用前と使用後に水道水で十分にすすいでから使用・保管し、柔らかいタオルで水気をふき取る必要がある。
- ◆楽器内にカビが生えてしまう可能性があるため、吹き終わった後はしっかりと息を吹き込み、ウォーターキーから水分を出す。二週間に一度、管内の水分や汚れを綿棒などで拭きとることが望ましい。

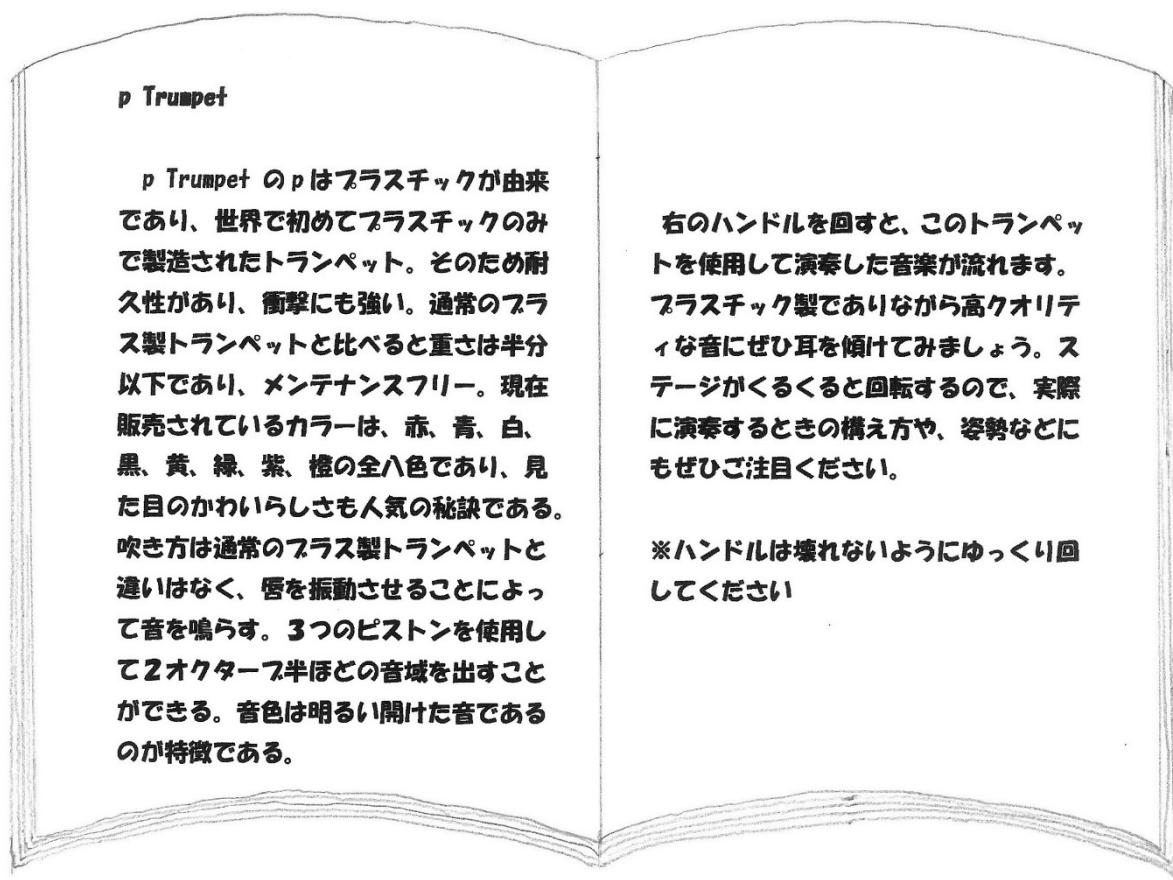
エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

トランペットを吹く少女のマネキンを制作し、実際の構え方を忠実に再現する。ラベルは譜面台に乗せて音楽的雰囲気をもたせよう。その横にはハンドルが設置されており、このハンドルを回すことでマネキン少女が乗っているステージが360度回転する。その際に発生する電気によってステージ側面にあるスピーカーから音が流れる。展示してあるトランペットを使用した音楽が流れ、アンサンブルの演奏なども楽しむことができる。原理的にはオルゴールに似たようなものであり、主な電気は手動で賄うことができるため停電などの災害にも対応できる。ほこりやゴミの付着を避けるためにドーム状のガラスケースで覆い、温度や湿度が調整できるように空気穴をあけたり、空調を整えたりするなどの工夫をする。照明が強すぎると色あせ等が懸念されるため適度な明るさに調節する。



レーベル (Label)

楽器に関するラベルなので譜面台に置くことを想定した。そのためラベル自体は譜面同様見開きの本型にし、楽譜感を演出した。展示資料の解説だけではなく、展示の仕方にも注目してもらえるように説明書きを書いておく。内容は子供が見てもわからないかもしれないが、実物を見て音を聴いてもらえれば理解が深まると考えたため、フリガナは省略している。フォントは楽器の高級感の演出というよりは、親しみやすさを持ってもらうためにポップに仕上げた。



博物館資料ドキュメント 『ペンライト』

人文学部日本文化学科 1 年 坂本 渚月

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

この資料はペンライトである。このペンライトは、一般的なペンライトとは異なり砂時計のような形状であり、底が平らになっているため、自立が可能なペンライトである。この資料の素材については、所有者が素材等の書かれたタグを捨ててしまったために分からないが、その質感からライトの部分と持ち手の部分のどちらもプラスチックでできていると思われる。ライトの部分は透明なプラスチック、持ち手の部分は白いプラスチックとなっている。

●各部位サイズ&重さ

全長：約 22.0 cm ライト部分の長さ：約 12.0 cm 持ち手部分：約 10.0 cm

ライト上部の幅：約 6.5 cm くびれ部分（つなぎ目部分）の幅：約 3.2 cm

底面の幅：約 5.5 cm 重さ：約 130g

この資料は、ジャニーズ事務所所属の男性 5 人アイドルグループ「嵐」によって、2017 年から 2018 年にかけて行われたライブツアー『ARASHI LIVE TOUR 2017-2018「untitled」』で販売されたペンライトである。

このペンライトは、ライブツアーのグッズであることから、ライト部分にはツアー名の「ARASHI LIVE TOUR 2017-2018 untitled」と書かれており、「untitled」が大きく、「ARASHI LIVE TOUR 2017-2018」は小さくデザインされている。持ち手部分にはスイッチが上下に 2 個ついている。上のスイッチは横スライド式の電源のスイッチであり、OFF と ON の表記もされている。下のスイッチは色を変える際に使用、または無線との接続の際に使うスイッチとなっている。そして、この下のスイッチを使って手動で変えられる色は白・赤・青・緑・黄・紫の全部で 6 色となっている。また、持ち手の下部には何もついていない空間があるが、これはストラップを着けるためのものと思われる。

持ち手部分の裏面を見ると、上の方に「FreFlow」と書いてあるが、これは Sony Music の LED ライト無線制御システムの登録商標「FreFlow (フリフラ)」のことを指しており、このペンライトではフリフラが使用されていることがわかる。正面から見た持ち手の下部には嵐のロゴマークがついているが、これはフリフラとの接続の際に使うものである。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

所有者は、2017 年 11 月 19 日に嵐の五大ドームツアー『ARASHI LIVE TOUR 2017-2018「untitled」』のために札幌ドームを訪れた際、札幌ドーム駐車場に位置する物品販売エリアで、このペンライト購入した。また、価格は 2,500 円であった。このペンライトは、2017

年から 2018 年にかけて行われたライブツアーのみで販売されていた限定のモノであるため、現在では販売されていない。

このペンライトは袋で包装されており、さらに使用方法や素材などが記載されていた紙がついていたが、購入したその日にペンライトを使用し、それ以外の紙や袋は捨てしまったため、ペンライトのみが残った。

このペンライトには、一般的なペンライトによくある、手首にかけることで落下を防ぐストラップがついていないが、くびれている部分が持ちやすく落とす心配が少ないものである。

ちなみに、嵐のライブツアーはいつもグッズの種類が非常に多く、ツアーごとのコンセプトに忠実なものとなっている。ライブツアー『ARASHI LIVE TOUR 2017-2018「untitled」』のコンセプトは、「無題・未完」といったものであり、白・黒をベースとして色を多く使わず、飾らないシンプルなデザインで「無題・未完」というコンセプトを表していると思われる。

コンディション・レポート (Condition Report)

所有者は購入した日、2017 年 11 月 19 日の 1 日のみ、さらに公演時間 3 時間ほどしか使用せず、その後は一度も使用せずにインテリアとして部屋に飾っていた。そのため購入から 4 年以上経った現在も電源を入れるとペンライトとして使うことが可能である。さらに、目立った汚れやキズは見られない。また、部屋の中に置いていたため太陽光に当たらず、プラスチックの変色なども見られない。これらのことから、資料として良い状態であることがわかる。

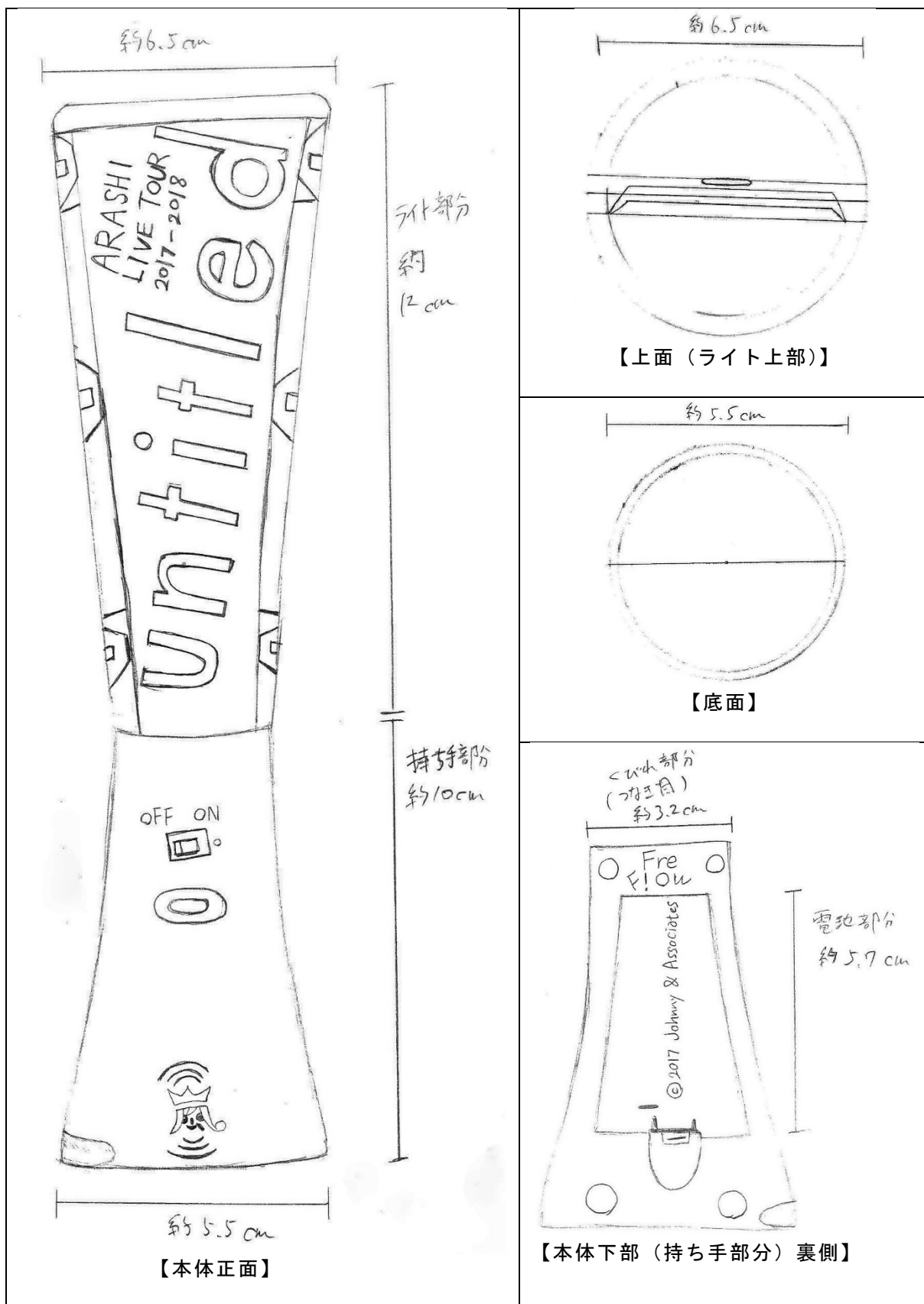
リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

この資料の保存の際に注意することは、光が当たることによる変色、ペンライトに内蔵される機械類の破損である。

光が当たることによる変色を防ぐためには、直接光が当たらないような暗所での保管が必要となる。内蔵されている機械類の破損を防ぐためには、水気・火気・磁気のないところでの保存が必要となる。これは、水・熱・磁石などの影響を受けると機械が狂ってしまったり、壊れたりしてしまう可能性があるからである。

さらに、保存の際は、電池の液漏れが起こらないように電池を抜いておく必要である。ペンライト自体の破損を防ぐために、衝撃を吸収する素材でくるみ、本体だけでは細く安定しないのでクッションとなるアシッドフリーの紙をつめた収納用ボックスに収納する。

イラストレーション (Illustration)



ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

資料を扱う際に、指紋や手汗がついてしまうと、資料の素材が劣化してしまう恐れがある。そのため資料を扱う際には、素手ではなく布製の手袋を使用することが重要である。

この資料は落としてしまうと割れたり、キズが付いたりしてしまう恐れがあるため、取り扱う際には注意することが必要である。

この資料は透明と白なので汚れがつくと目立ってしまうため万が一、汚れが付着してしまった際には早急に専門家に相談し、資料に影響を与えない方法で汚れを落とすことが大切となる。

尖ったものや、刃のついているもの、硬いものは当たってしまうと割れたり、キズが付いたりしてしまうことが考えられるため、そういったものを近づけないように配慮する。

レーベル (Label)

ペンライトは、『ARASHI LIVE TOUR2017-2018「untitled」』のコンセプトである、「無題・未完」に合うように作られており、何にでも染まることのできる白で統一された、余計な飾りが一切ないデザインとなっている。このことから、この展示に添えるレーベルもシンプルで色を使いすぎないものとした。

資料の名前部分は、嵐5人のメンバーカラーとし、ペンライトのカラーともリンクさせることで、シンプルなレーベルの中でも資料名が見てすぐに分かるように目立たせた。また、博物館で他のグッズと共に展示されることが考えられるため、どのライブツアーのグッズかをしっかり記載し、特徴なども分かるようにした。

読む側が固すぎず柔すぎない印象を受けるように、フォントはゴシック体を使用した。

資料名の文字を大きくし、文字自体を細めの黒い線で囲うことで目立つようにした。

レーベル自体には薄いグレー（白、背景1、黒+基本色5%）を使った主張しすぎないシンプルな背景にし、全体に統一感を出した。

ペンライト

この資料は、ジャニーズ事務所所属の男性5人アイドルグループ嵐のライブツアー『ARASHI LIVE TOUR 2017-2018「untitled」』で販売されていたペンライトである。色は、手動で6色、「フリフラ」という無線制御システムでは100万色に光らせることが可能。一般的なものとは異なった自立可能なペンライトであり、インテリアにも使えるほどのシンプルな洗練されたデザインとなっている。砂時計のような形が特徴。現在は販売されていない。

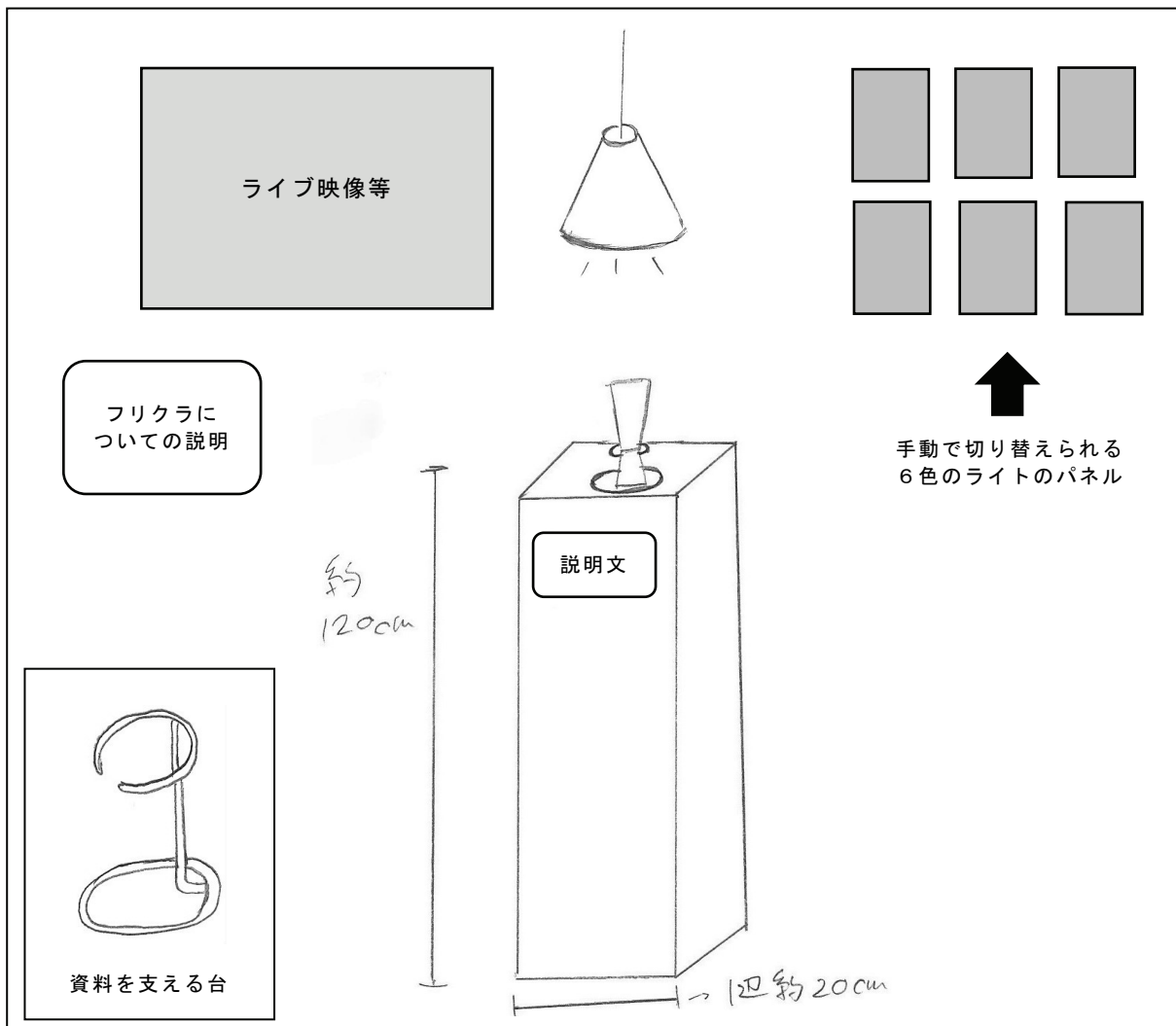
エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

この資料は、嵐のライブツアー『ARASHI LIVE TOUR 2017-2018「untitled」』のグッズであるということ、実際に見ることで分かりやすく伝えることのできる展示を目的とする。嵐ファンを中心とした、中学生以上の人をターゲットにした展示とする。

ペンライト本体は四角い台座の上に設置する。この展示では中学生以上の人を対象としたため、この台座の高さは約 120 cm、幅は一辺 20 cmほどの長方形の台座とする。正面と裏のどちらも見てほしいので、台座の上に立てて展示する。この際、倒れないように固定するために、見るのを邪魔しない透明な素材でできた道具を使う(図参照)。部屋は少し暗めにし、台座の上から間接照明の優しい光で照らす。

台座の周辺には、全 6 色のライトを 1 色ずつ撮影し、パネルにして設置する。さらに、実際のライブ映像の中の、観客が映っているシーンや、フリフラで制御されているシーンなどを集めた動画を、モニターを使って流す。

フリフラが何かわからない人のために、フリフラについて説明するパネルを設ける。



博物館資料ドキュメント 『鍵の形をしたキーホルダー』

人文学部日本文化学科 1年 吉川 里咲

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 1

資料：鍵の形をしたキーホルダー

製造元：不明

製造年：不明

素材：

- ・本体……………プラスチック
- ・中心に貼ってあるシール……不明
 - *普通紙ではないが恐らく耐水
 - *光沢紙のような艶は無い
- ・ボールチェーン……………不明
 - *一般的なボールチェーンだと思われる

サイズ：

- ・本体……………縦：約 7.5 cm 厚さ：0.5 cm
- ・中心に貼ってあるシール……直径：約 3.0 cm
- ・ボールチェーン……………長さ：約 14.0 cm

特徴：

- ・鍵の形は直径約 4.4 cmの円から、縦約 2.6 cm、横約 1.0 cmの棒がついている
- ・その棒の(資料から見て)左に縦約 0.7 cm幅約 0.5 cmの突起が二つ付いている
- ・シールには「FROM PAPER TO PLATINIUM」「70YEARS」「SCHULZ」という英語が書かれている
- ・鍵の頂点には縦約 0.5 cm、横約 0.6 cm、直径約 0.3 cmのボールチェーンを通すための穴が開いている

この資料は薄い灰色のプラスチックで作られている鍵の形をしたキーホルダーである。鍵の中心が直径約 3.0 cm、深さ約 0.1 cm窪んでおり、そこには直径約 3.0 cmのシールが貼られている。このシールには白地に黒の文字で「FROM PAPER TO PLATINIUM」「70YEARS」「SCHULZ」と書かれている。また、「SCHULZ」の文字は他の文字とは違うフォントで書かれており、「70 YEARS」の「0」の中にはスヌーピーが描かれている。

裏面には「©2019PNTS」の文字が浮き出ている。

オブジェクト・ディスクリプション・レポート (Object Description Report) - 2

この鍵型キーホルダーは現所有者である吉川里咲が、2021年8月19日(木)に大丸札幌店7階ホールで2021年8月4日(水)～23日(月)まで開催されていた「スヌーピー タイムカプセル展」の入口カウンターで入場券と共に貰ったものである。

「スヌーピー タイムカプセル展」とは、チャールズ M. シュルツ原作のコミック『PEANUTS』の生誕70周年を記念して開催された展覧会であり、タイムカプセルがテーマとなっている。その展覧会の中で用意された様々な仕掛けの一つに入口カウンターで貰った鍵型キーホルダーを使用するものがある。

この鍵型キーホルダーは「コミック思い出探し」の鍵という。「スヌーピー タイムカプセル展」の会場内に設置された5つのイラストを探し、そこにある鍵穴に「コミック思い出探し」の鍵をかざすという仕掛けである。また、展示の最後にあるパネルに鍵をかざすことでコミックイラストを1枚貰える仕組みにもなっている。この鍵型キーホルダーは全2種類、コミックイラストは全5種類存在している。どちらも、自ら選ぶことはできない。

現所有者である吉川里咲は「鍵」を使う仕掛けがどのようなものなのかを知りたかっただけであってスヌーピーが好きなのわけではないようだ。実際に鍵の仕掛けを体験してみたが、どのような仕組みで動いているのかは理解できなかったようだ。

コンディション・レポート (Condition Report)

現所有者である吉川里咲が2021年8月19日に入手してから2022年1月22日現在まで所有期間は1年未満である。実際にキーホルダーとして使われていなかったため傷や欠けは見当たらず、中心に貼られているシールにも汚れや日焼けは見当たらない。しかし、会場で貰った入場券・チラシ・キーホルダーの使用方法が書かれた紙・コミックイラストはクリアファイルに保管していたが、キーホルダー自体は本棚の中にある本の上に置かれていたため、ほこりがかぶっていた。

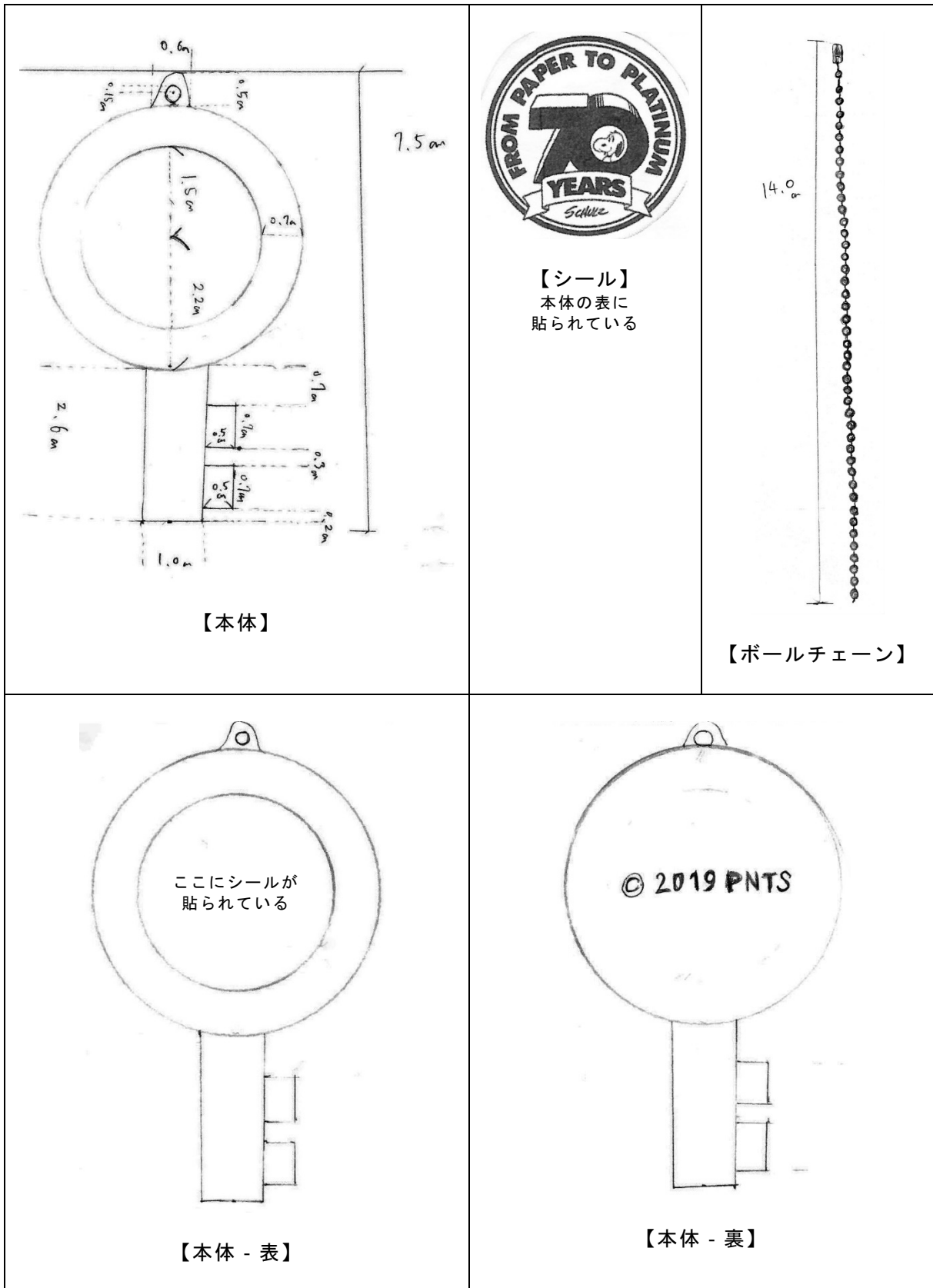
リクワイアド・エンバイロメント (Required Environment)

この資料を保存する際に、中央に貼られているシールの変色、劣化・ボールチェーンの劣化に注意すべきである。

シールの変色は自然光や紫外線を含む光源を避けた場所に保管することで防ぐ。また、シールの表面の耐水性が不明であるため、資料が濡れない場所であり、湿度が高くない場所で保管する必要があると考える。さらにシールの粘着剤を劣化させないために、極端な高温は避けるべきである。

ボールチェーンは磁石に反応するため金属を含んでいることが分かる。したがって、酸化、汚れや水分から錆が生じる可能性がある。水分・多湿を避ける必要がある。

イラストレーション (Illustration)



ハンドリング・インストラクションズ (Handling Instructions)

この資料の本体は、プラスチックで出来ており、凹凸が多いため、乱雑に扱うとすぐに欠けやキズが生じる。また、シールやボールチェーンに汚れがついてはいけないため、触る際には布製の手袋を着用する必要がある。

ボールチェーンが通っている穴が、ボールチェーンに当たることで欠ける可能性があるため、資料を持ち運ぶ際には、ボールチェーンではなくキーホルダーの本体を持つ必要がある。

この資料は本体が薄い灰色、シールの部分が黒と白であり汚れが付くと非常に目立つため注意が必要である。プラスチック、シール（粘着質の紙）、金属と性質が異なる複数の素材が組み合わさっているため、汚れの除去は非常に困難な作業となる。よって、保存環境同様、汚れにも細心の注意を払って取り扱わなければならない。

エキジビット・マウント・デザイン (Exhibit Mount Design)

この資料は大丸札幌店 7 階ホールで 2021 年 8 月 4 日(水)～23 日(月)まで開催されていた「スノーピー タイムカプセル展」にて、来場者全員が貰えるものであり、会場の中にある仕組みの一つを楽しむための道具でもある。

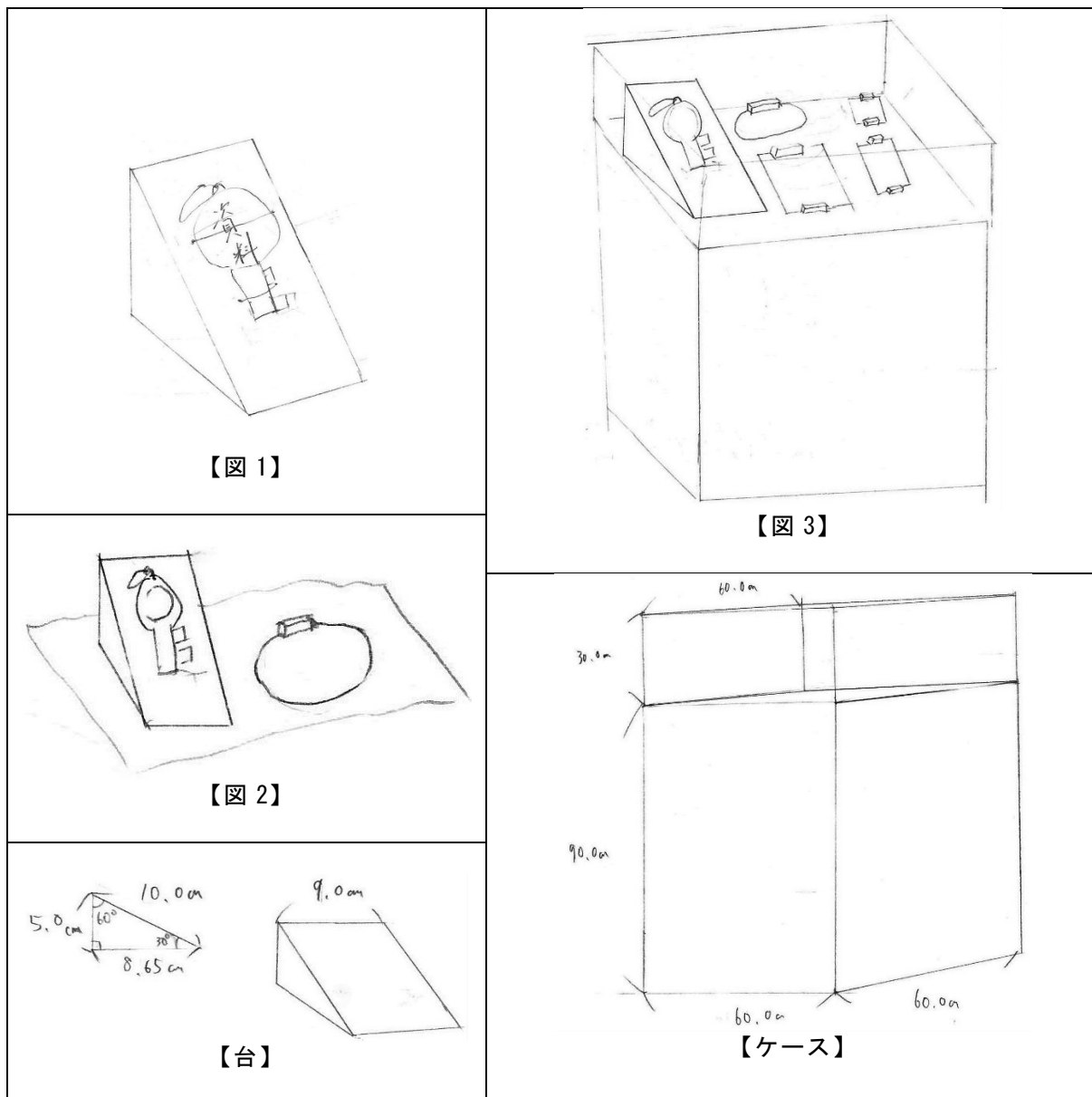
この資料は、スノーピーが関わっている事、鍵の形をしている事を伝えることが重要である。したがって、キーホルダーを斜めに展示する。(図 1) 本体が比較的小さいため、シールのデザインを五倍に拡大した図を隣に置く。(図 2) この資料だけでは、伝わる情報が少なすぎるため資料の他に会場で貰った入場券、チラシ、キーホルダーの使用方法が書かれた紙、コミックイラストを近くに展示する。(図 3)

ケース：

- ・本体……………縦 60.0 cm 横 60.0 cm 高さ 120.0 cm
 - ・ケースのガラス部分……………縦 60.0 cm 横 60.0 cm 高さ 30.0 cm
 - ・ケースの下部分……………縦 60.0 cm 横 60.0 cm 高さ 90.0 cm
- ＊鍵の色とシールの色の区別がつくように、下部分とケースの中は白色に統一する
- ＊展示中に外部からの衝撃でケースが破損して資料を傷つけることが無いように、丈夫な素材で作られたケースを使う

資料を置く台：

- ・縦 8.65 cm、横 9.0 cm、高さ 5.0 cm、斜辺 10.0 cm
- ＊資料が滑り落ちないように 2ヶ所をテグスのような透明な糸で止める
- ＊資料を傷つけないために、資料を設置する面はクッション性のある素材にする



レーベル (Label)

鍵型キーホルダー (スヌーピーver.)

現所有者 吉川里咲

大丸札幌店7階ホールで2021年8月4日(水)~23日(月)まで開催されていた「スヌーピー タイムカプセル展」にて、来場者全員に配られた鍵型キーホルダー。全二種類存在しており、「O」の部分に「スヌーピー」か「チャーリー・ブラウン」のどちらかが描かれている。

会場の中にある仕組みの一つを楽しむための道具でもあった。

編集後記

本学の学芸員課程を卒業した古田くるみさんが、2021年4月に美唄市郷土史料館の学芸員に採用された。また、本年4月からはもう1人蟬塚咲衣さんが小樽市総合博物館の学芸員となる。2人とも大学院に在籍し、正規雇用のフルタイム学芸員であるという共通点がある。本学では、2年続けての学芸員採用は初めてのケースである。地域単位の小規模博物館は人件費が限られ、非正規雇用が増え、学芸員は不安定な立場で働くことを強いられているが、これは道内に限らず日本国内どこでも目につく実態である。指定管理者よりも条件が恵まれているはずの市町村の自治体直営のミュージアムにおいても、半年更新を主とした契約が多い。非正規雇用依存しがちな現状は、運営するミュージアムに配置する人員を、委託期間や年度予算に応じて確保しようとして起きる現象であり、非正規雇用の職員は「ヒト」という容易に代替可能な存在として扱われているとの指摘がある（菊地真 2019「博物館学芸員の非正規雇用と労働の流動化」人文地理学会大会）。社会教育の導き手であるはずの司書、学芸員、社会教育主事は、専門的な知識・技能を用いて地域住民とともに多彩な活動を実践することが求められている。安定的な労働形態が常態化し、安心して能力を発揮できるような職場になることを願ってやまない。

2021年11月17・18日の両日、公益財団法人日本博物館協会主催の第69回全国博物館大会が、札幌市の「かでる 2.7」を会場に開催された。北海道で全国博物館大会が開催されるのは1993年以来実に28年ぶりとなった。北海道博物館協会会長石森秀三氏の要請を受け、本学学芸員課程受講生28名が、準備期間を含め3日間、大会資料の仕分け、大会受付・案内、来場者の誘導、展示ブースや分科会会場の設営・運営・撤収業務など多岐にわたる業務を遂行し、その甲斐もあって大会を首尾よく終えることができたのは望外の慶びである。これも学芸員課程教育において日頃からご指導をいただいている教員1人ひとりのご尽力はもちろんのこと、学生たちの献身的な努力によるところが大きい。この場を借りて深謝したい。大会終了後には日本博物館協会事務局次長仲谷昌久氏から過分な感謝のお言葉(礼状)を頂戴した。学生たちにとっては、日本のミュージアムが直面する様々な課題について、いろいろなことを考えさせられる貴重な体験となったことは間違いないだろう。